(公財)北九州市芸術文化振興財団
委託調査

北九州芸術劇場
事業評価調査
［報告書］

11

2015年3月
ニッセイ基礎研究所

◎ はじめに

この報告書は、（公財）北九州市芸術文化振興財団から委託を受けて、ニッセイ基礎研究所が実施した「北九州芸術劇場　事業評価調査（その11）」の成果をとりまとめたものである。

近年、行財政改革や説明責任（アカウンタビリティ）への関心の高まりなどを背景に、政府や公共団体の施策や事業を評価する「政策評価」が広がっており、地方公共団体においても、政策評価から施策評価、事務事業評価という評価体系が定着している。しかし、文化施設や文化事業の評価には、その特性を踏まえた独自の評価体系や指標が必要であるという認識が広がり、各地で行われている評価も徐々に成熟したものとなりつつある。

北九州芸術劇場は、そうした動きに先立ち、2003年度の開館当初から独自の事業評価調査に継続的に取り組み、かつ、その成果を公開しており、公立文化施設の事業評価モデルとして全国から注目されている。

11年目にあたる2013年度調査では、継続調査として①劇場の運営データの分析、②主催事業および提携・協力事業公演の観客アンケート調査、③貸館利用に関するアンケート調査、④経済波及効果とパブリシティ効果の試算を実施した。その結果からは、これまでと同様に、北九州芸術劇場が着実に成果をあげ、北九州市の芸術文化の創造拠点・発信拠点として、鑑賞者や利用者から広く認知、支持されていることがうかがえる。また、今年度は⑤テーマ調査として、劇場職員研修としてスタッフ全員の出席のもとで行われた「北九州芸術劇場のこれまでの10年と、これからの10年」と題した講演・対談の記録を、プレゼンテーション資料を含めて掲載し、論点整理を行っている。

末筆ではあるが、2003年度以降、11ヶ年にわたり、この貴重な調査の機会を与えていただいた（公財）北九州市芸術文化振興財団、劇場スタッフの方々、ならびに調査にご協力いただいた観客や利用者の方々に心より感謝申し上げるとともに、本調査の成果が今後の北九州芸術劇場の運営に有効に活用され、より一層、意義のある事業や活動が展開されることを願うものである。

2015年3月
ニッセイ基礎研究所
芸術文化プロジェクト室

序章 調査研究の目的・内容と本報告書の構成

1.調査研究の目的・内容

(1) 調査研究の目的

本調査研究は、2003年8月に開館した北九州芸術劇場について、毎年、事業や運営の評価に関する調査を行うとともに、その調査結果に基づいて、より良い劇場運営のあり方を検討することを目的としている。

11年目にあたる2013年度は、03年度あるいは04年度から継続して実施している、次の4つの調査(「継続調査」)

①劇場運営に関する基礎データの収集・分析
②公演に来場した観客を対象としたアンケート調査による公演事業に関する評価
③貸館利用者を対象としたアンケート調査による施設利用に関する評価
④北九州芸術劇場の経済波及効果とパブリシティ効果の算出

を実施した。さらに、13年度の「テーマ調査」として、

⑤北九州芸術劇場のこれまでの10年と、これからの10年

と題した講演・対談を、劇場職員研修としてスタッフ全員の出席のもとで行われた。

(2) 調査の内容

①劇場運営基礎データの収集・分析

事業数、公演回数、入場者・参加者数、施設稼働率など、劇場運営に関する基礎データを整理し、03年度から11年間の経年分析を行なった。

②公演に来場した観客に対するアンケート調査

北九州芸術劇場の自主事業と提携・協力事業公演の観客を対象に、以下の2つの視点に基づいたアンケート調査を実施した(詳細は、p.資-1～資-54参照)。

- 事業評価の基礎となる北九州芸術劇場の施設やサービス、公演内容等に関する観客の満足度、ニーズの把握
- 劇場運営の基礎となる観客の属性(年齢、性別、居住地)、北九州芸術劇場における鑑賞行動(情報入手経路、鑑賞の動機、北九州芸術劇場での鑑賞回数)、日頃の鑑賞行動(鑑賞頻度、鑑賞ジャンル等)など、観客特性の把握

③貸館利用者を対象としたアンケート調査の分析

貸館利用者を対象に05年度から実施している「施設利用に関するアンケート調査」の結果について、13年度分をとりまとめた(詳細は、p.資-55～資-83参照)。

④経済波及効果、パブリシティ効果の把握分析

産業連関表を用いて、劇場の事業や運営がもたらす経済波及効果を試算するとともに、雇用効果の把握を行なった(詳細は、p.資-85～資-97参照)。また、パブリシティ効果について、その概要を整理し、金額換算による規模を算出した(詳細は、p.資-99～資-107参照)。

⑤北九州芸術劇場のこれまでの10年と、これからの10年

「北九州芸術劇場のこれまでの10年と、これからの10年」と題し、津村館長とニッセイ基礎

研究所の吉本の講演、及び対談を実施した。講演・対談の概要は、以下のとおり。（詳細は、p.資-109～資-136参照）。

日時	平成27年1月9日（金） 14:00 開始 16:30 終了
会場	北九州芸術劇場 6階 創造工房（稽古場）
対談者	津村 卓（北九州芸術劇場 館長） 吉本光宏（株式会社ニッセイ基礎研究所 研究理事）
調査報告	大澤寅雄（株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 准主任研究員）
進行	垂水健治（北九州芸術劇場 シアターコーディネーター／舞台技術課長）
内容	第1部｜北九州芸術劇場の構想と10年間の劇場運営について（津村） 第2部｜北九州芸術劇場の10年間と、社会情勢や文化芸術環境の変化（吉本・大澤） 第3部｜北九州芸術劇場の「次の10年」の課題や展望を考える（津村・吉本）

2．本報告書の構成

本報告書は、各調査結果の概要、ならびに事業評価の基本フレームと評価結果を整理した「本編」と、調査の詳細データ等を整理した「資料編」の二編から構成されており、それぞれの内容は以下のとおりである。

(1) 本編

本編は、それぞれ次の内容からなる6つの章によって構成されている。

- 「第1章 2013年度事業の概要と実績」
  劇場運営の基礎データならびに事業収支を整理した。
- 「第2章 観客の特性と観客からみた評価」
  自主事業と提携・協力事業公演に来場した観客に対するアンケート調査の結果から、①観客の属性、②公演や劇場に関する意見（公演やサービスへの満足度など）、③日頃の鑑賞行動について、整理・分析を行った。
- 「第3章 貸館利用者からみた評価」
  貸館利用者に対するアンケート調査の結果から、①劇場の施設、運営や対応に関する満足度、②重視項目について、調査結果の整理・分析を行った。
- 「第4章 経済波及効果とパブリシティ効果」
  産業連関表を用いた経済波及効果、雇用効果、新聞掲載記事の金額換算によるパブリシティ効果を算出した。
- 「第5章 評価フレームに基づいた事業評価結果」
  第1章から第4章までの調査結果を総合的に分析するため、次の評価フレームに沿って調査や評価の結果、改善のポイントなどを整理した。

  A 劇場の設置目的:
  鑑賞系事業、創造系事業、普及系事業、市民文化活動支援、地域への貢献

  B 運営・管理: 場の提供・支援、施設のホスピタリティ・サービス、施設の維持管理

  C 経営: 経営体制、リサーチ＆マーケティング、経営努力

- 「第6章　北九州芸術劇場のこれまでの10年と、これからの10年」
  劇場職員研修会として2015年1月9日に行われた講演及び対談について、論点を整理し、主な発言内容を紹介した。

(2) 資料編

本編で整理・分析した調査の手法、結果などをとりまとめ、資料編として掲載した。

- 資料Ⅰ「観客調査結果」では、13年度の自主事業と提携・協力事業公演に来場した観客を対象に実施したアンケート調査結果を、設問ごとに整理した。
- 資料Ⅱ「貸館利用者調査結果」では、08年度～13年度の6ヶ年の調査結果を、設問ごとに整理した。
- 資料Ⅲ「経済波及効果」では、13年度の経済波及効果の基本構造、事業ごとの最終需要と消費支出など、経済波及効果、雇用効果算出のための分析資料を掲載した。
- 資料Ⅳ「パブリシティ一覧」では、金額換算の基礎となった13年度の新聞記事データの一覧を掲載した。
- 資料Ⅴ「劇場職員研修会の記録」では、2015年1月9日に行われた講演及び対談の記録を、プレゼンテーション資料を含めて掲載した。

◎ 調査研究体制

ニッセイ基礎研究所

吉本光宏（研究理事・芸術文化プロジェクト室長）

大澤寅雄（芸術文化プロジェクト室　准主任研究員）

太田真奈美（社会研究部　研究アシスタント）

北九州芸術劇場

事業評価調査

［本編］

第1章 2013年度事業の概要と実績

本章ではまず、事業評価の基本となる北九州芸術劇場の事業の概要、入場者数や稼働率、収支状況など、2013年度の事業の実績について、過去データとともに整理した。

1．事業の実績

まず、北九州芸術劇場の事業の基本方針と13年度の事業概要は次のとおりである。

(1) 事業の基本方針

北九州芸術劇場では、「創る」「育つ」「観る」をキーワードにした事業展開が行われている。それぞれの目的や考え方、事業の内容は次のとおりである。

- **[創る]**：北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、“ものづくりの街”北九州市をアピールし地域の活性化を促していく。
- **[育つ]**：アーティストを小・中学校等に派遣するアウトリーチ活動や劇場サポーター組織を通じてのヒューマンネットワーク作り等により、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域を育てながら地域とともに育っていく劇場を目指す。
- **[観る]**：見る楽しみを知ってもらうため、国内外のエンターテイメント性や芸術性の高い作品を招き、市民に様々な公演を提供する。

(2) 事業の内容と実績、入場者数

- 13年度もこうした3つのコンセプトに基づき、自主事業全体で、37本の事業・319回の公演・アクティビティが行われた。第1期（03年度～07年度）と第2期（08年度～12年度）の推移を見ると、09年度以降の学芸事業の実施回数が減少したことで、第1期に比べて第2期の公演数が減少しているが、公演事業の公演数に大きな変化はない（図表1-1）。
- 13年度では44,866人が公演鑑賞やアクティビティに参加し（図表1-2）、自主事業で総席数の設定のある公演事業の入場率は、89.5%となった（図表1-3）。
- 03年度からの自主事業における入場者数と入場率の経年の推移を見ると、入場者数は年度によって増減が大きいものの、入場率では8割以上を維持しており、09年度以降は9割前後で推移している（図表1-4）。

図表1-1 事業数・公演数の実績（03年度～13年度）

	創造事業		公演事業		提携・協力事業		オープニング企画		演劇祭		公演事業 計		学芸事業	総合計
	事業数	公演数	事業数	公演数	事業数	公演数	事業数	公演数	事業数	公演数	事業数	公演数	実施回数	
2003年度	3	35	15	35	5	8	2	2	2	9	27	89	219	308
2004年度	4	15	23	46	6	15	－	－	2	9	35	85	320	405
2005年度	6	45	24	42	6	13	－	－	2	7	38	107	297	404
2006年度	7	61	18	45	7	16	－	－	2	8	34	130	291	421
2007年度	5	24	22	49	11	28	－	－	3	8	41	109	283	392
第1期 平均	5	36	20	43	7	16	－	－	2	8	35	104	282	386
2008年度	8	41	15	33	5	12	－	－	1	28	29	114	279	393
2009年度	6	40	16	42	5	16	－	－	1	7	28	105	175	280
2010年度	5	21	17	39	9	25	－	－	1	17	32	102	178	280
2011年度	5	37	19	42	8	12	－	－	1	44	33	135	96	231
2012年度	5	22	18	43	9	20	－	－	6	17	38	102	203	305
第2期 平均	6	32	17	40	7	17	－	－	2	23	32	112	186	298
2013年度	4	21	17	46	9	30	－	－	7	22	37	119	200	319
累計	58	362	204	462	80	195	2	2	28	176	372	1,197	2,541	3,738

※2008年度より演劇祭を「北九州演劇フェスティバル」として開催。

図表1-2 入場者・参加者数の実績（03年度～13年度）

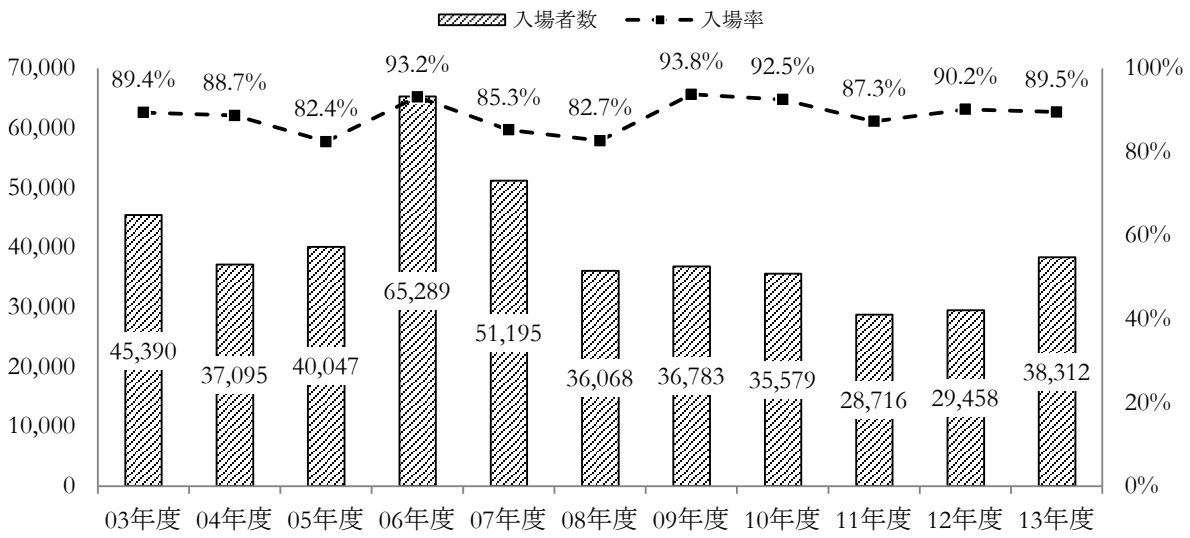
	創造事業	公演事業	提携・協力事業	オープニング企画	演劇祭	公演事業 計	学芸事業	総合計
2003年度	13,350	22,079	7,382	1,592	987	45,390	2,404	47,794
2004年度	3,292	26,361	6,211	－	1,231	37,095	4,734	41,829
2005年度	9,332	21,294	6,642	－	2,779	40,047	6,327	46,374
2006年度	27,107	29,813	7,259	－	1,110	65,289	6,758	72,047
2007年度	5,224	32,378	11,869	－	1,724	51,195	6,200	57,395
第1期 平均	11,661	26,385	7,873	－	1,566	47,803	5,285	53,088
2008年度	12,320	18,164	3,895	－	1,689	36,068	10,577	46,645
2009年度	12,841	19,439	3,947	－	556	36,783	5,889	42,672
2010年度	3,124	24,229	6,427	－	1,799	35,579	5,404	40,983
2011年度	10,846	14,036	2,229	－	1,605	28,716	3,568	32,284
2012年度	3,847	18,517	2,996	－	4,098	29,458	5,900	35,358
第2期 平均	8,596	18,877	3,899	－	1,949	33,321	6,268	39,588
2013年度	3,208	20,319	11,202	－	3,583	38,312	6,554	44,866
累計	104,491	246,629	70,059	1,592	21,161	443,932	64,315	508,247

図表1-3 総席数・入場率の実績（03年度～13年度）

	公演事業の入場者数の計（再掲）	総席数の設定のある公演事業の入場者数	総席数	入場率
2003年度	45,390	45,390	50,756	89.4%
2004年度	37,095	37,095	41,808	88.7%
2005年度	40,047	40,047	48,575	82.4%
2006年度	65,289	65,289	70,065	93.2%
2007年度	51,195	51,195	60,036	85.3%
第1期 平均	47,803	47,803	54,248	88.1%
2008年度	36,068	34,379	41,580	82.7%
2009年度	36,783	36,783	39,225	93.8%
2010年度	35,579	35,579	38,447	92.5%
2011年度	28,716	28,716	32,885	87.3%
2012年度	29,458	25,537	28,316	90.2%
第2期 平均	33,321	32,199	36,091	89.2%
2013年度	38,312	33,657	37,585	89.5%
累計	443,932	433,667	489,278	88.6%

※2008年度、2012年度、2013年度は、総座席数の設定をしていない公演を入場率の算出から除いている。

図表1-4 入場者数・入場率の推移（03年度～13年度）



- 以下、「創る」「育つ」「観る」それぞれの事業ごとに、事業の内容と実績をとりまとめた。（13年度事業の実績一覧を図表1-5に整理した。）

①創る：創造事業

- 「創る」に対応した創造事業では、
  - 北九州芸術劇場プロデュースとして、演劇界の第一線で活躍する演出家が北九州で選出した俳優と共に“北九州”を感じさせた「彼の地」
  - 市制50周年を迎えた「北九州」を舞台に、高齢者たちに地元の若手作家が思い出やエピソードを掘り起こした 「Re：北九州の記憶」
  - 市民参加型の創造事業である、合唱物語「わたしの青い鳥2013」
  - 演劇界の第一線で活躍する演出家を招き、地域の俳優によって国内外の魅力的な戯曲をリーディングとして上演する「リーディングセッション」

  といった事業が実施された。
- 「彼の地」は北九州（8回）、東京（3回）で公演が行われた。
- 13年度は4事業で21回の公演が行われ、入場者数は3,208人となっている。12年度と比べると、事業数、公演数、入場者数は若干の減少となっている（12年度の実績は5事業、22回）ものの、入場率では、12年度の82%から13年度では92%と大きく伸びている。
- 個別の入場率では「彼の地」の北九州公演で99%、リーディングセッションvol.22「続・世界の日本人ジョーク集」で97%となっている。創造事業ではすべての公演の入場率は80%を超え、市民からの支持の高さがうかがえる。（図表1-5）。

②育つ：学芸事業

- 「育つ」に対応した学芸事業では、
  - 劇場10周年を記念して、過去のシアターラボ（期間限定の劇団を結成し、舞台についての講座を受けた後、実際に演劇作品づくりを体験する企画）の卒業生による記念公演「シアターラボ・リターンズ」
  - 「アーティスト往来プログラム」として、演劇・ダンス分野から多彩な講師を招いた「ワークショップ」、「アウトリーチ」、「インリーチ」
  - 高校生や高校の演劇部顧問を対象に、大ホール、中劇場、小劇場、創造工房を活用した「高校生のための演劇塾2013」
  - 北九州市立美術館のコラボレーション企画として、劇場と美術館との合作ならではの特別企画「切り裂かれたキャンバス～『マネとマネ夫人像』をめぐって」
  - 劇場と同じ年の子どもたちの“自分史”を、子どもたち自身の朗読と、お芝居・歌・ダンスを組み合わせて創作した「『10才の子どもたち』～パフォーマンスキッズ・キタキュー～」
  - 創造・公演（アウトリーチやワークショップ）参加として、合唱物語「わたしの青い鳥2013」、「ダンスダイブウィーク」、「ハイバイ10周年記念ツアー『て』」、「月猫えほん音楽会2013《ワークショップ》」

  など、学芸事業全体では、創造参加も含め、17事業で200回のアクティビティが実施され、参加延人数・入場者数は6,554人となっている（図表1-5）。
- 12年度と比べると、アクティビティの回数はやや減少したものの、参加者数は増加している（12年度の実績は203回、5,900人）。
- 13年度の学芸事業は、劇場およびリバーウォーク北九州の開館10周年を意識しており、例年以上に積極的に地域との関係を開拓するような企画内容が多く見られる。

③観る：公演事業

- 「観る」に対応した主催公演事業では、蜷川幸雄の演出／監修のもと、これまで次々と話題作を送り出してきた彩の国シェイクスピア・シリーズ「ヴェニスの商人」をはじめ、NODA・MAP、山海塾、ナイロン100℃、中村恩恵×首藤康之などの人気の高い舞台芸術公演、「月猫えほん音楽会」や「大人も一緒に子どもたちの劇場シリーズ2013」といった子どもを対象とした公演など、幅広い観客層を対象とした公演が実施された。
- 09年度に新たに始まった北九州芸術劇場が注目する演劇人たちをバックアップする「ツドエmeets北九州」では、単なる招聘公演ではなく、劇場とカンパニーが人材・技術を交流させながらネットワークを広げ、カンパニーの事情に応じた柔軟な支援を行った。
- 全く異なる個性を持つダンサーが集まり、老若男女、どんな人でもダンスにふれることができるプログラムを揃えた「ダンスダイブウィーク」では、小劇場、リバーウォーク北九州、市内店舗などを会場に2週間かけて開催された。
- 公演事業では17作品が上演され、公演数は46回、入場者数は20,319人となっている。12年度と比べると、公演数、入場者数はともに増加している（12年度の実績は43回、18,517人）。公演事業の入場率は88%と高く、17本のうち11本は90%以上を確保している（図表1-5）。
- 提携・協力事業では、伝統芸能や小劇場・現代演劇など9事業が上演され、公演数は30回、入場者数は11,202人であった。12年度と比べると、公演数、入場者数ともに増加している（12年度の実績は20回、2,996人）。
- 創造事業、公演事業、提携・協力事業、フェスティバルを含めた公演事業全体の公演作品数は37本、公演数は119回、入場者数は38,312人である。公演事業の年間入場者数としては、11年度以降3カ年連続で増加している（図表1-4）。

図表1-5 北九州芸術劇場 自主事業実績一覧（13年度）

1 創造事業

	公 演 名	会 場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	北九州芸術劇場プロデュース／市民参加企画合唱物語 「わたしの青い鳥2013」	中劇場	7/14	1	639	509	80%
2	北九州芸術劇場リーディングセッションvol..22 「続・世界の日本人ジョーク集」	小劇場	8/31～9/2	3	384	372	97%
	北九州芸術劇場リーディングセッションvol.23 「グリムのような物語」	小劇場	10/12～14	3	360	325	90%
	計			6	744	697	94%
3	北九州芸術劇場＋市民共同創作劇 「Re：北九州の記憶」	小劇場	12/21～23	3	378	335	89%
4	北九州芸術劇場プロデュース「彼の地」北九州公演	小劇場	2/18～23	8	948	940	99%
	〃 東京公演	あうるすぽっと	3/7～9	3	762	727	95%
	計			11	1,710	1,667	97%
	計			**21**	**3,471**	**3,208**	**92%**

2 公演事業

	公 演 名	会 場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	3軒茶屋婦人会「ブライダル」	中劇場	4/13・14	2	1,000	769	77%
2	「マシーン日記」	中劇場	4/20・21	2	1,174	768	65%
3	シティボーイズミックスPRESENTS 「西瓜割の棒、あなたたちの春に、桜の下ではじめる準備を」	中劇場	5/4・5	3	1,812	1,440	79%
4	「木の上の軍隊」	大ホール	6/1・2	2	2,378	2,347	99%
5	大人も一緒に子どもたちの劇場シリーズ2013 —海外編— 「スティックマン」	小劇場	7/21・22	2	214	184	86%
	大人も一緒に子どもたちの劇場シリーズ2013 —海外編— 「ウィンド」	創造工房	7/21・22	3	195	187	96%
	計			5	409	371	91%
6	ナイロン100℃40th SESSION「わが闇」	中劇場	7/27・28	3	1,686	1,328	79%
7	「月猫えほん音楽会2013」	中劇場	8/1	1	612	591	97%
8	「ストリッパー物語」	中劇場	8/3・4	2	830	817	98%
9	ダンスダイブウィーク						
	リバダン!!お披露目モブ	リバーウォーク北九州1F	9/16	1	-	291	-
	レクチャープログラム「まさかアレまでダンスとは!? 世界を魅了する意外・驚愕のダンスを探る」	小劇場	9/16	1	-	13	-
	夕暮れダンス「ちょいとゴメンよ、じゃまするよ」	市内店舗	9/18・19	2	-	108	-
	ショーケース おやじflavors、砂連尾理、北村成美	小劇場	9/22	1	126	109	87%
	〃 セレノグラフィカ、大駱駝艦・ 田村一行	小劇場	9/23	1	126	121	96%
	もっとおやじカフェ	リバーウォーク北九州1F	9/22・23・28・29	4	-	1,101	-
	イデビアン・クルー新作公演「麻痺 引き出し 嫉妬」	小劇場	9/28・29	2	200	189	95%
	計			12	452	1,932	93%
10	彩の国シェイクスピア・シリーズ第28弾「ヴェニスの商人」	大ホール	10/5・6	3	3,705	3,191	86%
11	新国立劇場ダンス公演 中村恩恵×首藤康之「Shakespeare THE SONNETS」	中劇場	10/20	1	469	427	91%
12	ラッパ屋 第40回公演 「ダチョウ課長の幸福とサバイバル」	中劇場	11/16	1	598	357	60%
13	NODA・MAP 第18回公演 「MIWA」	大ホール	12/6～8	4	5,036	4,946	98%
14	ダンボール人形劇場 「お花のハナックの物語」	小劇場	1/12	1	178	170	96%
15	ツドエmeets北九州vol.10 劇団子供鉅人 子供鉅人の音楽劇 「HELLO HELL!!!」	小劇場	1/18・19	2	248	232	94%
16	山海塾「かがみの隠喩の彼方へ―かげみ」	中劇場	2/16	1	557	500	90%
17	劇トツ×20分	小劇場	3/16	1	136	133	98%
	計			**46**	**21,280**	**20,319**	**88%**

※客席数を定めていないプログラムは、入場率の算定には含めていない。

3　北九州演劇フェスティバル2014

1	「ドラロケ!!」ワークショップ～写真家、浅田政志とつくるドラマチックモノレール～	北九州モノレール内	11/4	1	-	21	-
	写真展示	まち小屋!!京町	3/1～16	-	-	792	-
2	レジラボ!!モノレール公演「DANCE/燈」	北九州モノレール内	3/1・2	2	186	177	
3	「まち小屋!!京町」 ～みんなで遊ぼう京町テーマパーク～						
	まちであそぼ	まち小屋!!京町および 京町銀天街	3/1～16	-	-	234	-
	こやであそぼ			-	-	612	-
	京町寄席☆スペシャル		3/9	-	-	180	-
	計			-	-	1,026	-
4	「まちなかリーディングマンス!!」						
	劇団C4 「オヤジの一番長い日」	京町店舗	2/15・16	3	75	70	93%
	のこされ劇場三 「穴場」	京町店舗	2/23	2	36	30	83%
	飛ぶ劇場「コーヒーと紅茶、そこに入れるべきミルクと砂糖について」	京町店舗	2/28・3/1	3	66	55	83%
	大猫座 「ぼっち。」	魚町店舗	3/2・8	2	70	70	100%
	超人気族「お後はよろしく。」	魚町店舗	3/8～10	3	45	39	87%
	計			13	292	264	90%
5	「リバダン！たたきこみワークショップ」	小劇場	3/8	1	-	61	-
6	近藤良平と踊る！フラッシュモブ「Do the mob！」	リバーウォーク北九州1F／小倉駅	3/8	1	-	468	-
7	セレモニアル・パレード	リバーウォーク北九州1F	3/16	1	-	724	-
	「パレードダンスを覚えようワークショップ」	創造工房	3/14～16	3	-	50	-
計				**22**	**478**	**3,583**	**92%**

※客席数を定めていないプログラムは、入場率の算定には含めていない。

4　提携等事業

	公　演　名	会　場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	イキウメ「獣の柱まとめ＊図書館的人生（下）」	中劇場	6/9	1	382	310	81%
2	ハイバイ10周年記念ツアー「て」	小劇場	6/11～13	3	480	355	74%
3	LIVE POTSUNEN2013「P＋」	中劇場	6/14～16	4	2,496	2,495	100%
4	春風亭小朝独演会（協力公演）	中劇場	9/29	2	1,400	1,078	77%
5	飛ぶ劇場 vol.34「大砲の家族」	小劇場	10/3～6	6	600	485	81%
6	マームとジプシー「モモノパノラマ」	小劇場	12/14・15	3	354	275	78%
7	「シダの群れ 第三弾　港の女歌手編」	大ホール	12/21～23	5	5,980	5,601	94%
8	南河内万歳一座「満月～みんなの歌シリーズより～」	小劇場	2/1・2	3	318	285	90%
9	MONO第41回公演「のぞき穴、哀愁」	小劇場	3/1・2	3	346	318	92%
計				**30**	**12,356**	**11,202**	**91%**

合計（創造・公演・提携・協力事業）	119	37,585	38,312	90%

5　学芸事業

	事　業　名	会　場	実施月	回数	対象	受講（入場）者数	参加延人数・入場者数
1	北九州芸術劇場×北九州市立美術館分館「切り裂かれたキャンバス～『マネとマネ夫人像』をめぐって」 公演	北九州市立美術館分館	6/15~23の毎週土日	8	一般	504	475
2	「チャレンジ！えんげき2013」ワークショップ	小劇場ほか	7/23~28	6	小学生	20	120
	発表公演	小劇場	7/28	1	一般	87	87
	計			7		107	207
3	「高校生のための演劇塾2013」 戯曲講座	大ホール・中劇場・小劇場・創造工房	7/29~8/1	4	高校生・顧問	3	9
	夏期講座		8/7~9	3		103	306
	阿部初美　演出ワークショップ		8/2~4	3		9	27
	桑原裕子　番外編ワークショップ		1/18	1		15	15
	計			11		130	357
4	北九州芸術劇場10周年　夏のバックステージツアー2013 劇場探検隊2013	大ホール	8/21～23	8	小学生～一般	268	268

5	シアターラボ・リターンズ（稽古・仕込み）	創造工房・小劇場ほか	10/21～11/15	29	地域の若手表現者	17	455
	（公演：「みつことコンビニ、大臀筋。」）	小劇場	11/16・17	3	一般	254	254
	《ステップアッププログラム》 ①バカボンド座（仕込み）	創造工房	5/8～12	5	（参加者）地域の若手表現者（入場者）一般	13	39
	（公演：「見晴るかす金鳳花」）					89	89
	②だーのダンス（仕込み）		7/3～7	5		10	10
	（公演：「とんガール」）					111	111
	③ショーデン隊（仕込み）		10/16～20	5		14	42
	（公演：「わが腹」）					214	214
	計			47		722	1,214
6	アーティスト往来プログラム 講師：砂連尾理（ダンス） ワークショップ	（社福）あゆみの会	9/24	1	あゆみの会職員	16	16
	講師：有門正太郎プレゼンツ（演劇）アウトリーチ	槻田小学校	10/7・11/21	1	小学3年生	72	72
		富野小学校	10/17	1	小学3年生	42	42
	講師：阿部初美（産み育てを考える）ワークショップ	創造工房	10/9～11/20	8	一般	20	80
	講師：セレノグラフィカ（ダンス）アウトリーチ	門司中央小学校	10/30・31	2	小学5年生	38	75
	ワークショップ（インリーチ）	大ホール	11/1	1	財団職員	18	18
	ワークショップ（インリーチ）	ウェルとばた	11/2	1	北九州市障害芸術祭事務局関係者	13	13
	アウトリーチ	桜ヶ丘小学校	12/2・3	2	小学3年生	42	84
	ワークショップ	若者応援センターYELL	12/13	1	一般	10	10
	ワークショップ（パフォーマンス）	北九州市障害芸術祭	12/14	2	一般	63	63
	講師：田上豊（演劇）アウトリーチ	中原小学校	11/8・11・12	3	小学6年生	48	144
	アウトリーチ	南丘小学校	11/20・21	2	小学5年生	46	92
	ワークショップ	若者応援センターYELL	2/5～7	3	一般	26	78
	計			28		454	787
7	劇場塾2013 オープンクラス 基礎講座	小劇場・中劇場・創造工房ほか	10/24	1	一般・学生・ホール関係者等	75	75
	劇場制作クラス		11/14	1		15	15
	地域文化コーディネートクラス		11/21	1		14	14
	舞台技術講座 照明編		11/26・27	2		57	114
	計			5		161	218
8	北九州芸術劇場10th Anniversary「10才の子どもたち」～パフォーマンスキッズ・キタキュー～《ワークショップ》	小劇場	3/24～30	10	10才の子どもたち	17	136
	発表公演		3/30	1	一般	148	148
	計			11		165	284
9	東筑紫学園高等学校演劇類型との連携事業	東筑紫学園高等学校、北九州芸術劇場ほか	通年	17	東筑紫学園高校生	15	255
10	地域のアートレパートリー創造事業 「近藤良平とつくる！『リバダン』」《ワークショップ》	大ホール	4/18	1	リバーウォーク北九州で働く人	55	55
	リバーウォーク北九州10周年記念事業発表セレモニー	リバーウォーク北九州1F	4/19	1		30	30
					一般（観覧者）	350	350
	近藤良平と踊るリバダン！ワークショップ	中劇場	7/9	1	リバーウォーク北九州で働く人	45	45
	計			3		480	480
【創造・公演（アウトリーチ＆ワークショップ等）参加】							
1	ハイバイ10周年記念ツアー「て」《制作ワークショップ》	創造工房	4/5	1	制作志望経験者	14	14
	《演技ワークショップ》		4/5・6	2	俳優志望経験者	33	66
	計			3		47	80
2	ダンスダイブウィーク おやじフレーバーズがコンテンポラリーダンスを踊る企画	創造工房	4/27~29, 7/12~14, 9/6~7	8	一般男性	6	48
	リバダンお披露目モブ ワークショップ	小劇場	9/16	1	リバーウォーク北九州で働く人	40	40
	もっとおやじカフェ ワークショップ	創造工房	9/7～21	7	一般	15	105
	田村一行ワークショップ		9/24	1		22	22
	砂連尾理ワークショップ		9/25	1		21	21
	計			18		104	236

3	合唱物語「わたしの青い鳥」2013 《ワークショップ》	中劇場ほか	5/31～7/13	14	小学生～一般	108	1,448
	《アウトリーチ》	貴船小学校	6/14	1	小学生	49	49
	計			15		157	1497
4	「ストリッパー物語」いのうえひでのり流つかメソッド《ワークショップ》	大ホール	7/25～27	3	演劇経験者	12	36
	《発表公演＆アーティストトーク》		7/27	1	一般	50	50
	計			4		62	86
5	月猫えほん音楽会2013《ワークショップ》	創造工房	7/31	1	親子	14	14
6	北九州芸術劇場＋市民共同創作劇「Re:北九州の記憶」《アウトリーチ》	特別養護老人ホームひだまり	12/13	1	施設関係者	17	17
	内藤裕敬　戯曲講座《ワークショップ》	創造工房	6月・8～9月	12	演劇経験者	5	60
	計			13		22	77
7	北九州芸術劇場プロデュース「彼の地」関連企画 語りの広場	創造工房	2/8	1	一般	19	19
計				**55**		**425**	**2,009**

合計（学芸事業）	200		3,431	6,554

総　合　計	**319**		**44,866**

④貸館事業

- 貸館事業では、市主催事業、財団主催事業も含め、13年度に公演や講演など、計224事業が開催された。公演・講演数は307回、貸館事業の入場者数は152,576人となっている。

⑤利用者数、利用件数

- 観客だけではなく、主催事業の出演者や関係者、貸館事業の利用者などを含めた北九州芸術劇場の利用者数、利用件数は図表1-6のとおりで、13年度には自主事業、貸館事業合わせて1,729件の利用があり、利用者数は約28万人となっている。そのうち、自主事業での利用件数は688件、利用者数は約5万4,000人。貸館事業での利用件数は1,041件、利用者数は約23万人である。
- 前年度と比べて自主事業の利用件数は増えて、貸館事業は減っている。自主事業と貸館事業を含めた合計は、利用件数、利用者数がともに増えている。
- 利用者数と利用件数について第1期と第2期の平均を比較すると、利用者数、利用件数ともに自主事業での減少、貸館事業での増加となっており、全体として利用者数と利用件数が増加していることが分かる。
- 中劇場、小劇場のそれぞれで、第2期の利用者数・利用件数の平均が、第1期を上回っているが、大ホールに関しては、利用件数の平均は第2期が第1期を上回っているものの、利用者数に関しては第2期が第1期を下回っている。

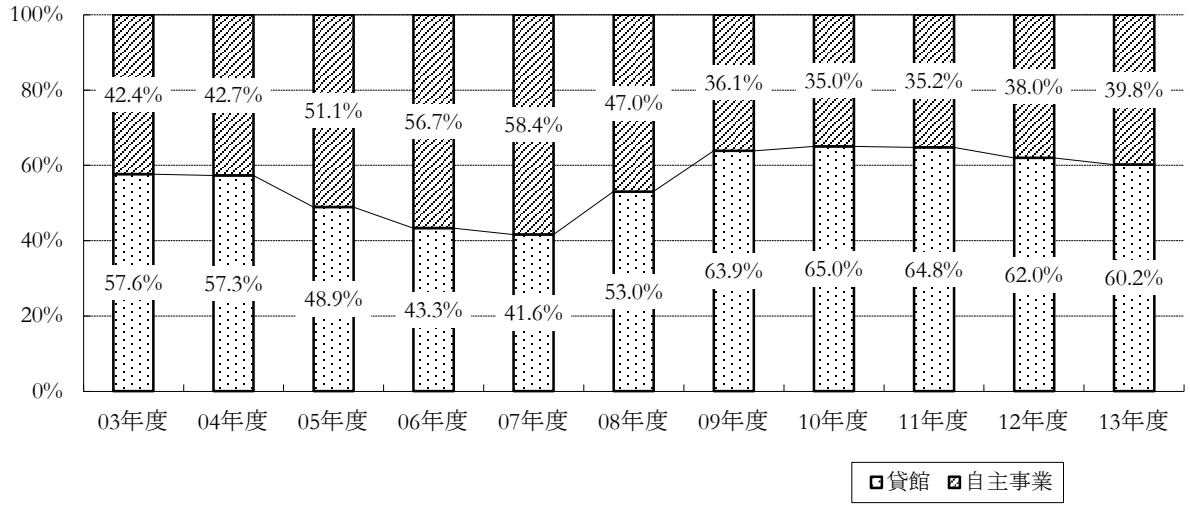
図表1-6 利用者数、利用件数（03年度～13年度）

	大ホール						中劇場					
	自主事業		貸館事業		合計		自主事業		貸館事業		合計	
	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数
2003年度	23,937	66	93,100	205	117,037	271	22,890	143	41,524	145	64,414	288
2004年度	22,445	87	175,273	482	197,718	569	29,970	242	71,901	325	101,871	567
2005年度	13,034	102	160,673	467	173,707	569	33,153	289	55,644	229	88,797	518
2006年度	26,027	139	134,966	382	160,993	521	29,814	298	55,050	244	84,864	542
2007年度	34,015	186	132,444	381	166,459	567	29,182	325	58,491	237	87,673	562
第1期　平均	23,892	116	139,291	383	163,183	499	29,002	259	56,522	236	85,524	495
2008年度	17,877	134	133,686	365	151,563	499	17,699	217	77,324	327	95,023	544
2009年度	7,625	64	138,611	415	146,236	479	22,087	213	86,166	369	108,253	582
2010年度	21,429	104	155,767	441	177,196	545	16,140	159	88,614	367	104,754	526
2011年度	2,979	25	163,922	503	166,901	528	20,838	230	70,958	319	91,796	549
2012年度	10,696	80	139,621	470	150,317	550	18,158	197	75,782	340	93,940	537
第2期　平均	12,121	81	146,321	439	158,443	520	18,984	203	79,769	344	98,753	548
2013年度	23,017	131	131,814	452	154,831	583	15,696	158	83,956	379	99,652	537
累計	203,081	1,118	1,559,877	4,563	1,762,958	5,681	255,627	2,471	765,410	3,281	1,021,037	5,752

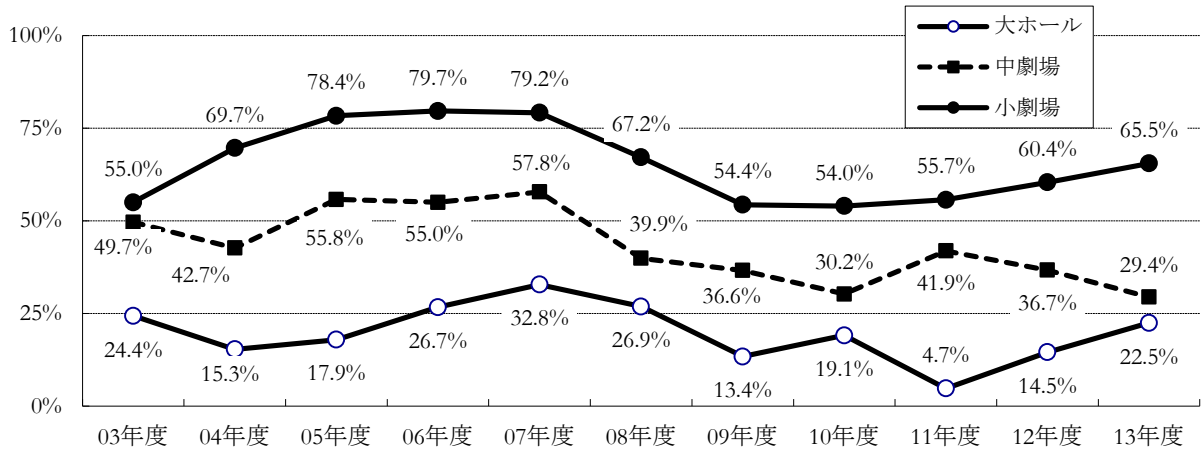
	小劇場						利用者数・利用件数の計					
	自主事業		貸館事業		合計		自主事業		貸館事業		合計	
	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数	利用者数	利用件数
2003年度	7,402	121	10,769	99	18,171	220	54,229	330	145,393	449	199,622	779
2004年度	16,996	404	13,626	176	30,622	580	69,411	733	260,800	983	330,211	1,716
2005年度	14,592	471	10,478	130	25,070	601	60,779	862	226,795	826	287,574	1,688
2006年度	15,651	573	8,853	146	24,504	719	71,492	1,010	198,869	772	270,361	1,782
2007年度	17,837	564	10,772	148	28,609	712	81,034	1,075	201,707	766	282,741	1,841
第1期　平均	14,496	427	10,900	140	25,395	566	67,389	802	206,713	759	274,102	1,561
2008年度	14,661	462	17,281	226	31,942	688	50,237	813	228,291	918	278,528	1,731
2009年度	12,873	318	18,186	267	31,059	585	42,585	595	242,963	1,051	285,548	1,646
2010年度	12,457	316	16,967	269	29,424	585	50,026	579	261,348	1,077	311,374	1,656
2011年度	11,947	337	19,011	268	30,958	605	35,764	592	253,891	1,090	289,655	1,682
2012年度	12,954	368	18,014	241	30,968	609	41,808	645	233,417	1,051	275,225	1,696
第2期　平均	12,978	360	17,892	254	30,870	614	44,084	645	243,982	1,037	288,066	1,682
2013年度	15,563	399	13,088	210	28,651	609	54,276	688	228,858	1,041	283,134	1,729
累計	152,933	4,333	157,045	2,180	309,978	6,513	611,641	7,922	2,482,332	10,024	3,093,973	17,946

- 自主事業と貸館事業の比率を利用件数ベースでみると、13年度は、自主事業が39.8%、貸館事業が60.2%と、貸館事業の利用割合が高くなっている（図表1-7）。
- ホールの規模別にみると、大ホールで貸館事業での利用が多く、中劇場と小劇場で自主事業の利用が多いことは、03年度からの変わらない傾向となっている。12年度に比べて大ホールと小劇場で自主事業利用の比率が伸びている（図表1-8）。
- 小劇場の自主事業比率が高いのは、リーディングセッションやプロデュース公演をはじめとする創造事業・創造参加の場として、中劇場では幅広い観客層を対象とした人気の高い公演事業に活用しているためであり、3つの劇場それぞれの役割と用途が明確になっているものと考えられる。

図表1-7 自主事業・貸館事業比率 ［件数ベース］（03年度～13年度）



図表1-8 ホール別の自主事業比率 ［件数ベース］（03年度～13年度）



(3) 施設稼働率

- 北九州芸術劇場の13年度の施設稼働率は、大ホールが89.7%、中劇場が75.3%、小劇場が82.4%である（図表1-9）。大ホールの89.7%は、開館年の03年度に次いで過去2番目に高い稼働率となった。
- 3つのホールの稼働率は、開館年の03年度を除き、約70～80%で推移しており、2010年度の（一財）地域創造の悉皆調査結果（2010年10月1日時点でのデータ。専用ホールのうち政令市施設の平均稼働率は72.2%）と比較して高い水準にある。
- 施設の稼働率について第1期と第2期を比較すると、中劇場の稼働率は第2期が第1期を上回っているが、大ホールと小劇場では第2期が第1期をやや下回っている。ただし、限られたスタッフ体制のもとでの施設利用の安全性を考慮すると、稼働率が100%に近づくことが望ましいわけではない。

図表1-9 北九州芸術劇場の稼働率（03年度～13年度）

	大ホール			中劇場			小劇場		
	公演日数	利用対象日数	稼働率	公演日数	利用対象日数	稼働率	公演日数	利用対象日数	稼働率
2003年度	99	103	96.1%	100	107	93.5%	83	86	96.5%
2004年度	219	277	79.1%	207	283	73.1%	220	304	72.4%
2005年度	223	281	79.4%	189	276	68.5%	222	297	74.7%
2006年度	202	285	70.9%	199	282	70.6%	254	306	83.0%
2007年度	220	290	75.9%	205	289	70.9%	257	300	85.7%
第1期　平均	193	247	80.3%	180	247	75.3%	207	259	82.5%
2008年度	192	257	74.7%	203	260	78.1%	249	295	84.4%
2009年度	194	262	74.0%	212	260	81.5%	221	282	78.4%
2010年度	215	261	82.4%	197	267	73.8%	225	285	78.9%
2011年度	211	274	77.0%	202	273	74.0%	234	299	78.3%
2012年度	217	264	82.2%	204	276	73.9%	237	298	79.5%
第2期　平均	206	264	78.1%	204	267	76.3%	233	292	79.9%
2013年度	226	252	89.7%	204	244	83.6%	229	278	82.4%
累計	2,218	2,806	79.0%	2,122	2,817	75.3%	2,431	3,030	80.2%

注）稼働率は「稼働日数／利用対象日数」、利用対象日数は保守点検日を除いたもの

2. 事業費の内訳と収支

次に、北九州芸術劇場の事業費の財源内訳と収支について、過去10ケ年と同様の分析を行った。

(1) 事業費の財源と事業支出の内訳

- 北九州芸術劇場の13年度の事業費は約2億2,000万円となっており、前年度から若干増加したものの、過去2番目に少ない事業費となっている。
- 財源内訳をみると、チケット収入が約1億1,000万円で全体の51.6%、市の補助金が約6,400万円で29.7%、文化庁と（一財）地域創造による外部資金が約4,100万円で18.8%となっている。チケット収入と外部資金で事業費の約7割（70.3%）をカバーしている（図表1-10）。
- 全国平均の試算値※と比較すると、13年度のチケット収入の割合は平均を上回っている。全国平均の試算値での「設置者からの補助金・委託費」（52.7%）が、北九州芸術劇場のチケット収入の割合（51.6%）とほぼ同じ比率となっている。

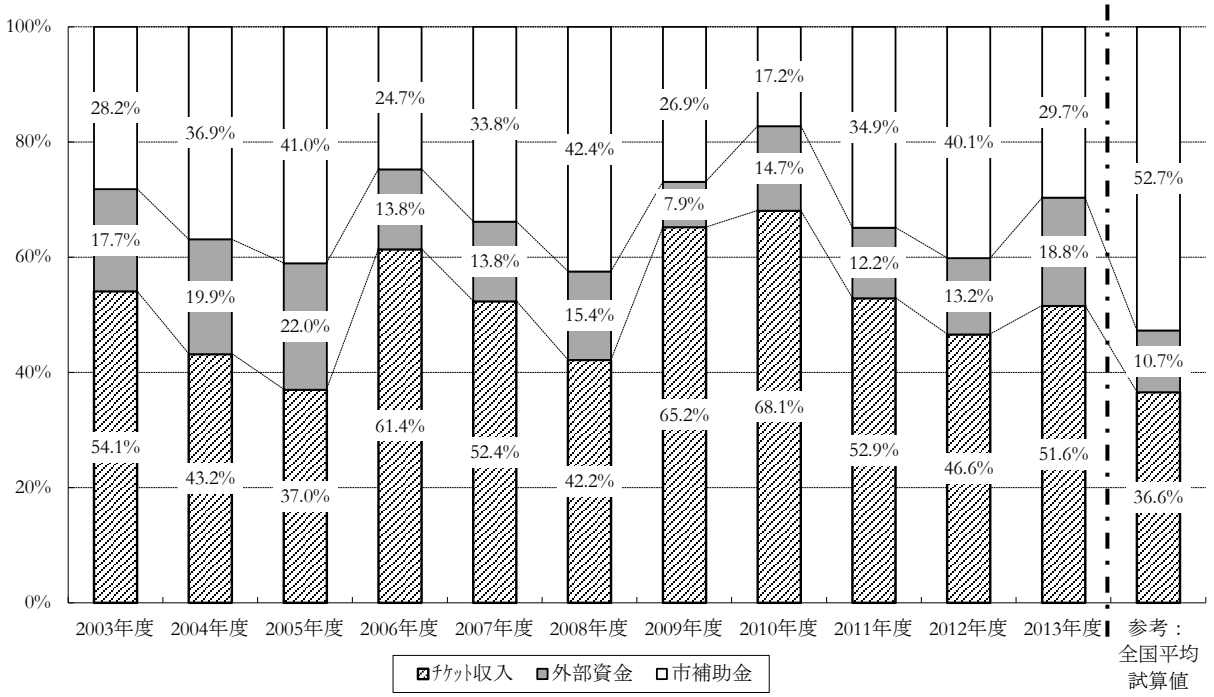
※（一財）地域創造の悉皆調査結果（2007年）から、指定管理施設の事業費の財源内訳の平均金額を試算すると、「設置者からの補助金・委託費」が52.7%、「事業収入」が36.6%、「設置者以外からの助成金・協賛金・寄付金」が10.7%である。

※指定管理施設の平成18年度決算金額平均値の「収入」欄から、「事業補助金」、「事業委託費」（いずれも設置者からの収入）、「事業収入」、「設置者以外からの助成金・協賛金・寄付金」の4項目を事業費財源と設定し、それぞれの内訳比率を算出した。

図表1-10 事業費の財源内訳（03年度～13年度）

	ﾁｹｯﾄ収入	市補助金	外部資金	（内訳）				計
				文化庁	地域創造	その他助成金	協賛金	
2003年度	215,389	112,225	70,700	49,000	10,000	11,700	0	398,314
	54.1%	28.2%	17.7%	12.3%	2.5%	2.9%	0.0%	100.0%
2004年度	145,429	124,198	67,000	49,000	18,000	0	0	336,627
	43.2%	36.9%	19.9%	14.6%	5.3%	0.0%	0.0%	100.0%
2005年度	110,060	121,965	65,295	45,795	19,500	0	0	297,320
	37.0%	41.0%	22.0%	15.4%	6.6%	0.0%	0.0%	100.0%
2006年度	263,901	106,363	59,517	45,800	13,717	0	0	429,781
	61.4%	24.7%	13.8%	10.7%	3.2%	0.0%	0.0%	100.0%
2007年度	197,355	127,456	52,051	36,600	15,451	0	0	376,862
	52.4%	33.8%	13.8%	9.7%	4.1%	0.0%	0.0%	100.0%
第1期　累計	932,134	592,207	314,563	226,195	76,668	11,700	0	1,838,904
	50.7%	32.2%	17.1%	12.3%	4.2%	0.6%	0.0%	100.0%
2008年度	135,979	136,854	49,579	27,400	22,179	0	0	322,412
	42.2%	42.4%	15.4%	8.5%	6.9%	0.0%	0.0%	100.0%
2009年度	202,004	83,331	24,432	18,000	6,432	0	0	309,767
	65.2%	26.9%	7.9%	5.8%	2.1%	0.0%	0.0%	100.0%
2010年度	149,051	37,726	32,072	11,000	10,572	0	10,500	218,849
	68.1%	17.2%	14.7%	5.0%	4.8%	0.0%	4.8%	100.0%
2011年度	123,355	81,302	28,509	26,902	1,607	0	0	233,166
	52.9%	34.9%	12.2%	11.5%	0.7%	0.0%	0.0%	100.0%
2012年度	99,616	85,741	28,262	25,349	2,165	748	0	213,619
	46.6%	40.1%	13.2%	11.9%	1.0%	0.4%	0.0%	100.0%
第2期　累計	710,005	424,954	162,854	108,651	42,955	748	10,500	1,297,813
	54.7%	32.7%	12.5%	8.4%	3.3%	0.1%	0.8%	100.0%
2013年度	111,886	64,354	40,693	33,965	6,728	0	0	216,933
	51.6%	29.7%	18.8%	15.7%	3.1%	0.0%	0.0%	100.0%
累計	1,754,025	1,081,515	518,110	368,811	126,351	12,448	10,500	3,353,650
	52.3%	32.2%	15.4%	11.0%	3.8%	0.4%	0.3%	100.0%

図表1-11 事業費の比率（03年度～13年度）



(2) 事業収支

- 13年度の事業費について、収入の予算額と決算額の差異は事業収入で約2,800万円の増収、補助金等収入は約4,100万円の減収となっている。13年度は補助金等の減収分を、事業収入によってカバーした形になった。
- 劇場の運営、事業の実施にあたって、経費節減の努力を行っていることとともに、積極的な営業努力を行なっていることがうかがえる。

図表1-9 事業収入、補助金等収入の予算額・決算額（03年度～13年度）

上段：金額（千円）／下段：割合（%）

	事業収入			補助金等収入		
	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異
2003年度	194,300	215,389	Δ 21,089	205,700	182,925	22,775
	48.6%	54.1%	—	51.4%	45.9%	—
2004年度	146,346	145,429	917	209,300	191,198	18,102
	41.1%	43.2%	—	58.9%	56.8%	—
2005年度	130,500	110,060	20,440	219,500	187,260	32,240
	37.3%	37.0%	—	62.7%	63.0%	—
2006年度	265,709	263,901	1,808	227,531	165,880	61,651
	53.9%	61.4%	—	46.1%	38.6%	—
2007年度	212,173	197,355	14,818	210,800	179,507	31,293
	50.2%	52.4%	—	49.8%	47.6%	—
第1期　累計	949,028	932,134	16,894	1,072,831	906,770	166,061
	46.9%	50.7%	—	53.1%	49.3%	—
2008年度	269,172	135,979	133,193	228,412	186,433	41,979
	54.1%	42.2%	—	45.9%	57.8%	—
2009年度	157,949	202,004	Δ 44,055	195,470	107,763	87,707
	44.7%	65.2%	—	55.3%	34.8%	—
2010年度	110,503	149,051	Δ 38,548	141,200	69,798	71,402
	43.9%	68.1%	—	56.1%	31.9%	—
2011年度	140,284	123,355	16,929	166,136	109,811	56,325
	45.8%	52.9%	—	54.2%	47.1%	—
2012年度	101,983	99,616	2,367	162,000	114,003	47,997
	38.6%	46.6%	—	61.4%	53.4%	—
第2期　累計	779,891	710,005	69,886	893,218	587,808	305,410
	46.6%	54.7%	—	53.4%	45.3%	—
2013年度	84,322	111,886	Δ 27,564	145,632	105,047	40,585
	36.7%	51.6%	—	63.3%	48.4%	—
累計	1,813,241	1,754,025	59,216	2,111,681	1,599,625	512,056
	46.2%	52.3%	—	53.8%	47.7%	—

補助金等収入における市補助金と助成金の内訳（千円）

	市補助金			助成金		
	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異
2003年度	135,000	112,225	22,775	70,700	70,700	0
2004年度	135,000	124,198	10,802	74,300	67,000	7,300
2005年度	151,000	121,965	29,035	68,500	65,295	3,205
2006年度	145,000	106,363	38,637	82,531	59,517	23,014
2007年度	149,000	127,456	21,544	61,800	52,051	9,749
第1期　平均	143,000	118,441	24,559	71,566	62,913	8,654
2008年度	149,000	136,854	12,146	79,412	49,579	29,833
2009年度	135,000	83,331	51,669	60,470	24,432	36,038
2010年度	108,000	37,726	70,274	33,200	32,072	1,128
2011年度	128,000	81,302	46,698	38,136	28,509	9,627
2012年度	128,000	85,741	42,259	34,000	28,262	5,738
第2期　平均	129,600	84,991	44,609	49,044	32,571	16,473
2013年度	111,000	64,354	46,646	34,632	40,693	Δ 6,061
累計	1,474,000	1,081,515	392,485	637,681	518,110	119,571

第2章　観客の特性と観客からみた評価

本章では、開館以来継続的に実施している、主催事業および提携・協力事業の公演に来場した観客に対するアンケート調査の結果から、2013年度の観客の特性や、観客からみた北九州芸術劇場に対する評価を整理、分析した。

1．観客調査の実施要領

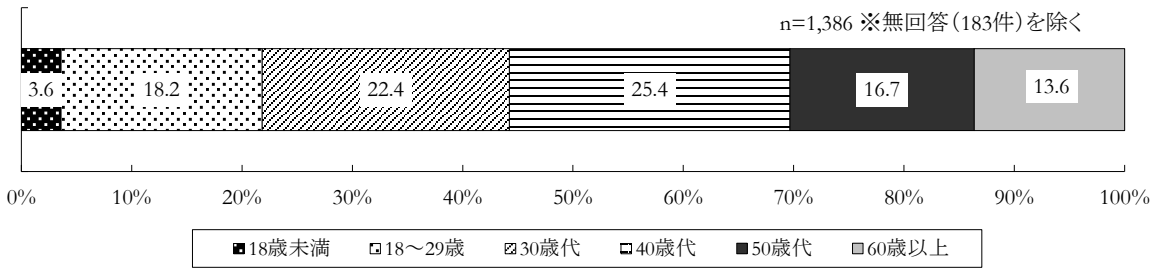
- 調査の対象：2013年度に実施した主催事業および提携・協力事業公演　33公演
- 配布・回収方法：各公演初日の開演時に配布、終演時に回収
- 実施時期：2013年4月13日～2014年3月16日
- 有効回答数（回収率）：1,569件、回収率：13.3%　（配布数：11,815件）

2．観客調査の結果概要

（1）観客（アンケート回答者）の属性（p.資-10～19）

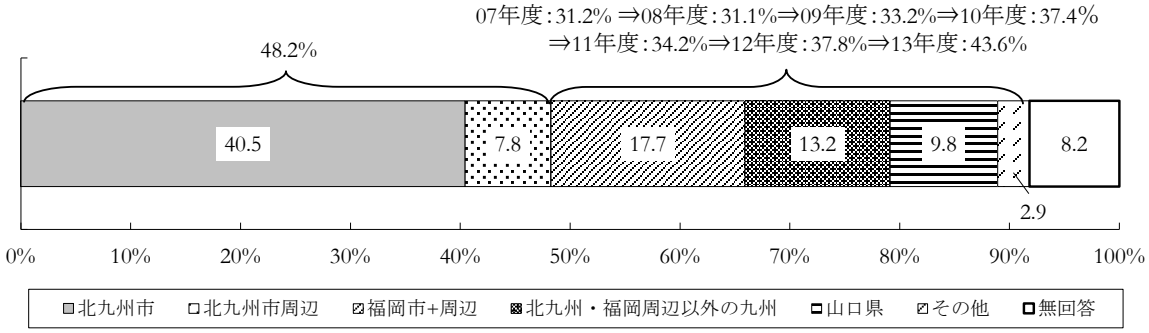
- 観客は、女性が78.9%、男性が21.1％と女性が多い。いずれのジャンルも男性に比べて女性の割合が高い。
- 平均年齢は41.9歳。年齢層に大きな偏りはなく、幅広い年齢層が来場している（図表2-1）。平均年齢に関しては、03年度が45.5歳で、04年から13年度までは40.2歳～43.4歳の範囲で40歳台前半を維持できている。

図表2-1　年齢層（13年度）



- 居住地域は、北九州市周辺を含めた市域からの来場者が48.2%（うち北九州市内が40.5%）である。福岡市域や福岡県以外の九州各県、山口県、その他からの13年度の来場者は43.6%で過去最高の割合となり、07年度以降は3割以上を占めている（図表2-2）。

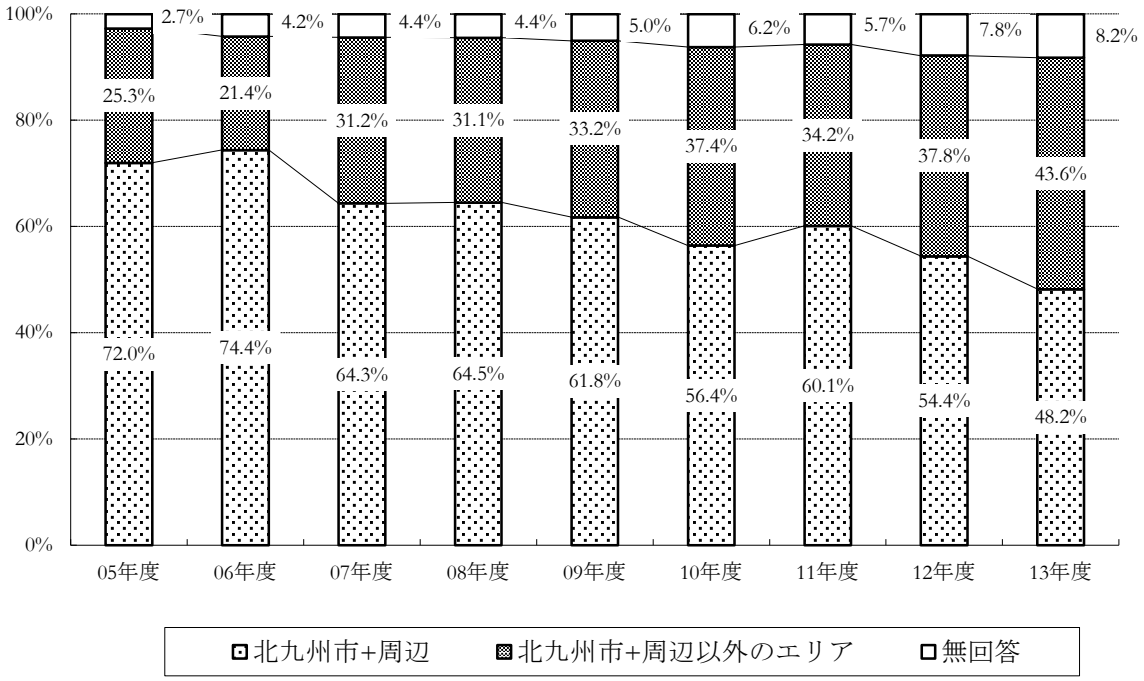
図表2-2　居住地域（13年度）



- 観客の居住地域の経年推移を見ると、07年度以降は北九州市と周辺以外のエリア（福岡

市と周辺、北九州・福岡周辺以外の九州、山口県など）の割合が3割を超え、08年度以来は北九州市+周辺が減少する傾向にあった。11年度はその傾向に歯止めが掛かったが、12年度は再び「北九州市+周辺」が減少し、「北九州市+周辺以外のエリア」が増加した。13年度は「北九州市+周辺以外のエリア」が過去最高の割合となっている。

図表2-3 居住地域の経年推移（05年度～13年度）



- チケットクラブには回答者の約4分の1（23.3%）が入会している。入会していない場合、今後入会意向があるのは16.8%である。

（2） 北九州芸術劇場での公演鑑賞の状況

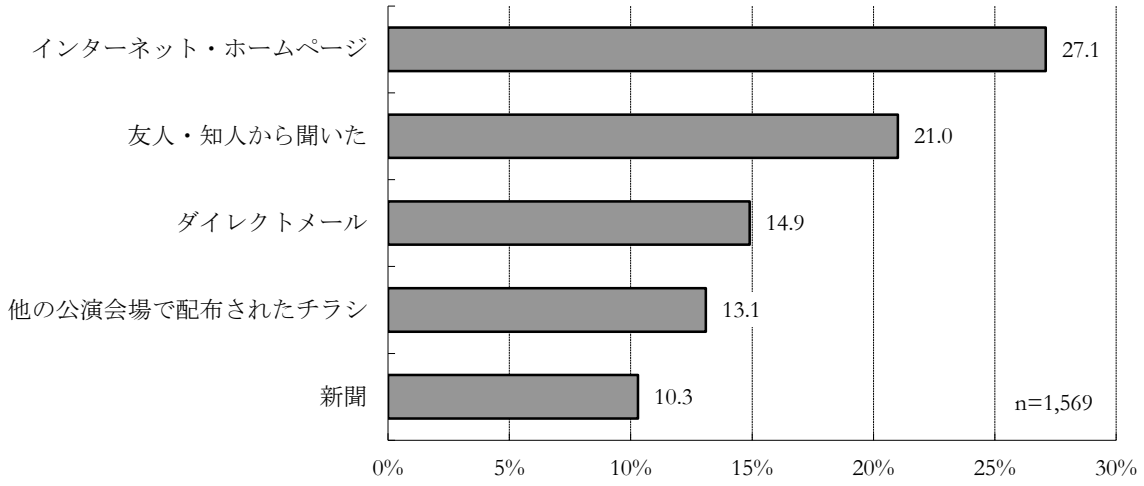
①来場公演のジャンル（p.資-22～23）

- 回答者が来場した公演のジャンルは、「小劇場・現代演劇」が約8割（78.3%）を占める。
  ※アンケート配布公演33公演のうち29公演が「小劇場・現代演劇」であることによる。
- 年齢別に来場公演のジャンルをみると、いずれの年代でも「小劇場・現代演劇」の割合が高いが、特に、18歳～29歳で高い（88.5%）。
- 北九州芸術劇場の来館経験が「今日が初めて」という回答者の場合、「小劇場・現代演劇」の割合が84.7%となっている。

②公演情報の入手経路（p.資-24～25）

- 公演情報の入手経路は、全体では「インターネット・ホームページ」が27.1%で最も高く、続いて「友人・知人から聞いた」（21.9%）、「ダイレクトメール」（14.9%）となっている（図表2-4）。
- 10年度は初めて「インターネット・ホームページ」が最も高い割合となったが、11年度は2番目、12年度は「友人・知人から聞いた」と同率で、13年度は再び最上位となり、過去最高の割合となっている。

図表2-4　公演情報の入手経路（13年度）　　※10%以上回答があった項目を、回答の多い順に掲載



- 公演情報の入手経路を、年齢別、北九州芸術劇場での鑑賞経験別に見る（図表2-5）。まず年齢別では、18歳未満、18～29歳は「友人・知人から聞いた」、30歳代、40歳代、50歳代は「インターネット・ホームページ」、60歳代は「新聞」の割合が最も高い。「新聞」は年齢層が高いほど割合が高くなっている。
- また、北九州芸術劇場での鑑賞経験別にみると、北九州芸術劇場での鑑賞経験が3~5回、11回以上のグループでは「インターネット・ホームページ」が最も割合が高い。一方、2回以下のグループでは、「友人・知人から聞いた」が最も高くなっている。
- 劇場での鑑賞経験によって情報の入手経路に特徴があるが、「インターネット・ホームページ」はいずれの鑑賞頻度でも23～36%の回答がある。鑑賞頻度に関わらず、便利な情報入手ツールとして使われていることがうかがえる。
- 鑑賞経験が多くなるほど、「他の公演会場で配布されたチラシ」と「ダイレクトメール」の割合は多くなり、「友人・知人から聞いた」の割合は減少する傾向にある。

図表2-5　年齢別、北九州芸術劇場での鑑賞経験別　公演情報の入手経路（13年度）

n=1,569（単位：%）

		インターネット・ホームページ	友人・知人から聞いた	ダイレクトメール	他の公演会場で配布されたチラシ	新聞
全体		27.1	21.0	14.9	13.1	10.3
年齢層	18歳未満	8.0	**40.0**	4.0	8.0	6.0
	18～29歳	31.0	**32.5**	5.6	6.7	3.2
	30歳代	**36.7**	18.0	15.1	9.6	4.8
	40歳代	**32.7**	17.9	21.6	18.5	9.4
	50歳代	**21.1**	13.4	14.7	16.8	16.4
	60歳以上	9.5	21.7	16.9	12.7	**25.9**
鑑賞経験	今日が初めて	27.5	**28.1**	1.1	5.6	10.3
	1～2回	23.9	**28.8**	5.9	5.0	11.7
	3～5回	**25.6**	19.6	14.5	12.9	8.2
	6～10回	**24.4**	16.1	24.8	13.2	10.7
	11回以上	**36.7**	10.5	32.9	31.1	11.5

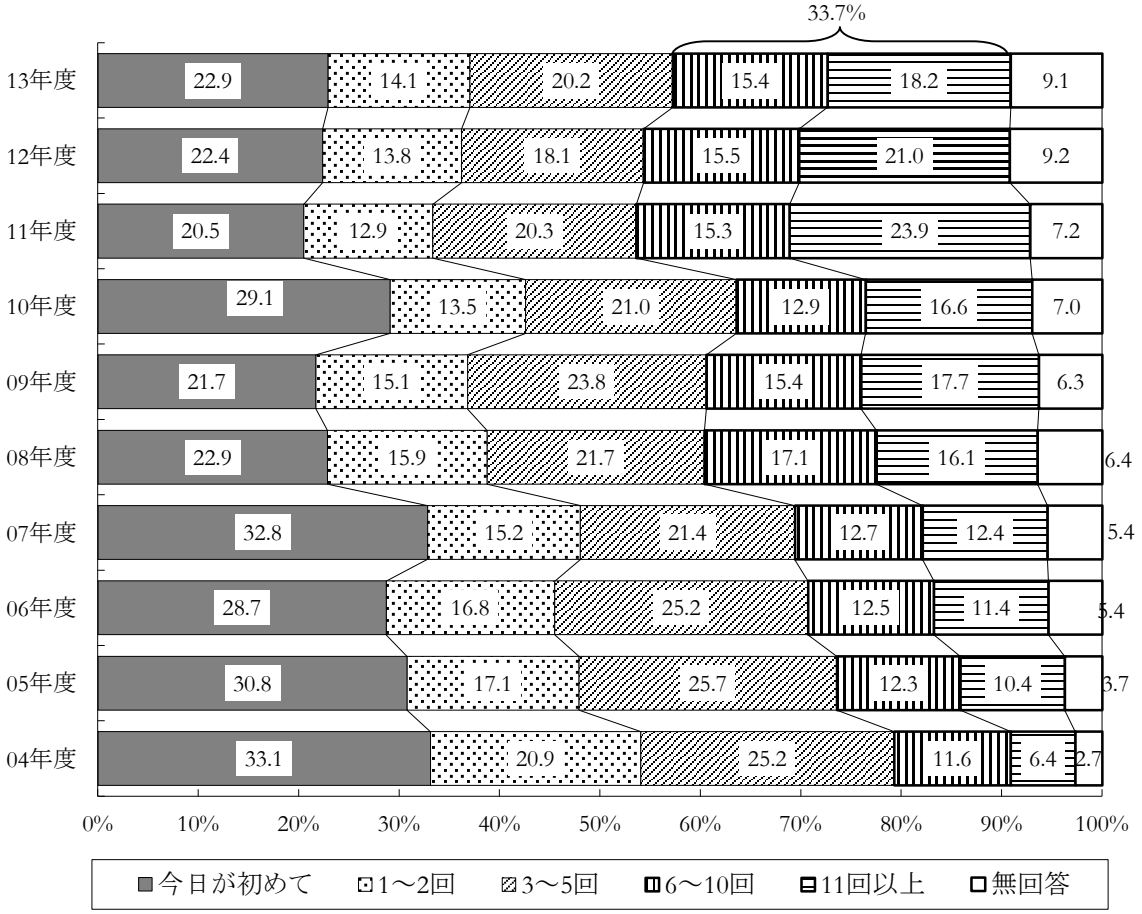
③公演に来た理由（p.資-26～27）

- 公演に来た理由は、「出演者等が好きだから」（59.0%）、「公演内容が面白そうだったから」（46.7%）への回答が多い。18歳未満では「人に誘われたから」が最も高く、60歳以上では「出演者等が好きだから」と「公演内容が面白そうだったから」の割合が最も高い。その他の年代では「出演者等が好きだから」が最も高い。

④北九州芸術劇場での鑑賞経験（p.資-46～47）

- 北九州芸術劇場での鑑賞経験は「今日が初めて」が22.9%と最も高いが、「1～2回」から「11回以上」まで大差はなく、来場者の鑑賞経験は幅広い。

図表2-6　北九州芸術劇場での鑑賞経験（04年度～13年度）



- 観客の北九州芸術劇場での鑑賞経験が多様であるのは04年度調査からの特徴であるが、年々劇場での鑑賞経験の多い観客（来場経験が6回以上）が増えており、13年度は約3分の1（33.7%）となっている（図表2-6）。6回以上の鑑賞経験者の割合が高いのは、年齢別では「40歳代」以上である。

⑤公演前後の飲食やショッピング（p.資-28～29）

- 来場者の50.8%が公演前後に飲食あるいはショッピングをしており、平均金額は、飲食の場合が約1,481円（飲食をしている回答者の割合：全体の42.4%）、ショッピングの場合が約5,434円（ショッピングをしている回答者の割合：全体の21.0%）である。

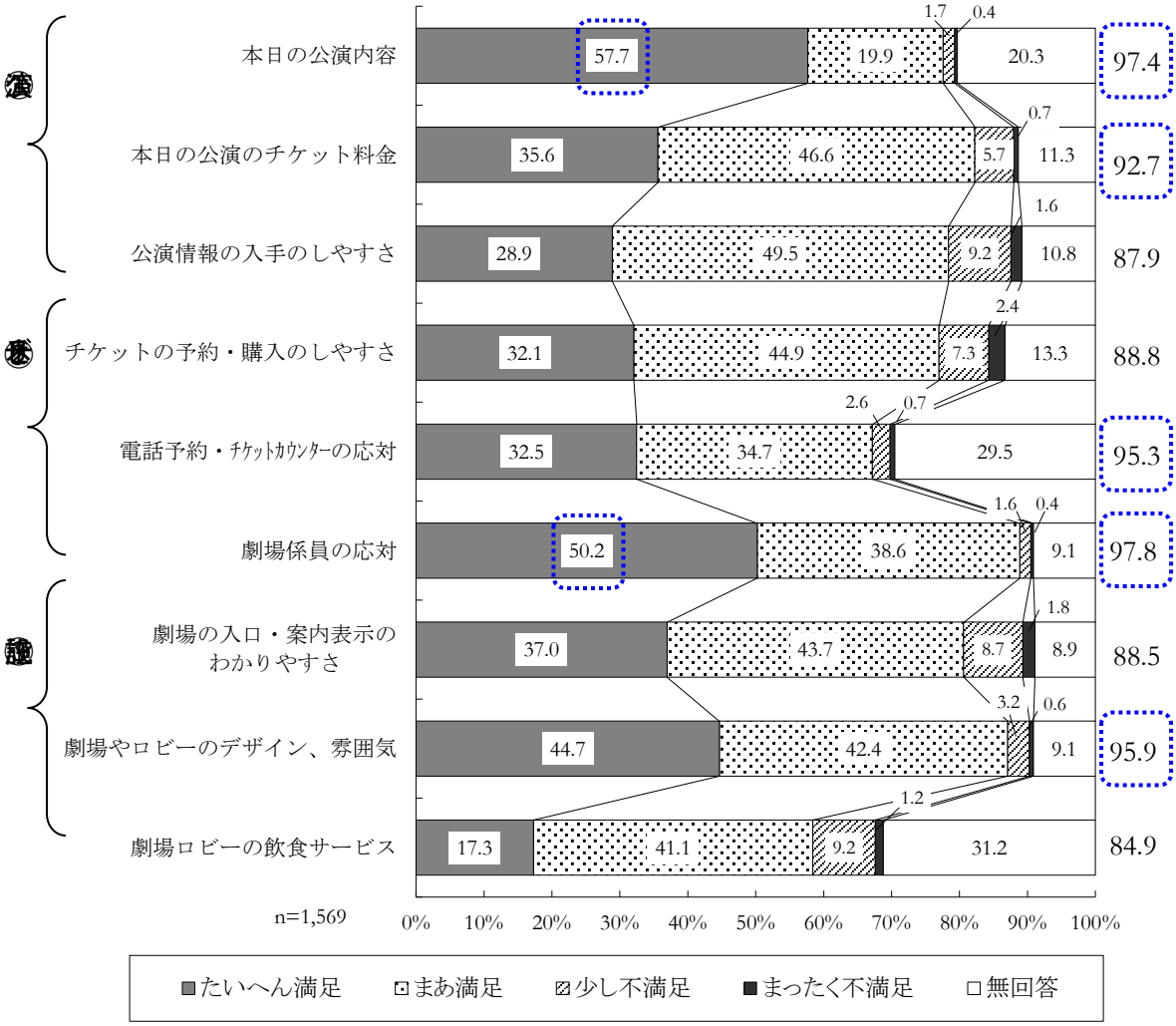
（3）公演や劇場に対する満足度（p.資-30～38）

- 満足層の割合（「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く）が90%以上を占める

のは、「本日の公演内容」、「本日の公演のチケット料金」、「電話予約・チケットカウンターの応対」、「劇場係員の応対」、「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」の5項目である（図表2-7）。

図表2-7　公演や劇場に対する満足度（13年度）

［満足層の割合］



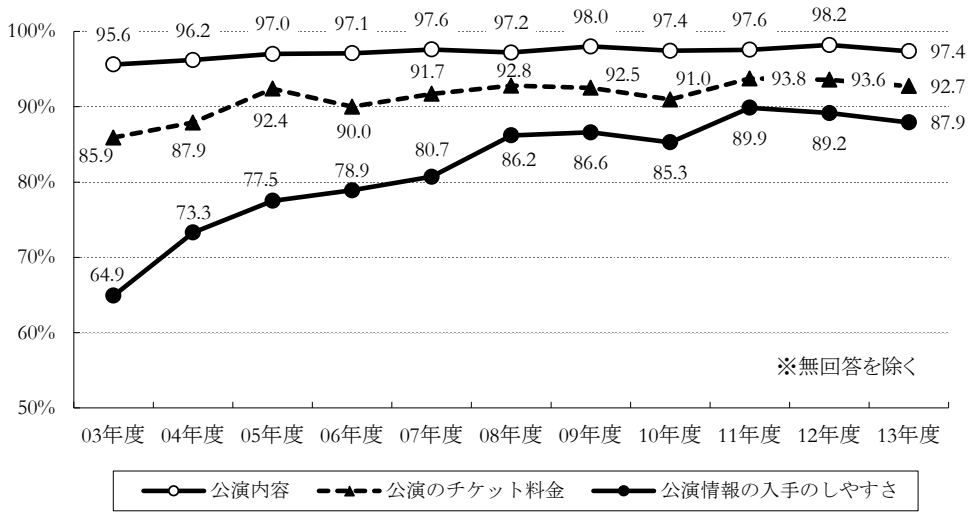
※満足層の割合：「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く。

- 特に、「本日の公演内容」、「劇場係員の応対」の2項目については、「たいへん満足」の割合も、それぞれ57.7%、50.2%と高い評価となっている。
- 年齢別にみると、いずれの項目も年齢層が高くなるほど満足度は低くなる傾向がある。60歳以上では、ほぼすべての項目で「たいへん満足」の割合が低い。
- 年齢層が高いほど満足層の割合が低くなる傾向は「チケットの予約・購入のしやすさ」、「劇場の入口や案内表示のわかりやすさ」、「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」、「劇場ロビーの飲食サービス」で顕著である。
- 無回答が多い「電話予約・チケットカウンターの応対」、「劇場ロビーの飲食サービス」については、利用したことがない人が多いと考えられる。
- 次に、満足度に関する9項目を、①公演、②サービス、③施設の3つに分けて、満足層の割合の経年変化を見る（図表2-8～2-10）。

①公演について（図表2-8）

- 「公演内容」については、03年度から継続して満足層の割合が顕著に高く、観客からの評価は極めて高い。
- 「公演のチケット料金」も05年度以降、90%以上の高い満足度を維持している。「公演内容」への満足度の高さが「公演のチケット料金」の満足度にも大きく関わっていると考えられる。
- 開館当初満足度が低かった「公演情報の入手のしやすさ」は、満足度が向上し、13年度は満足層の割合が87.9%となっている。

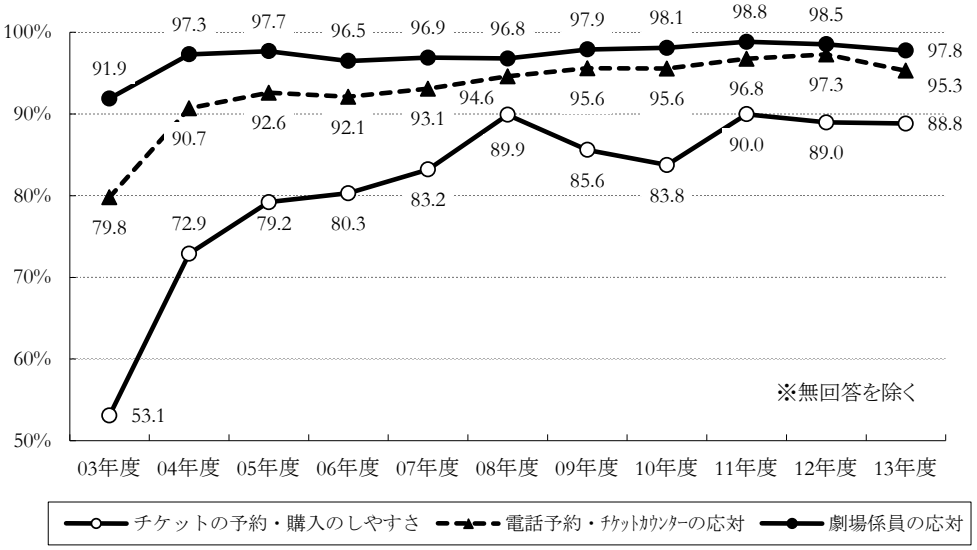
図表2-8　公演関連項目に関する満足層の割合（03年度～13年度）



②サービスについて（図表2-9）

- 「劇場係員の応対」は開館当初から、「電話予約・チケットカウンターの応対」は04年度から満足層の割合が90%を超えており、そのまま高い満足度を維持している。
- 開館当初は満足層の割合が他の項目に比べて低かった「チケットの予約・購入のしやすさ」は、満足度の伸びが大きい。ホームページからのオンラインチケット購入が可能となった11年度は90.0%と過去に比べて最も高い割合となっている。

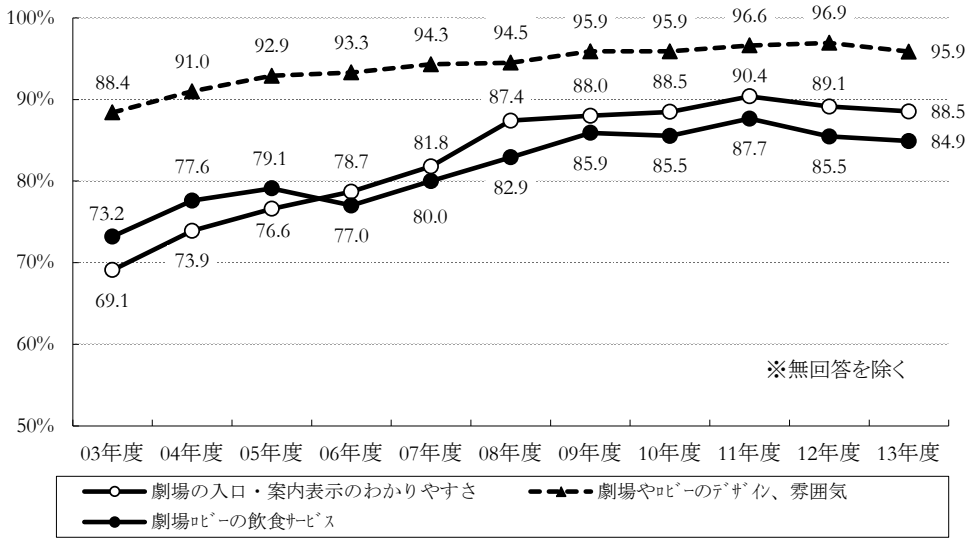
図表2-9　サービス関連項目に関する満足層の割合（03年度～13年度）



③施設について（図表2-10）

- 施設に関わる3項目のうち、「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」は、開館当初から満足層の割合が高く、そのまま高い水準を維持している。
- 一方、「劇場の入口・案内表示のわかりやすさ」は、複合施設である故の動線の複雑さもあり、開館当初は満足層の割合が他の項目に比べて低かったが、年々満足度が高まっており、13年度は88.5%となっている。これは、観客が慣れてきたこともあるが、案内表示の増設や既存サイン文字の大型化、駐車場エレベーター入口での音声案内など劇場側の工夫や努力の成果が大きいといえよう。

図表2-10　施設関連項目に関する満足層の割合（03年度～13年度）

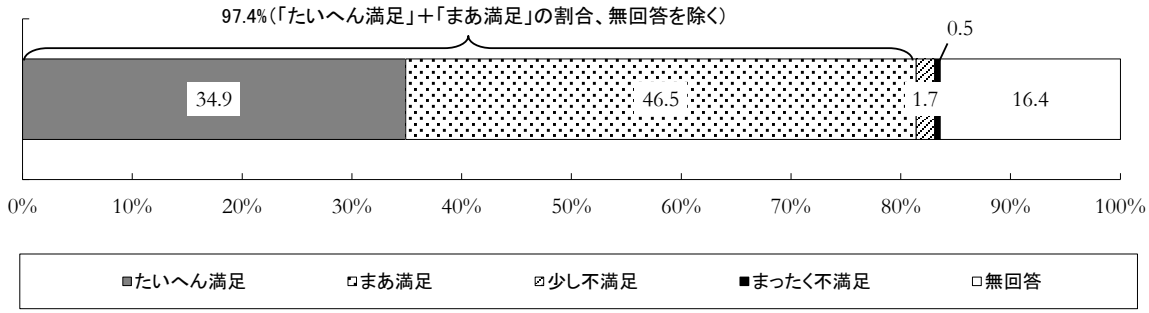


- ①公演、②サービス、③施設、いずれについても、すでに満足度が高い項目は高さを堅持している。

④総合的な満足度について

- 劇場に関する総合的な満足度は、満足層の割合が98.2%（無回答を除く）。全体では、「たいへん満足」の割合が31.3%、「まあ満足」の割合が48.4%となっている（図表2-11）。

図表2-11　総合的な満足度（13年度）



（4）劇場の運営方針について（p.資-39～41）

- 北九州芸術劇場の基本方針の「観る」、「創る」、「育つ」については、いずれも90%以上が賛同している（「ぜひやってほしい」＋「まあやってほしい」の割合。無回答を除く）（図表2-12）。

- 「観る」については、「ぜひやってほしい」が79.3%と高い割合となっている（本アンケートが鑑賞者を対象としたアンケートであることには留意が必要である）。「創る」、「育つ」については、「観る」と比べると低いとはいえ、「ぜひやってほしい」が約46～52%と約半数を占める。これは03年度からの傾向である。
- 「創る」、「育つ」ともに、29歳以下の若い世代で「ぜひやってほしい」と積極的に賛同する割合が高い。

図表2-12　運営方針への賛同度（13年度）　n=1,569

運営方針	ぜひやってほしい	まあやってほしい	あまりやる必要はない	まったくやる必要はない	無回答
観る	79.3%	12.6%	1.0%	0.1%	7.0%
創る	51.6%	34.5%	3.8%	0.1%	9.9%
育つ	45.6%	39.4%	4.3%	0.6%	10.1%

賛同する人の割合	賛同しない人の割合
98.8%	1.2%
95.6%	4.4%
94.5%	5.5%

※賛同する人の割合：「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」の割合。無回答を除く。

（5）日頃の鑑賞活動について

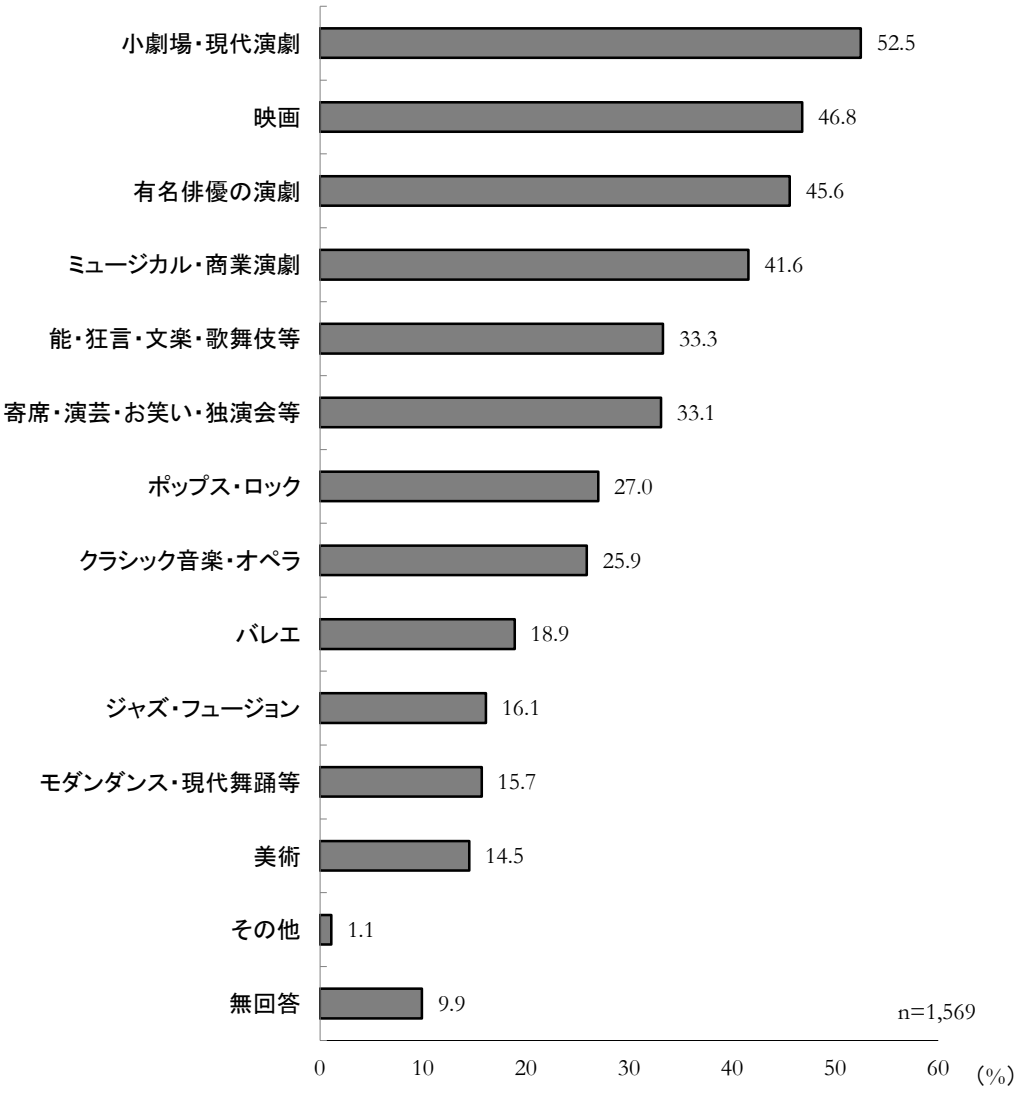
①日頃コンサートや演劇に出かける頻度（p.資-44～45）

- 日頃コンサートや演劇に出かける頻度は、「年に3～4回程度」（22.6%）、「年に1～2回程度」（20.5%）、「年に5～9回」（15.2%）となっており、日頃の舞台芸術の鑑賞頻度は多様である。
- 北九州芸術劇場で11回以上の鑑賞経験がある場合、月1回以上コンサートや演劇に出かける割合は59.8%を占める。北九州芸術劇場での鑑賞が初めてのグループでは、年に2回以下の頻度の割合が56.9%を占めている。

②興味のあるジャンル（p.資-48～50）

- 普段興味を持っているジャンルについては、「小劇場・現代演劇」（52.5%）、「映画」（46.8%）、「有名俳優の演劇」（45.6%）、「ミュージカル・商業演劇」（41.6%）への回答割合が高く、興味のあるジャンルは多様である（図表2-13）。
- 興味のあるジャンルは、性別や年齢で特徴がある。性別でみると、男性は「小劇場・現代演劇」、「映画」、「寄席・演芸・お笑い・独演会等」、女性は「小劇場・現代演劇」、「有名俳優の演劇」、「映画」という順で回答割合が高い。
- 年齢別でみると、18歳未満は「映画」、18歳以上50歳代以下は「小劇場・現代演劇」、60歳以上は「有名俳優の演劇」への回答割合が最も高い。
- 北九州芸術劇場での鑑賞経験別にみると、鑑賞経験が多いほど、「小劇場・現代演劇」への興味が高い。また、北九州芸術劇場での鑑賞経験が11回以上では、ほとんどすべての項目について回答割合が高く、さまざまな文化・芸術に興味を持っていることがうかがえる。

図表2-13　普段興味のあるジャンル（13年度）



第3章　貸館利用者からみた評価

1．利用者調査の実施要領

- 調査の対象：2013年度の貸館利用者（団体）
- 配布・回収方法：利用当日に配布、回収（後日ファックス、郵送での回収も受付）
- 配布件数：224件
- 有効回答数（回収率）：　152件（67.9%）

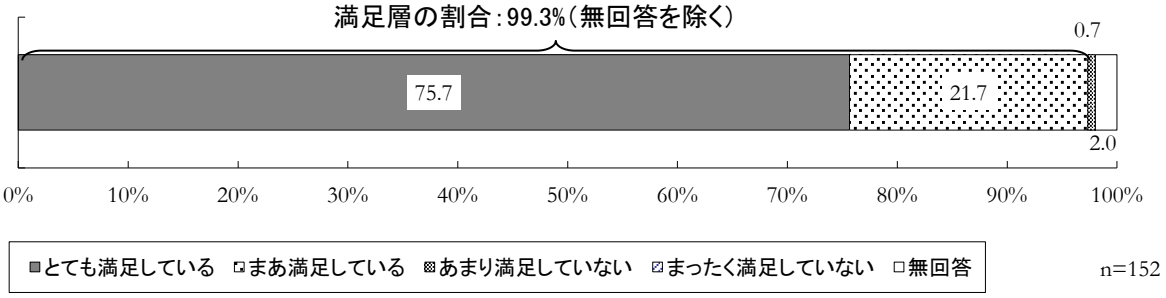
2．利用者調査の結果概要

※本調査は、統計的な分析を目的とした調査ではなく、有効回答数も少ないため、アンケート結果の記述にあたっては、割合（%）とともに回答数を併記している。

（1）劇場の使いごこちに関する総合的な満足度（p.資-62）

- 劇場の使いごこちに関する総合的な満足度は、「とても満足」が75.7%（115件）、「まあ満足」が21.7%（33件）で、満足層の割合（「とても満足」+「まあ満足」と回答した割合、無回答を除く）は99.3%と大変高い。

図表3-1　総合的な満足度（13年度）



（2）施設に関する意見（p.資-63～67）

- 施設に関する7項目については、全ての項目で肯定的な評価をしている割合（「はい」+「どちらかといえば『はい』」、無回答を除く）が95%以上と大変高い。とくに「館内が清潔」、「舞台設備・機器が充実している」、「設備・機器などを安全に使用できた」は100%となっている。
- また、「はい」という積極的な評価の割合も高く、特に「館内が清潔」、「ホワイエや客席など劇場の雰囲気がよい」、「舞台設備・機器が充実している」、「設備・機器などを安全に使用できた」の4項目は、「はい」が90%以上である（図表3-2）。
- 「はい」という積極的な評価の割合について、09年度からの経年変化をみると、「館内が清潔」、「ホワイエや客席など劇場の雰囲気がよい」、「設備・機器などを安全に使用できた」は5年間連続で9割以上が「はい」と回答している（p.資-65, 66）。
- 13年度は、12年度と比べて「舞台設備・機器が充実している」、「舞台裏の施設・設備が使いやすい」で「はい」への回答が増加している。「搬入・搬出がやりやすい」については、他の項目に比べて満足層の割合、「はい」への回答ともに少ないものの、満足層の割合は97.4%となっている。利用者への搬入・搬出に関する説明や案内が周知されてきていること、

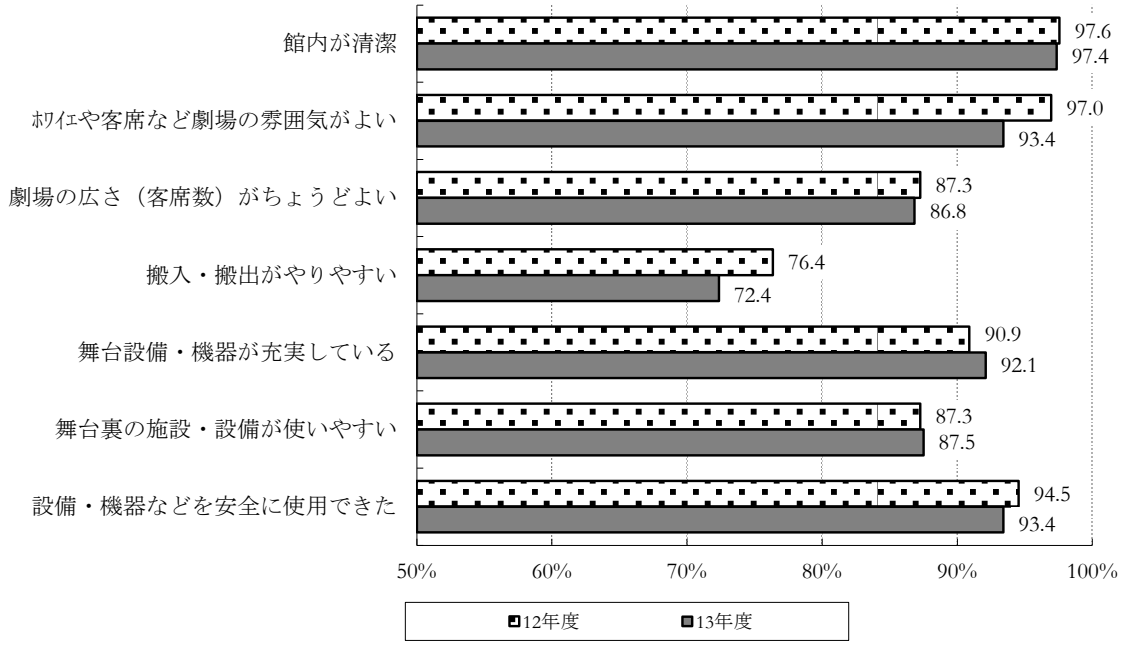
利用者が慣れてきていることがうかがえる（図表3-2）。

※搬入・搬出については、複合施設である故の制限、駐車場からの動線の難しさ等が、意見記述欄にも課題として記入されることが多いが、打合せ時に説明・案内を周知する、施設側（リバーウォーク北九州）と協議・調整する等の対策を講じている。

図表3-2　施設（ハード）に関する意見（13年度）

n=152（単位：%）	「はい」	どちらかといえば「はい」	どちらかといえば「いいえ」	「いいえ」	無回答	「はい」＋どちらかといえば「はい」（除無回答）
館内が清潔	97.4	2.6	0.0	0.0	0.0	100.0
ﾎﾜｲｴや客席など劇場の雰囲気がよい	93.4	5.9	0.7	0.0	0.0	99.3
劇場の広さ（客席数）がちょうどよい	86.8	9.2	3.3	0.7	0.0	96.1
搬入・搬出がやりやすい	72.4	24.3	2.6	0.0	0.7	97.4
舞台設備・機器が充実している	92.1	7.2	0.0	0.0	0.7	100.0
舞台裏の施設・設備が使いやすい	87.5	10.5	1.3	0.0	0.7	98.7
設備・機器などを安全に使用できた	93.4	5.3	0.0	0.0	1.3	100.0

図表3-3　施設（ハード）に関する意見　「はい」の回答割合比較（12年度・13年度）



（3）運営や応対に関する意見（p.資-68～73）

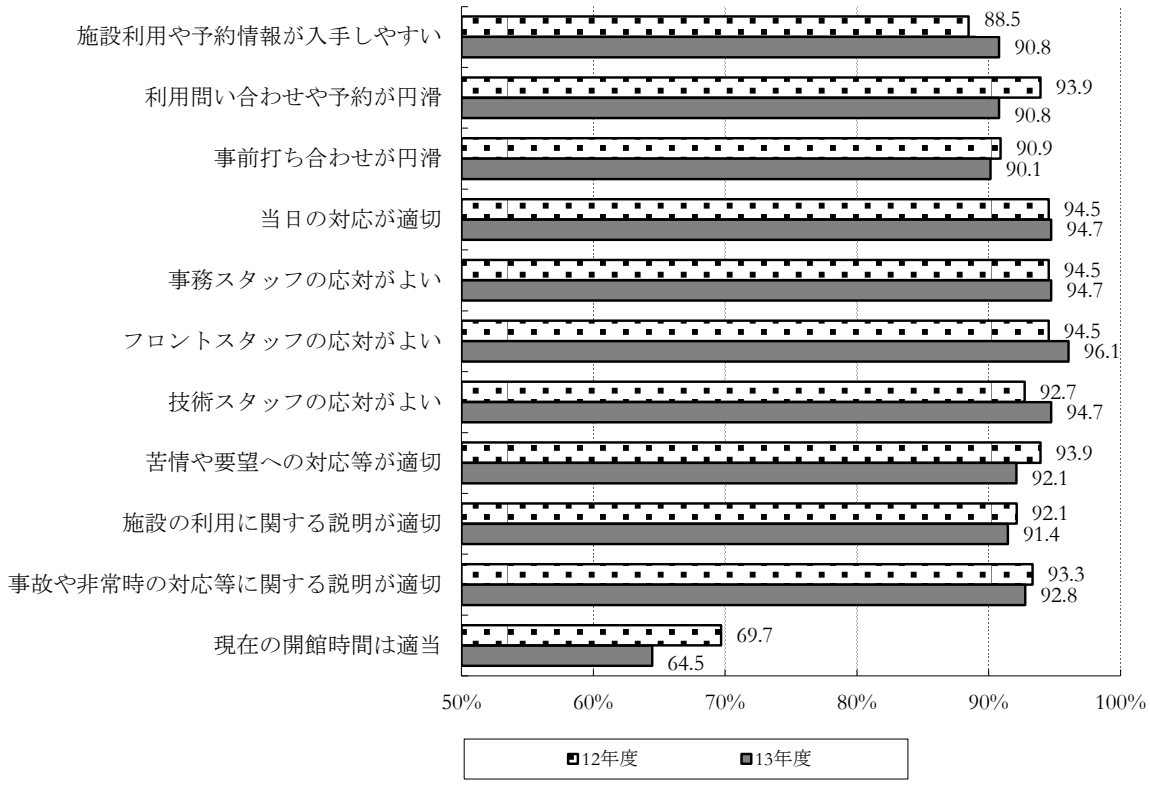
- 運営、応対に関する12項目についても、「現在の開館時間は適当」以外の11項目で、肯定的な評価をしている割合が95%以上と高くなっている。また、「はい」という積極的に評価する割合も高い（図表3-4）。
- 「はい」という積極的な評価の割合については、「当日の対応が適切」、「事務スタッフの応対がよい」、「フロントスタッフの応対がよい」が09年度以降5年間連続で9割以上が「はい」と回答している（p.資-71）。
- 13年度は、12年度と比べて、「施設利用や予約情報が入手しやすい」、「当日の対応が適切」、「事務スタッフの応対がよい」、「フロントスタッフの応対がよい」、「技術スタッフの応対がよい」の項目で「はい」への回答割合が高くなっている（図表3-5）。

- 「現在の開館時間は適当である」については、他の項目に比べると「はい」の割合が低い。これは管理規則で10時から22時と定められており、より長い開館時間を求める意見や、仕込み等のために柔軟な利用時間の設定を求める意見があがっている。ただし、過去の推移を見ると、管理規則に対する利用者側の理解が浸透してきていることがうかがえる。

図表3-4　運営や応対（ソフト）に関する意見（13年度）

n=152（単位：%）	「はい」	どちらかといえば「はい」	どちらかといえば「いいえ」	「いいえ」	無回答	「はい」＋どちらかといえば「はい」（除無回答）
施設利用や予約情報が入手しやすい	90.8	7.9	0.0	0.0	1.3	100.0
利用問い合わせや予約が円滑	90.8	7.2	0.0	0.0	2.0	100.0
事前打ち合わせが円滑	90.1	5.3	2.0	0.7	2.0	97.3
当日の対応が適切	94.7	3.3	0.7	0.0	1.3	99.3
事務スタッフの応対がよい	94.7	3.9	0.0	0.0	1.3	100.0
フロントスタッフの応対がよい	96.1	3.3	0.0	0.0	0.7	100.0
技術スタッフの応対がよい	94.7	3.9	0.0	0.7	0.7	99.3
苦情や要望への対応等が適切	92.1	5.3	0.7	0.0	2.0	99.3
施設の利用に関する説明が適切	91.4	5.9	0.0	0.0	2.6	100.0
事故や非常時の対応に関する説明が適切	92.8	5.9	0.0	0.0	1.3	100.0
現在の開館時間は適当	64.5	22.4	8.6	3.3	1.3	88.0
機会があればまた利用したい	92.1	7.2	0.0	0.0	0.7	100.0

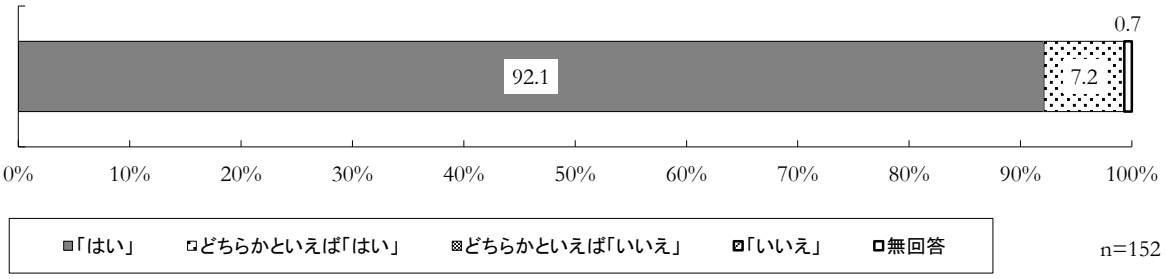
図表3-5　運営や応対（ソフト）に関する意見　「はい」の回答割合比較（12年度・13年度）



（4）今後の利用の意向（p.資-73）

- 「機会があればまた利用したい」については、「はい」が92.1%（140件）と高い割合を占めており、「どちらかといえば『いいえ』」、「いいえ」はともに0件であった。利用者の今後の利用意向は大変高い。
- 今後の利用意向の高さは、貸館事業全体への満足度の高さを示しているものであると考えられる。

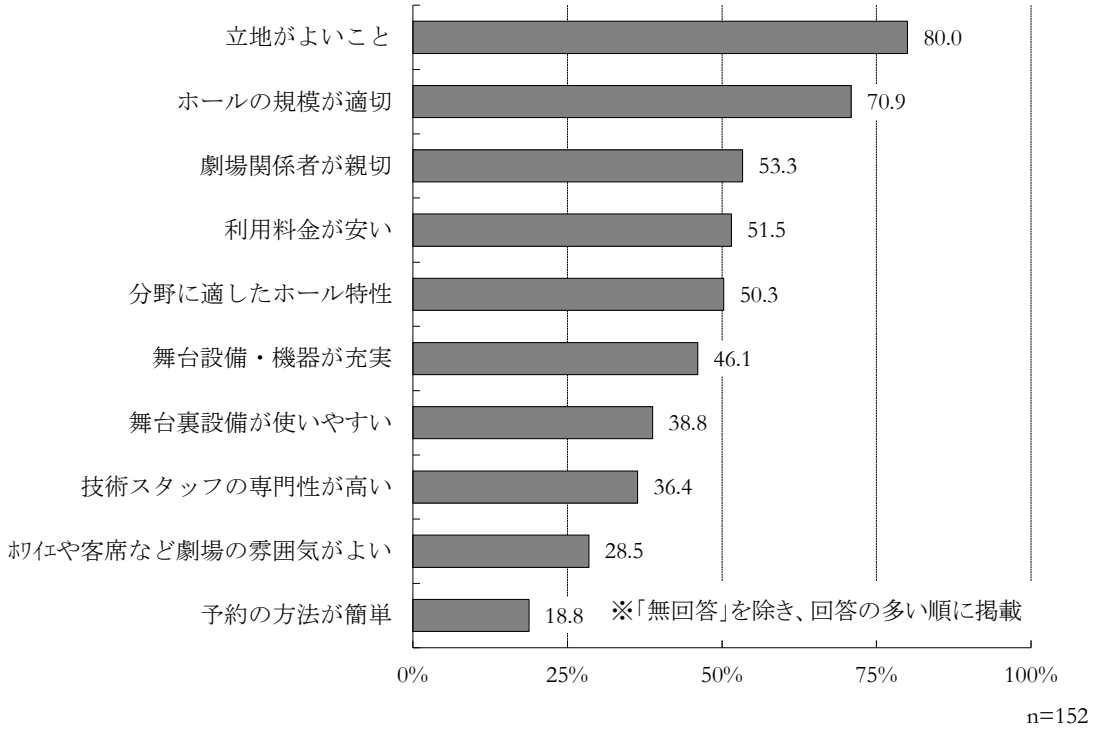
図表3-6　今後の利用の意向（13年度）



（5）利用の際、重視すること（p.資-74～76）

- 利用の際重視することとしては、「立地がよいこと」（80.0%・132件）と「ホールの規模が適切」（70.9%・117件）への回答が多い。
- そのほか、「劇場関係者が親切」、「利用料金が安い」、「分野に適したホール特性」も50%以上の回答となっている。

図表3-7　利用の際、重視すること（13年度）



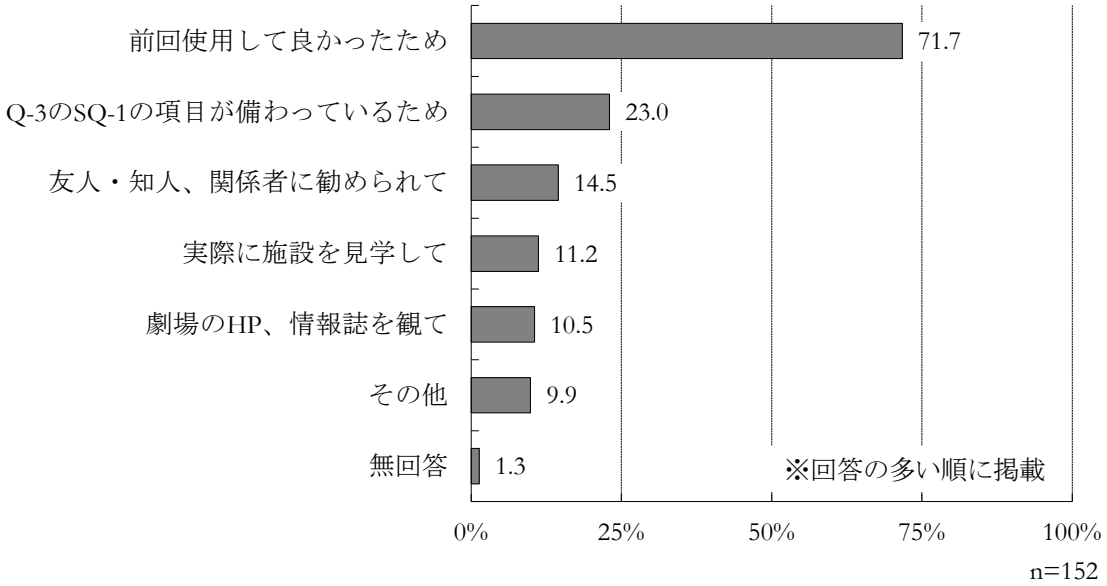
- 最も重視することは、「立地がよいこと」（29.6%・45件）への回答が最も多く、次いで、「ホー

ルの規模が適切」(27.0%・41件)、「分野に適したホール特性」(26.3%・40件)となっている。

(6)利用のきっかけ(p.資-77)

- 利用のきっかけは、「前回使用して良かったため」への回答が最も多く、71.7%(109件)を占めている。利用者の劇場への満足度は高く、そのため、リピーターの利用が多いことがうかがえる。
- 次いで、「Q-3のSQ-1(利用の際、重視する)の項目が備わっているため」(23.0%・35件)となっており、「立地がよいこと」、「ホールの規模が適切」といった上位項目が劇場利用のきっかけになっていると考えられる。

図表3-8 利用のきっかけ(13年度)



第4章 経済波及効果とパブリシティ効果

劇場の経営は、様々な経済効果を生み出し、地域の活性化を促すと言われている。ここでは、昨年度調査と同様、経済波及効果について、産業連関表を用いた分析を行うとともに、パブリシティ効果について、その概要と金額換算による規模の把握を行った。

1．経済波及効果

劇場の運営にともなう経済波及効果には、劇場および観客の支出からなる最終需要（直接的経済効果）、それに伴う生産増、そしてそれらがもたらす所得増、雇用増、税収増などが考えられる。

13年度も例年どおり、産業連関表に基づいた経済波及効果に加え、雇用効果を試算した。

(1) 北九州芸術劇場の経済波及効果の基本構造と分析方法

- 経済波及効果をもたらす支出（最終需要）は、
  ①劇場の管理運営に関する支出
  ②劇場の主催事業に関する支出
  ③劇場の主催事業の観客の消費支出
  ④貸館事業の主催者の事業支出
  ⑤貸館事業の観客の消費支出
  の5つに分類することができる（図表4-1参照）。
- 今回の調査では、①、②については劇場の運営データに基づいて、③については観客アンケートの調査結果に基づいて把握・推計を行った。
- ④については貸館事業者からのデータ提供が必要であるが、調査対象となっていないため、貸館事業の1公演あたりの支出を、主催事業1公演当たりの支出の20%もしくは30%と想定して、この二つのケースについて、支出額を試算した。
- また、主催事業の観客アンケート調査の結果をみると、北九州市内だけではなく、九州全域や他の地域からも幅広く観客を集めているのに対し、貸館の事業内容をみると、同じように幅広いエリアからの集客や、同じような消費活動を行っているとは考えにくいため、⑤については、③のデータを援用して試算した。
- したがって、④、⑤の計算結果については、あくまでも参考値である。
- また、これらの計算結果のうち、北九州市内の経済波及効果と福岡県の雇用表の就業係数、雇用係数を用いて、北九州芸術劇場がどのぐらいの雇用効果を有しているかを試算した。

(2) 分野別の最終需要と経済波及効果、雇用効果

- 上記①から⑤の分野別に見た最終需要と、産業連関表を使った経済波及効果の計算結果は、図表4-1に示したとおりである。なお、本文中および図表に表記されている個別の項目の数値は100万円未満を四捨五入しているため、小計、合計、誘発係数には四捨五入による誤差が生じている箇所がある。
- ①劇場の管理運営、②劇場の主催事業、③主催事業の観客の消費支出にともなう最終需要の金額は、それぞれ6億6,200万円、2億1,700万円、2億4,000万円、合計で11億1,900万円となっている。そのうち、71.0％にあたる約7億9,400万円が北九州市内での最終需要である。
- これら最終需要に伴う経済波及効果は、①が9億3,300万円、②が3億4,500万円、③が3億

8,000万円、合計で16億5,800万円である。そのうち、65.8%にあたる10億9,100万円が北九州市内での経済波及効果である。生産誘発係数は、全体で1.48、北九州市内で1.37である。

- 参考値ではあるが、貸館の事業主催者の支出および貸館事業の観客の消費支出による経済波及効果（北九州市内のみ）は、約6億6,700万円～7億2,300万円、生産誘発係数は1.40である。
- それらをあわせた経済波及効果の総合計は、約23億2,500万円～23億8,100万円で生産誘発係数は1.46、北九州市内に限ってみると、約17億5,700万円～18億1,400万円で生産誘発係数は1.38となっている。
- また、これら経済波及効果の結果から試算した雇用効果は、就業者数（労働量）では149～154人、雇用者数（有給の役員・雇用者数、常勤・臨時含む）で130～136人で、対事業所サービス、対個人サービス、商業などの分野を中心に雇用効果が現れている。

図表4-1 北九州芸術劇場の経済波及効果、雇用効果（13年度）

		最終需要	経済波及効果	誘発係数
管理運営・主催事業	①管理運営 事務局経費、委託費、光熱水費、その他	6億6,200万円 （5億8,500万円）	9億3,300万円 （8億100万円）	1.41 （1.37）
管理運営・主催事業	②主催事業 出演料、創作スタッフ費、音楽費、製作費（交通費、宿泊費、食費、制作雑費）、宣伝費、記録費、予備費	2億1,700万円 （8,400万円）	3億4,500万円 （1億1,700万円）	1.59 （1.40）
管理運営・主催事業	③主催事業観客消費支出 飲食・買物費、交通費、宿泊費	2億4,000万円 （1億2,500万円）	3億8,000万円 （1億7,200万円）	1.59 （1.38）
管理運営・主催事業	小計	11億1,900万円 （7億9,400万円）	16億5,800万円 （10億9,100万円）	1.48 （1.37）
貸館事業（参考値）	④貸館事業（貸館主催者の支出） 出演料、製作費、その他	8,200万円 ～1億2,300万円	1億1,300万円 ～1億6,900万円	1.38
貸館事業（参考値）	⑤貸館事業観客消費支出 飲食・買物費、交通費、宿泊費	3億9,500万円	5億5,400万円	1.40
貸館事業（参考値）	小計（参考値）	4億7,700万円 ～5億1,700万円	6億6,700万円 ～7億2,300万円	1.40
	合計（参考値）	15億9,500万円 ～16億3,600万円 （12億7,100万円 ～13億1,200万円）	23億2,500万円 ～23億8,100万円 （17億5,700円 ～18億1,400万円）	1.46 （1.38）
		雇用効果 （北九州市内）	149～154人（就業者ベース） 130～136人（雇用者ベース）	

※下段の括弧内の数字は、北九州市内の最終需要、経済波及効果。貸館事業については、最終需要、経済波及効果とも北九州市内のみと想定した試算結果である。

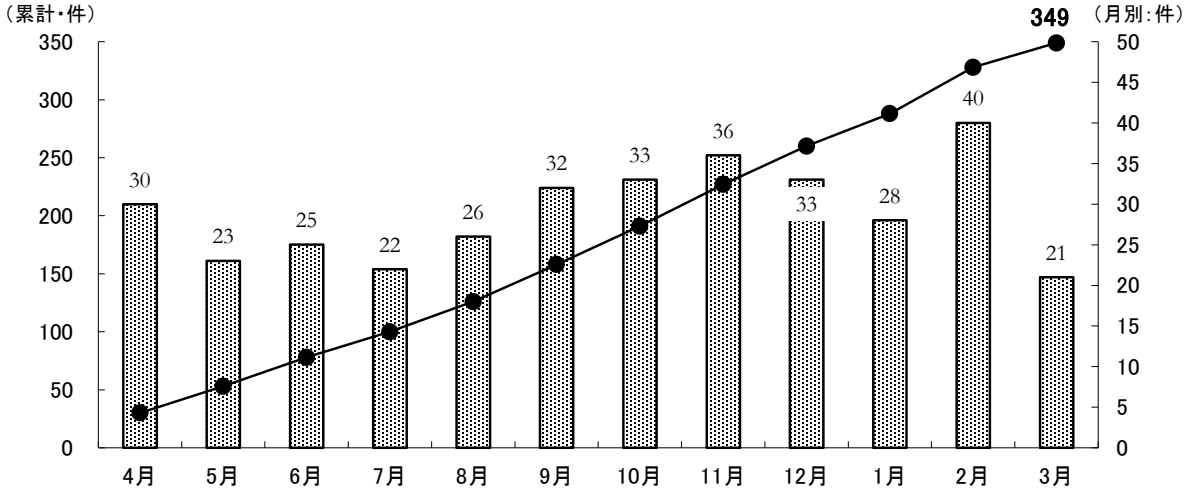
2．パブリシティ効果

文化的な催しや劇場運営においては、新聞や雑誌への記事掲載やテレビ報道などによって、地域の認知度向上やイメージアップが図られるケースが多く、それらは「パブリシティ効果」と呼ばれている。そして、その効果は、記事の大きさなどを基準にした広告宣伝費を目安にして、しばしば金額換算される。本事業評価調査では、03年度から新聞記事に焦点を当てたパブリシティ効果を算出しており、13年度も継続してパブリシティ効果の算出を行なった。

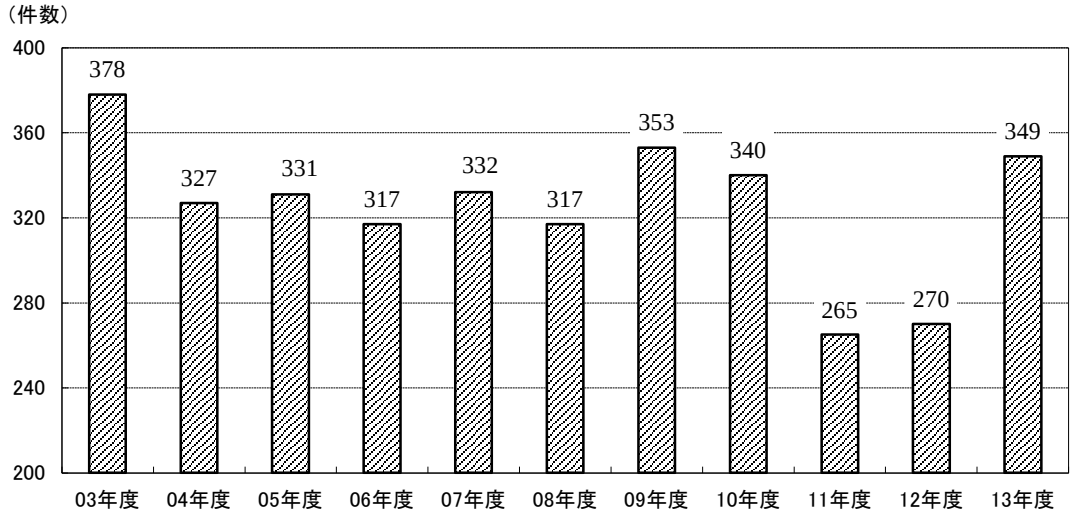
(1)「北九州芸術劇場」をキーワードとした13年度の掲載記事の件数と内容

- 13年度についてみると、「北九州芸術劇場」をキーワードに検索された新聞記事の件数は349件（図表4-2）である。
- 03年度は開館年度ということで話題性が高く、掲載記事の件数も多かった。04年度以降は、「北九州芸術劇場」を会場とするイベントや関連記事、北九州芸術劇場の事業に関する記事がコンスタントに掲載されている。11年度は過去最少の掲載件数となったが、その要因は2011年3月11日に発生した東日本大震災を扱った記事が、長期間紙面を占めたことが考えられる。13年度は12年度に比べて掲載記事件数は増え、03年度、09年度に続いて3番目に多い掲載件数となっている（図表4-3）。

図表4-2 月ごとの掲載件数と累計（13年度）



図表4-3 年度ごとの新聞記事掲載件数の推移（03年度～13年度）



資料）図表4-2、4-3ともに「日経テレコン」記事検索の結果より作成

- 新聞別に見ると、13年度で掲載が最も多いのは西日本新聞（128件）、次いで、朝日新聞（73件）、毎日新聞（43件）、読売新聞（36件）、日経新聞（17件）となっている。その他、九州各県をはじめとする地方新聞は52件となっている（図表4-4）。

図表4-4　新聞別件数一覧（03年度～13年度）

	03年度	04年度	05年度	06年度	07年度	08年度	09年度	10年度	11年度	12年度	13年度
西日本新聞	151	147	149	149	120	119	131	146	101	111	128
朝日新聞	78	52	48	60	74	62	80	73	59	64	73
読売新聞	40	61	46	31	28	36	45	31	28	30	36
毎日新聞	58	31	34	20	32	33	43	30	33	27	43
日本経済新聞	34	32	37	37	50	41	34	35	18	17	17
その他	17	4	17	20	28	26	20	25	26	21	52
計	378	327	331	317	332	317	353	340	265	270	349

資料）「日経テレコン」記事検索の結果に基づく

- これら記事を、
  ① 北九州芸術劇場の公演紹介・取材記事、劇評など
  ② 北九州芸術劇場のPRキャンペーン、劇場主催事業の紹介記事
  ③ 情報コーナーなどでの公演情報の提供等
  ④ 芸術文化以外のイベント、講演の紹介記事（会場名が「北九州芸術劇場」）
  ⑤ 情報コーナーなどでの芸術文化以外のイベントの情報提供（会場名が「北九州芸術劇場」）

  の5種類に分類し、北九州芸術劇場として記事性の高い①、②、および③のうち公演の内容紹介が掲載されている情報提供を抽出したところ、180件であった（12年度：122件）。
- その内容を、「主催/提携・協力事業」、「学芸事業」、「貸館事業」、「その他（劇場全般、劇場職員への取材記事等）」に分類すると、それぞれ、51件、31件、58件、40件であった（図表4-5）。

(2) 広告掲載料をベースとした金額換算と評価

- これら180件の掲載記事について広告掲載料をベースに金額換算すると、約1億6,629万円という結果となっている（図表4-6）。
- 03年度は開館、04年度は「とびうめ国文祭」で話題性が高く、掲載記事の件数・文字量が多かったため、換算金額も高くなった。
- 05年度は全国展開型の創造事業の公演数が多く、06年度は朝日舞台芸術賞グランプリを獲得し、全国紙の掲載件数が多かった。広告の単価は全国紙で高いため、05年度と06年度は全体の掲載件数は突出して多くはないが、換算金額が高いという結果になっている。
- 07年度以降は、コンスタントに劇場事業や関係する劇団の記事などが掲載されるようになっている。
- 13年度の掲載内容をみると、西日本新聞、朝日新聞（西部）、読売新聞（西部）での演劇や舞台に関する批評・紹介欄で、公演事業に関する記事が掲載されている。九州他県の地方紙でも紹介されており、北九州市域外での劇場事業の定着が新聞記事からうかがえる。
- 13年度は「ダンスダイブウィーク」、「山海塾」、「NODA・MAP」、「ハイバイ 10周年記念ツアー」、「飛ぶ劇場」といった公演事業の紹介記事が多い。

- 13年度では「切り裂かれたキャンバス」、「Re: 北九州の記憶」などの学芸事業や貸館事業に関する紹介記事が多い。また、その他事業の分類では、津村館長の退任（11件）と劇場法の施行（11件）に関する記事が数多く紹介されており、13年度のパブリシティ効果全体に影響を与えている。
- 13年度の劇場事業に対する北九州市の補助金は約6,400万円であり、劇場事業のパブリシティ効果（約1億6,629万円）は補助金の規模を上回る成果を生み出していると言える。

図表4-5 新聞掲載記事の内容と件数（03年度～13年度）

	主催/提携・協力事業	学芸事業	貸館事業	その他事業	合計
2003年度	70	8	46	56	180
2004年度	54	5	43	61	163
2005年度	75	25	34	25	159
2006年度	88	17	35	23	163
2007年度	85	12	31	26	154
第1期　平均	74	13	38	38	164
2008年度	55	12	50	32	149
2009年度	86	11	57	23	177
2010年度	82	28	55	22	187
2011年度	41	8	42	15	106
2012年度	37	19	49	17	122
第2期　平均	60	16	51	22	148
2013年度	51	31	58	40	180
累計	724	176	500	340	1,740

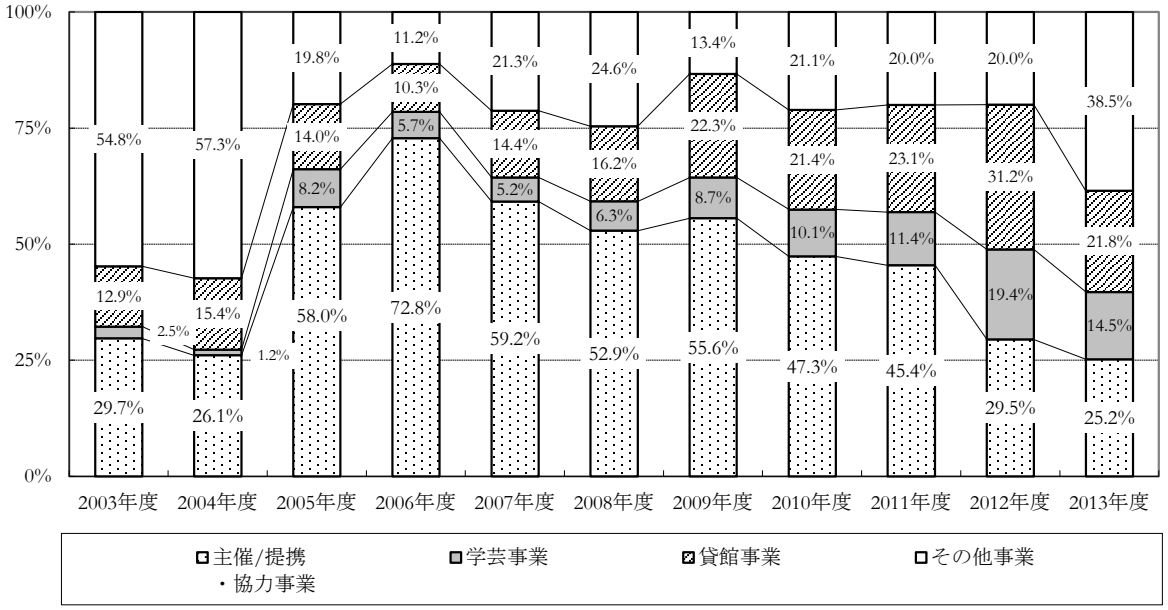
図表4-6 新聞掲載記事の内容と金額換算（03年度～13年度）

	主催/提携・協力事業	学芸事業	貸館事業	その他事業	合計
2003年度	62,140	5,331	27,072	114,683	209,226
2004年度	46,211	2,141	27,235	101,577	177,164
2005年度	110,044	15,505	26,622	37,678	189,849
2006年度	160,243	12,451	22,741	24,680	220,115
2007年度	66,027	5,777	16,056	23,737	111,597
第1期　平均	88,933	8,241	23,945	60,471	181,590
2008年度	66,588	7,926	20,392	30,961	125,867
2009年度	65,542	10,316	26,293	15,755	117,906
2010年度	64,078	13,718	28,986	28,598	135,380
2011年度	42,162	10,621	21,443	18,563	92,789
2012年度	31,969	21,021	33,825	21,646	108,461
第2期　平均	54,068	12,720	26,188	23,105	116,081
2013年度	41,879	24,104	36,272	64,035	166,291
累計	756,883	128,911	286,937	481,913	1,654,645

※ 金額換算は、写真を含めた記事面積と各新聞社の広告掲載料に基づいて、計算・集計した。

- また、事業ごとの掲載割合を金額換算ベースで見た場合、09年度の時点で過半数の割合だった主催/提携・協力事業の割合が年々減少し、学芸事業、貸館事業、その他事業の割合が年々増加していることが分かる。（図表4-7）。

図表4-7 事業ごとの掲載割合 ［金額換算値ベース］（03年度～13年度）



第5章　評価フレームに基づいた事業評価結果

最後に、2003年度から13年度までの11ヶ年の北九州芸術劇場の事業評価結果をとりまとめた。07年度までは、初年度（2003年度）の調査研究で設定した事業評価の基本フレームで整理していたが、08年度に、（一財）地域創造の「公立ホール・公立劇場の評価指針」（2007年3月）の評価フレームに基づいて再整理し、今年度もそれに沿ってとりまとめを行った。

1．評価フレームの考え方

「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価フレームは、「A.設置目的」、「B.管理運営」、「C.経営」という3つの戦略・評価軸を設定し、それぞれに評価大項目（戦略目標）を設定、さらに評価中項目（戦略）とそれを評価するための評価指標・基準を設定している。

図表5-1は、A、B、C、3つの戦略・評価軸の評価大項目を整理したものである。

図表5-1 「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価フレーム（評価軸と評価大項目）

戦略・評価軸		No	評価大項目
A	劇場の設置目的	A-0	劇場のミッション
		A-1	鑑賞系事業
		A-2	創造系事業
		A-3	普及系事業①：主に劇場内で実施するワークショップや講座など
		A-4	普及系事業②：アウトリーチ（学校、福祉施設等との連携など）
		A-5	市民文化活動支援（市民参加型事業、アマチュア支援など）
		A-6	地域への貢献①（地域経済への波及効果など）
		A-7	地域への貢献②（地域アピール、ブランド力のアップなど）
		A-8	広域施設としての役割発揮
B	管理運営	B-1	場の提供・支援（貸館）
		B-2	施設のホスピタリティ・サービス
		B-3	施設の維持管理
C	経営	C-1	経営体制
		C-2	リサーチ＆マーケティング
		C-3	経営努力

- 13年度は、上記図表5-1の基本フレームに基づいて、03年度から13年度の11ヶ年で把握したデータや情報をあらためて整理した。

2．評価結果の概要

基本フレームの評価項目ごとの評価結果は、図表5-3に一覧表として整理し、そのポイントを以下に記述した。　※割合（%）の記載は、小数点以下を四捨五入して掲載した（図表5-3も同様）。

A. 劇場の設置目的

A-0 ミッション　ー「創る」「育つ」「観る」

①劇場の運営方針（ミッション）の有無と内容、ミッションの浸透の状況等

- 劇場では開館初年度から、「創る」「育つ」「観る」の3つの運営方針を設定している。
- 13年度も、3つの運営方針に基づき、北九州からの発信と地元演劇人の発掘、育成を意識した創造事業、舞台関係者の育成や子どもや学校、一般市民などを対象とした積極的な学芸事業、小劇場・現代演劇に多様なラインナップを揃えた公演事業を展開し、「創る」「育つ」「観る」それぞれの事業が一体となった事業を実施している。
- 10年度に実施した座談会では「地域文化振興における北九州芸術劇場の役割」というテーマを設定したところ、市内の美術、建築、伝統工芸の専門家が、地域における劇場の存在意義を高く評価していることがわかった。舞台芸術分野に限らず多様な地域文化の担い手が、劇場の事業や運営を信頼していることがうかがえる。

②劇場の運営方針を支持する市民の割合（市民の支持率）

- 観客の運営方針への支持率※は、「創る」「育つ」「観る」いずれについても、開館の03年度から継続して90%を超えている。

※「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」の割合。無回答を除く。

③劇場の来場者（利用者）数

- 北九州芸術劇場への年間来場者（利用者）数は、05年度以降、毎年27～28万人で推移しているが、13年度は約28万人となった。また、この10年間で利用者数は延べ309万人を超えた。13年4月1日現在の北九州市の人口（推計値）は約96万であり、すでに人口の3倍以上の利用者が来場したことになる。
- 開館以来、北九州劇術劇場を地域になくてはならない施設として定着させていくために積み重ねてきた事業や運営の成果が利用者数の安定にも表れてきており、今後も引き続き、5年後、10年後を見据えた長期的な事業の展開と継続が必要であろう。

A-1 鑑賞系事業 ［観る］

［観る］：観る楽しみを知ってもらうため、国内外のエンターテイメント性や芸術性の高い作品を招き、市民に様々な公演を提供する。

①ミッションに基づいた鑑賞系事業の実施

- 13年度も、「観る」（鑑賞事業）では、中劇場を中心とした小劇場・現代演劇、話題性・芸術性の高い現代舞踊など幅広いラインナップの公演が行われ、多様な年齢層、多様な鑑賞経験を持つ観客が来場している。

②年間延べ観客数

- 13年度の公演事業については、17事業で46回の公演が行われた。入場者数は20,319人、入場率は88%である。
- 創造事業、提携・協力事業、演劇フェスティバルも含めた鑑賞系事業全体では、37事業、公演回数は119回。入場者数は38,312人、入場率は90%となっている。

③公演に対する観客の満足度

- 観客調査の結果から公演（主催／提携・協力事業）に対する観客の満足度をみると、開館年度（03年度）から継続して「（本日の）公演内容」への満足度の高さが顕著である。13年度も満足層の割合※は97%で、そのうち「たいへん満足」の割合が72%と、観客からの高い評

価を得ている。なお、この公演に対する観客の満足度には、次項の「創造系事業」も含まれる。

※「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く。

- あわせて、「（本日の）公演のチケット料金」も満足層の割合は93%以上であり、「公演内容」への評価の高さが「公演のチケット料金」の満足度にも反映されていると考えられる。

④鑑賞系事業による芸術団体やアーティストからの評価

- 09年度に実施した九州圏域の劇場・演劇関係者へのグループインタビューでは、魅力的な作品を招聘しているという評価や、東京や大阪からの演劇作品の受け皿として、九州圏域の代表的な劇場であるという共通認識がある。
- 09年度のグループインタビューで、九州圏域の劇場関係者・演劇人や首都圏の劇場関係者ともに、将来的に福岡市に拠点文化施設が設置された場合に連携や機能分担が重要になるだろうという点は共通認識であった。北九州芸術劇場としては、市外からの観客層に影響が出ることは十分考えられるため、「今まで以上に『観る』という運営方針を拡大する必要はない」との意見も出された。

A-2 創造系事業 ［創る］

［創る］：北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、“ものづくりの街”北九州市をアピールし地域の活性化を促していく。

①ミッションに基づいた創造系事業の実施

- 13年度も、全国発信型、地元演劇人の育成型、市民参加型などの多様な創造系事業が実施された。
- プロデュース作品「彼の地」は北九州（8回）、東京（3回）で公演を行った。
- 入場率では「彼の地」の北九州公演で99%、リーディングセッションvol.22「続・世界の日本人ジョーク集」で97%となっている。創造系事業ではすべての公演の入場率が80%を超えており、市民からの支持の高さがうかがえる。
- 開館当初から継続して実施されている事業に新規企画事業を加えながら、創造系事業を効果的に実施し、地域に根付かせていこうとする努力の成果がうかがえる。また、プロデュース作品の東京などでの公演によって、北九州芸術劇場の全国発信に貢献している。

②年間延べ観客数

- 13年度、「創る」では、4事業で21回の公演が行われ、入場者は3,208人、入場率は平均で92%と高い入場率となっている。

③創造系事業による芸術団体やアーティストへの効果

- 10年度の座談会では、例えば劇場と美術館との共同制作や、伝統工芸を取り入れた衣装や舞台美術のデザインなど、舞台芸術以外の分野との協働の可能性について意見が寄せられた。それと同時に、そうした協働を可能とするための土壌として、地域の文化資源のデータベースが必要だとの意見も出された。
- 09年度の首都圏の劇場関係者によるグループインタビューでは、「北九州から演劇界に一石を投じるオリジナリティのある作品が出てきてほしい」という期待も寄せられていた。また、九州圏域の劇場関係者や演劇人も共通して北九州芸術劇場の次なる目標として期待しているのは、アジアとの国際交流や創造・発信への取り組みであった。

A-3　普及系事業①：主に劇場内で実施するワークショップや講座など

［育つ］：アーティストを小・中学校等に派遣するアウトリーチ活動や劇場サポーター組織を通じてのヒューマンネットワーク作り等により、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域を育てながら地域とともに育っていく劇場を目指す。

①ミッションに基づいた普及系事業の実施

- 「育つ」については、普及系事業を継続的に実施している。13年度は、
  - 劇場10周年を記念して、過去のシアターラボ（期間限定の劇団を結成し、舞台についての講座を受けた後、実際に演劇作品づくりを体験する企画）の卒業生による記念公演「シアターラボ・リターンズ」
  - 「アーティスト往来プログラム」として、演劇・ダンス分野から多彩な講師を招いた「ワークショップ」、「インリーチ」、「アウトリーチ」

  といった、市民が舞台芸術に触れる機会や創造参加への機会の提供に取り組んでいる。
- 11年度からの「アーティスト往来プログラム」は、同じアーティストが「アウトリーチ」と「インリーチ」でアプローチの対象や内容を変化させることで、劇場と学校や地域との間に、より多様な関係を生み出そうとする意図がうかがえる。

②年間の事業数、アクティビティの回数、参加人数

- 13年度の主に劇場内で実施するワークショップや講座などの回数は153回、参加延人数は2,050人。劇場およびリバーウォーク北九州の開館10周年を意識しており、例年以上に積極的に地域と劇場との関係を開拓するような企画内容が多く見られる。

A-4　普及系事業②：アウトリーチ（学校、福祉施設等との連携など）

①他分野への貢献や地域活性化を視野に入れた戦略目標の有無と内容

- 13年度は、北九州市立美術館のコラボレーション企画として、劇場と美術館との合作ならではの特別企画「切り裂かれたキャンバス～『マネとマネ夫人像』をめぐって」を行った。
- 「アーティスト往来プログラム」では、北九州市障害者芸術祭、特別養護老人ホーム、社会福祉法人との共同によるアウトリーチなど、福祉関係での活動に取り組んだ。

②学校等と連携したプログラム数と参加人数

- 13年度に学校、福祉施設等との連携したアウトリーチなどの回数は47回、参加延人数は1,865人となっている。

A-5　市民文化活動支援（市民参加型事業、アマチュア支援など）

①　ミッションに基づいた市民活動支援の実施

- 市民の文化活動支援については、創造事業や学芸事業と連携しながら、創造参加として市民が舞台に立つ公演事業を実施しており、13年度は、合唱物語「わたしの青い鳥2013」、「ダンスダイブウィーク」、「ハイバイ10周年記念ツアー『て』」、「月猫えほん音楽会2013《ワークショップ》」などの7事業で55回のワークショップやアウトリーチなどが実施された。受講延人数・入場者数の合計は2,009人。
- 合唱物語「わたしの青い鳥」は04年度から継続実施されている事業で、市民に定着していることがうかがえる。
- 10年度の座談会では、「わたしの青い鳥」について「参加した人たちが楽しかったことを次々に伝えていくことで、喜びを共有する市民が増えている」との評価があった。

② 貸館事業に関するサービス内容、質への評価（専門的・技術的なアドバイスやサービスなど）

- 貸館利用者を対象とするアンケート調査で専門的・技術的サービスに関わる項目をみると、「技術スタッフの応対がよかった（技術的な助言や援助は適切だった）」は99%と、満足層の割合は大変高い。関連する項目として、「設備・機器などを安全に使用できた」、「舞台設備・機器は充実している」をみても、満足層の割合※は100%となっている。これらの項目では、「はい」という積極的な評価も高い。
- 劇場の専門的な技術サービスについては、利用者から高い信頼と評価を受けており、自由回答の書き込みも、それを裏付ける内容が多い（なお、09年度からテクニカルアドバイザーによるアドバイスの提供など、公演・講演に対する支援体制が強化された。）。

A-6 地域への貢献①（地域経済などへの波及効果）

① 地域外からの来場者割合

- 観客アンケート結果をみると、07年度以降、北九州市および近隣地域以外の地域（福岡市をはじめとする九州各地、山口県など）からの来場者の割合が増加を続け（06年度：21%、07年度：31%、08年度：31%、09年度：33%、10年度：37%、11年度：34%、12年度：38%）、13年度は44%と過去最高の割合となっている。

②公演鑑賞に伴う消費行動

- 観客アンケートから鑑賞前後の消費行動をみると、13年度の飲食またはショッピングをした人の割合は51%。
- 飲食をしている割合は42%で平均金額は1,481円、ショッピングをしている割合は21%で平均金額は5,434円となっている。

③経済波及効果

- 上記公演鑑賞に伴う消費行動も含めた13年度の経済波及効果を算出すると、最終需要は、劇場の管理運営が約6.6億円、主催事業が約2.2億円、主催事業の観客の消費支出が約2.4億円となっている。
- それらの経済波及効果は、約16.6億円である。
- また、データ収集の制約から参考値ではあるが、貸館事業に基づいた経済波及効果については、最終需要が約4.8～5.2億円、経済波及効果が約6.7～7.2億円である。
- 経済波及効果の誘発係数は、管理運営と主催事業（観客消費支出含む）で1.48、貸館を含めると1.46となっている。試算を始めた04年度以降、管理運営・主催事業の誘発係数は1.45～1.48となっており、北九州芸術劇場の運営は、相応の経済波及効果をもたらしていることが明らかとなっている。
- 雇用効果については、就業者ベースで149～154人、雇用者ベースで130～136人という結果となっている。

A-7 地域への貢献②（地域アピール、ブランド力のアップ）

①シビックプライドの醸成

- 北九州芸術劇場は、北九州市のシンボルとして市民の支持が広がっており、舞台芸術の愛好家でなくとも市民の誇り（シビックプライド）の一部となっていることは、10年度の座談会出席者の共通認識であった。その上で、劇場には北九州市全体の「文化の結節点」としての役割に期待が寄せられている。

※「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く。

②パブリシティ効果

- パブリシティ効果についてみると、北九州芸術劇場や劇場事業に関する13年度の記事掲載件数は180件。新聞掲載記事を広告宣伝費に金額換算すると、13年度は約1億6,629万円となる。
- 13年度の劇場事業に対する北九州市の補助金は約6,435万円であり、劇場事業のパブリシティ効果は補助金の規模を2倍以上上回る成果を生み出していると言える。

A-8 広域施設としての役割発揮

①圏域内の市町村の劇場・ホールとの積極的な連携

- 09年度に実施した九州圏域の劇場・演劇関係者へのグループインタビューでは、舞台の専門家が少ない地域の公立ホールや公立劇場で、「困ったときには北九州芸術劇場に相談したり、北九州芸術劇場を手本とする」といった意見が聞かれた。
- また、「創る」「育つ」事業で九州圏域における演劇人の人材育成に貢献しており、北九州芸術劇場のプロデュース作品の九州圏域での巡回公演の可能性について期待する意見も多い。

②当該文化施設の運営だけにとらわれない圏域全体の文化振興

- 北九州芸術劇場の事業や運営は福岡市にも波及している。「福岡のみならず九州圏域で、今後、どのように棲み分けや連携ができるのか、検討が必要」との九州圏域の劇場・演劇関係者の意見が聞かれた。
- 今後の北九州芸術劇場あるいは（公財）北九州市芸術文化振興財団の長期的なビジョンには、地域版アーツカウンシルとしての役割や機能を視野に入れることが期待されるが、09年度のグループインタビュー調査では、九州圏域全体の舞台芸術環境を視野に入れたアーツカウンシルが求められていることが分かった。

B. 管理運営

B-1 場の提供・支援（貸館）

①ミッションに基づいた貸館事業の実施

- 貸館事業については、「創る」「育つ」「観る」の劇場の運営方針と並んで、地域の創造力を高めるための「創造支援」として位置づけられている。

②貸館事業における入場者数

- 13年度の貸館の公演・講演事業数は224事業。計307回の公演・講演が実施され、入場者数は152,576人となっている。

③利用者の満足度

- 貸館利用者を対象とした利用者調査の結果では、劇場利用に関する総合的な満足度※は99%で、利用者のほぼ全員が満足している。また、今後の利用意向※も99%と高いことは、満足度の高さの現れといえよう。
- 具体的な項目をみても、スタッフの応対や説明などソフト面に対する満足度※は、「現在の開館時間は適当である」を除いて97%以上と非常に高い。また、「はい」という積極的な評価の割合も高い。
- 05年度（利用者調査開始年度）以降、項目ごとに満足度は上下しているが、常に高い満足

※ 満足度は「たいへん満足」+「まあ満足」の割合、利用意向は「はい」+「どちらかと言えば『はい』」の割合。無回答は除く。

度を維持するべく、利用者の苦情や要望に対する劇場スタッフの前向きな対応の成果がうかがえる。

B-2 施設のホスピタリティ・サービス

①公演や催し物情報に関する満足度

- 開館年度（03年度）に満足度が65%であった「公演情報の入手のしやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、13年度は88％（06年度：79%、07年度：81%、08年度：86%、09年度：87%、10年度：85%、11年度：90%、12年度：89％）となっている。開館から11年が経過し、観客が劇場に慣れてきたこともあろうが、劇場側の情報発信への工夫や努力も大きいと思われる。

②ホスピタリティに関する満足度

- 03年度に満足度が69%であった「劇場の入口・案内表示のわかりやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、13年度は89％（06年度：79%、07年度：82%、08年度：87%、09年度：88%、10年度：89%、11年度：90%、12年度：89％）となっている。
- 満足度の上昇は、①公演や催し物情報に関する満足度と同様に、開館から11年が経過し、観客が劇場に慣れてきたこともあろうが、案内表示の増設や既存サインの大型化など、劇場側の工夫によるところも大きいといえる。
- 「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」は03年度から88%の高い満足度が少しずつ上昇し、11年度は97%まで上昇し、13年度は96%となっている。

③スタッフの応対や電話応対等に関する満足度

- 03年度から満足度の高かった「劇場係員の応対」は、継続して高い満足度を保っており、13年度も98%と満足層の割合は非常に高い。また、「電話予約・チケットカウンターの応対」の満足度は95%で、劇場の顧客応対は高い評価を受けている。今後も高い満足度の維持に向けた取り組みが望まれる。
- 「チケットの予約・購入のしやすさ」は、03年度は53%と満足度項目のうち最も低かったが、04年度に73%に上昇、その後年々満足度は上昇し、オンラインチケット購入システムを導入した11年度は90%、13年度は89%となっている。

④飲食に関する満足度

- 劇場ロビーの飲食サービスの満足度は70%台後半で推移してきたが、07年度に80%に達し、13年度は85%となっている。

B-3 施設の維持管理

①施設の維持管理

- 貸館利用者を対象としたアンケート調査をみても、劇場の施設や設備などのハード面で高い満足度となっている。特に、「館内が清潔」、「ホワイエや客席など劇場の雰囲気がよい」、「舞台設備・機器は充実している」、「設備・機器などを安全に使用できた」については、「はい」への回答が90%以上と大変高い評価となっている。また、05年度（利用者調査開始年度）以降、多くの項目で満足度は向上しており、劇場スタッフの努力がうかがえる。

②稼働率

- 施設稼働率は、大ホールが90%、中劇場が84%、小劇場が82%である。
- 開館年の03年度を除き、3つのホールの稼働率は約70～80%で推移しており、2010年度の（一財）地域創造の悉皆調査結果（2010年10月1日時点でのデータ。専用ホールのうち政令市施設の平均稼働率は72%）と比較しても高い水準にある。ただし、稼働率が過度に高

い状況では、設備・機器の安全な使用にも影響を及ぼしかねないことに留意する必要がある。

C. 経営

※C-1 経営体制、C-2 リサーチ＆マーケティングについては、調査や評価の方法を含め、今後の検討課題である。

C-3 経営努力

①外部資金、チケット収入の割合

- 北九州芸術劇場の13年度の事業費は2億1,693万円。財源内訳をみると、チケット収入が全体の52%、市の補助金が30%、文化庁と（一財）地域創造、協賛金による外部資金が19%となっている。
- チケット収入の割合は、2007年の（一財）地域創造の悉皆調査結果による全国平均の試算値（事業収入：37%）を大幅に上回っている。外部資金の割合についても、北九州芸術劇場の実績は全国平均（11%）を上回っている。

②事業収支からみた経営努力

- 事業収支面でも、開館以来培ってきた交渉力や事業の効率性の向上、交通費や宿泊費に関する積極的な経費削減（団体割引の適用等）の努力が行われていることが数字からうかがえる。
- 13年度の事業費の収入の部の決算報告では、予算額と決算額の差が事業収入で2,756万円の増収、補助金等収入は4,059万円の減収となっており、経営努力がうかがえる。

3．事業評価の結果から－今後の事業評価の方向性と検討課題

北九州芸術劇場の事業評価調査では、03年度の開館年度から図表5-2のとおりの調査を行ってきた。

図表5-2　北九州芸術劇場における実施調査

調査内容	03年度	04年度	05年度	06年度	07年度	08年度	09年度	10年度	11年度	12年度	13年度
【継続調査】											
劇場運営基礎データの収集・分析	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
観客調査（アンケート）	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
貸館利用者を対象としたアンケート調査（実施：05年度～、整理・分析：07年度）			- -	- -	→	→	→	→	→	→	→
経済波及効果の算出		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
パブリシティ効果の把握	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
【テーマ調査】											
専門家による座談会（開場から1年間の劇場運営の成果について）		○									
市民意識調査（アンケート）			○								
ワークショップ参加者を対象とした学芸調査（アンケート／グループインタビュー）		○									
学校を対象とした学芸調査（アンケート）					○						
（舞台芸術の公演による）劇場使用者へのグループインタビュー				○							
劇場スタッフへのグループインタビュー						○					
北九州芸術劇場の広域的役割と長期的ビジョンに関するグループインタビュー							○				
舞台芸術以外の分野から見た北九州芸術劇場の役割（座談会）								○			
北九州芸術劇場の10年間と社会情勢、文化・芸術環境の変化										○	
北九州芸術劇場のこれまでの10年と、これからの10年											○

最後に、今後の事業評価を継続する上で、検討・留意すべきだと考えられる事項を、次の7点に整理した。

①継続調査

経年変化による劇場運営、事業に関する満足度やニーズの分析のためにも、上記5つの継続調査を引き続き実施し、データや情報を蓄積することが望まれる。

②地域や市民への効果を把握するための定性調査

また、劇場が地域や市民に与える波及効果や影響を把握するため、定性調査の実施も検討したい。近年、劇場と地域との連携がより強く求められる中、①観客（あるいはチケットクラブ会員）、②創造事業や市民参加事業に参加した市民、③地域（市民センターなど）でのアウトリーチ事業参加者などを対象としたグループインタビューや聞き取り調査を行い、劇場運営や事業に関する詳細な意見、成果を把握する機会が必要だと考えられる。また、2005年度の市民意識調査の実施から9年が経過していることから、今後タイミングを見て、同様の市民調査の実施を検討する必要もある。

③劇場内部での事業評価の活用

2008年度の劇場スタッフへのグループインタビューからは、①この事業評価調査の結果も含めて、劇場内で蓄積しているデータを有効に活用していくこと、②評価結果について、係を越えた情報共有や振返りの機会を持つこと、が必要だという声が多かった。今後は、評価本来の目的である PDCA サイクル（Plan→Do→Check→Action）をより有効に機能させるためにも、事業評価調査の結果を現場での業務の振返りに有効活用するとともに、データの収集や整理にあたって、スタッフのより積極的な関わりを促していくことが重要だと考えられる。

④評価結果の公表と発信

北九州芸術劇場は、ホームページ上で劇場の運営方針を広く周知し、事業評価調査の報告書（本編）をホームページで公開するなど、市民へのアカウンタビリティに努めている。今後、評価結果も含め、劇場運営や事業の成果に関する市民への情報発信をより一層強化するとともに、市民からの意見を聴取するためのしくみづくりを検討していく必要があるだろう。また、開館10周年という節目にあたり、これだけの長期間の評価の蓄積は、全国の公立文化施設や文化政策にとっても意義深い取り組みだと言える。公共劇場や文化関係者の間でその成果を共有するためにも、より積極的な公表や発信が望まれる。

⑤次の戦略構築への活用

また、次の北九州芸術劇場の戦略構築のために、これまでの事業評価の結果を活用することが望まれる。2009年度のグループインタビュー調査、2010度の座談会では、これまでの劇場の事業や運営を高く評価するとともに、それらを継続するだけではなく、次の目標設定とそれに向けた取り組みの必要性を指摘する意見があった。開館から10年が経過し、開館当初に設定した目標が徐々に達成されつつあることを考えると、ミッションの再確認や見直し、それに基づいた事業や運営方針の再検討も視野に入れた取り組みが期待される。

⑥事業評価の再構築

前述した「次の北九州芸術劇場の戦略」に基づく事業評価の再構築も視野に入れたい。戦略や目標を設定し直せば、その評価のあり方も再検討する必要がある。この数年間、劇場に対する観客や貸館利用者の評価は、多くの項目で高評価となっている一方で、批評的な観点からの課題や新たな要望が見えにくくなっている点も否めない。また、観客や利用者以外の市民、舞台芸術以外の芸術分野、あるいは劇場周辺の地域を越えて、多様なステークホルダー（利害関係者）との関係を広げていくことが2010度の座談会でも期待されている。ま

た近年、文化政策や文化プログラムなどの事業評価の手法そのものが変化しており、評価の理論的なフレームワークとして用いられることの多いロジック・モデルの手法などを北九州芸術劇場の事業評価にも取り入れることも考えられる。その試行として、2012年度のテーマ調査では、10年間の事業評価の主要な項目を、結果（アウトプット）、短期的・中長期的な成果（アウトカム）、直接的・間接的な影響や効果（インパクト）に分けて整理した。それらも踏まえた上で、評価の視点、指標のあり方、分析手法などについて見直し、評価フレームを次の段階へと進化させることが望まれる。

⑦次の10年を見据えた総括

北九州芸術劇場は、2013年８月に開館10周年を迎えた。これまでの事業評価の結果を見ると、その間、北九州芸術劇場は、積極的な事業や運営を継続、進化させ、それが観客をはじめとした市民や地域からの評価に結びついてきたと言える。開館後数年間で減速する公共劇場が少なくない中、10年間、開館当初のコンセプトに基づいて一定水準の事業や運営を継続してきたこと自体、高く評価すべきであろう。その実績に甘んじることなく、次の10年の継続とさらなる飛躍を達成するため、次章の「北九州芸術劇場のこれまでの10年と、これからの10年」では、北九州芸術劇場の構想から2013年度までの劇場運営を振り返り、社会情勢や文化芸術環境の変化を踏まえ、次の10年の課題や展望について、論点を整理した。

図表5-3　政策評価フレームに基づいた評価結果一覧

※この評価結果一覧は、（一財）地域創造「公立ホール・公立劇場の評価指針」（平成19年3月）の評価フレームに基づき、北九州芸術劇場で03年度～13年度に実施した事業評価調査の結果を整理したものである。

※事業評価の結果を、定量評価（事業実績データ、アンケート調査データ）とともに、定性評価（グループインタビュー等）の結果も含めて総合的に整理した。

※「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価指標・基準を網羅することを目的とはせず、基本フレームを活用することにより、北九州芸術劇場の事業実績や運営の状況を、体系的に把握することを目的としている。

※したがって、「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価指標・基準とはすべてが一致するものではない。また、段階評価（達成度合いを自己点検できる解説式のモデル指標）項目については、劇場内部の自己評価であることから本報告書では掲載対象外としている。

A：劇場の設置目的

評価大項目		評価指標・基準	調査結果・評価データ　※[　]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
A-0	［ミッション］ 「創る」 「育つ」 「観る」	①劇場の運営方針（ミッション）の有無と内容、ミッションの浸透の状況等	• 劇場では、開館年度から「創る」「育つ」「観る」の3つを運営方針として設定。 • ［専門家との座談会/10年度］では、市内の美術、建築、伝統工芸の専門家が、地域における劇場の存在意義を高く評価していることがわかった。舞台芸術分野に限らず多様な地域文化の担い手が、劇場の事業や運営を信頼していることがうかがえる。	• 3つの運営方針への支持率は、観客、市民、九州圏域や全国の劇場関係者からも高い。 • 一方で、次なる目標を確立し、それに向かって挑んでいくべきとの意見も。	• 劇場内部での、事業評価結果を活用したPDCAサイクルの実現のための議論の場の設定、きっかけづくり。 • 観客調査の継続。 • 長期的な視点（5年ごと、10年ごとなど）での市民調査の検討、実施。 • 有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。 • 「次なる目標」としての事業方針と、その評価手法の検討。
		②劇場の運営方針を支持する市民の割合（市民の支持率）	• 運営方針への観客からの支持率は、「創る」「育つ」「観る」いずれも開館年（03年）度から90%以上。 〇13年度　創る：96%、育つ：95%、観る：99%　［観客調査/13年度］ • 一般市民からの支持率も、「創る」「育つ」「観る」いずれについても80%以上。 〇創る：81%、育つ：90%、観る：90%　［市民調査/05年度］ ※支持率は、「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」の割合。無回答を除く。割合（%）は小数点以下を四捨五入して掲載。		
		③事業や運営に対する自己評価や振返り、運営データの蓄積	• 業務の振返り、データを蓄積・活用して評価や業務にフィードバックしていくことが必要だという認識が高い。［劇場スタッフへのグルイン/08年度］	• 事業評価データ等を活用し、係を超えた振返りの機会づくりが必要。	
		④市民の劇場の認知度や劇場への意見	• 市民の劇場の認知度（劇場があることを「知っている」と回答した割合）は84%、知っている場合の来場・利用率は44%、来場したことがない場合の今後の来場意向は78%。［市民調査/05年度］ • 劇場に来場経験を持つ市民を増やすこと、劇場の存在を肯定的に考えてくれる市民を増やすことは、劇場スタッフへのグルインでも、業務を超えた共通の問題意識。［劇場スタッフへのグルイン/08年度］	• 運営方針に基づいた長期的な事業の継続により、地域に浸透。 • 北九州市の人口（13年4月1日現在）は約96万人であり、すでに人口の3倍近くの利用者が来場。	
		⑤劇場の来場者（利用者）数	• 年間来場者（利用者）数は、05年度から09年度まで毎年27～28万人で推移。10年度は1年間で31万人に増加したが、12年度、13年度と続けて28万人。開館からの11年間で延べ309万人が来場。		
A-1	［鑑賞系事業］ 「観る」 観る楽しみを知ってもらうため、国内外のエンターテイメント性や芸術性の高い作品を招き、市民に様々な公演を提供します	①ミッションに基づいた鑑賞系事業の実施	• 小劇場・現代演劇、ダンス・現代舞踊など幅広いラインナップの公演事業を実施。 • 09年度から北九州芸術劇場が注目する演劇人たちをバックアップする「ツドエ meets 北九州」を立ち上げた。 • 多様な年齢層、多様な鑑賞経験を持つ観客が来場。 〇年齢層　29歳未満：22%、30歳代：22%、40歳代：25%、50歳代：17%、60歳以上：14%　平均年齢：42歳。 〇北九州芸術劇場での鑑賞経験　今日が初めて：25%、1～2回：16%、3～5回：22%、6回以上：37% • 北九州市域外（北九州市内+北九州近隣地域を除く）からの観客が13年度は過去最高の割合となった。 〇06年度：21%⇒07：31%⇒08：31%⇒09：33%⇒10：37%⇒11：34%⇒12：38%⇒13：44%［観客調査/13年度］	• 小劇場・現代演劇を中心に、幅広い事業構成で、多様な年齢層、多様な鑑賞経験を持つ観客を集客。 • 公演事業全体で極めて高い入場率。「観る」に対する観客・市民の支持率、公演内容に関する観客の満足度も極めて高い。 • 「観る」という方針では、福岡市と何らかの機能分担をした上で、「創る」や「育つ」に重点を置いていくことも、将来のひとつの方向性だと考えられる。 • 公演事業の質に対する信頼感の形成と、他都市からの観客の吸引力。 • 北九州市域外からの観客も増加しており、九州の鑑賞拠点として、劇場が認知・評価されている。中長期的な市域内と市域外との集客バランスの検討。 • 観客調査のアンケートにおける無回答の割合が増加している。	• 観客調査の継続。 • 観客の意識やニーズを詳細に把握するための調査の実施。 • 有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
		②年間延べ観客数	• 13年度の公演事業は17事業、公演回数は46回、入場者数は20,319人である。入場率は88%。 • 創造事業、提携・協力事業、演劇フェスティバルも含めた鑑賞系事業全体では、37事業、公演回数は119回、入場者数は38,312人である。入場率は90%。		
		③公演に対する観客の満足度	• 開館年から「公演内容」への満足度の高さが顕著。満足層の割合は97%。「公演のチケット料金」への満足度も高く、「公演内容」への評価の高さが「公演のチケット料金」の満足度にも反映していると考えられる。 • 満足層の割合（「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く。） 〇公演内容　03年度：96%⇒04：96%⇒05：97%⇒06：97%⇒07：98%⇒08：97%⇒09：98%⇒10：97%⇒11：98%⇒12：98%⇒13：97% 〇公演のﾁｹｯﾄ料金　03年度：86%⇒04：88%⇒05：92%⇒06：90%⇒07：92%⇒08：93%⇒09：93%⇒10：91%⇒11：94%⇒12：94%⇒13：93% ［観客調査/13年度］ • 「絶対にいい公演が来てくれる」という信頼感が生まれているとの評価があった。その信頼感によって、北九州以外の他の都市からの観客を北九州市に吸引しているとの意見があった。［専門家との座談会/10年度］		
		④鑑賞系事業による芸術団体やアーティストからの評価	• 公演事業での劇場使用者からも、劇場の運営方針や実施事業への支援の声、期待の声が大きい。特に、劇場スタッフの対応については、人間関係・信頼関係が作れる劇場であるとの評価が高い。［劇場使用者を対象としたグルイン/06年度］ • ［九州圏域の劇場・演劇関係者へのグルイン/09年度］でも、魅力的なものを呼んでいるという評価や、東京や大阪からの演劇作品の受け皿として、九州圏域の代表的な劇場であるという共通認識がある。 • ［全国の劇場関係者へのグルイン/09年度］では、将来的に福岡市に拠点文化施設が設置された場合、市外からの観客層に影響が出ることは十分考えられるため、「今まで以上に『観る』という運営方針を拡大する必要はない」との意見も出された。		

評価大項目		評価指標・基準	調査結果・評価データ　※[　]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
A-2	［創造系事業］ 「創る」 北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、“ものづくりの街”北九州市をアピールし地域の活性化を促していきます	①ミッションに基づいた創造系事業の実施	• 全国発信型、地元演劇人の育成型、市民参加型などの多様な事業が実施されている。 • 開館当初から継続して実施されている事業に新規企画事業を加えながら、効果的に事業を展開している。 • プロデュース作品「彼の地」は北九州（8回）、東京（3回）で公演を行った。	• 高い入場率を確保。市民に事業が定着していること、地域からの注目度の高さがうかがえる。 • 「創る」に関する観客および市民の支持率は高く、今後もこの基本方針の継続が望まれる。 • 九州圏域や全国に視野を広げても、北九州芸術劇場の「創る」事業には大きな期待が寄せられている。 • 今後の北九州芸術劇場の運営にとって、アジアとのつながりは重要な戦略の一つと考えられる。 • 美術館との共同制作など、舞台芸術以外の分野との協働の模索。	• 観客調査の継続。 • 創造系事業参加者の意識・満足度・ニーズ把握のための調査の実施。 • 有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
		②年間延べ観客数	• 13年度は、4事業で21回の公演が行われ、入場者は3,208人。入場率では平均で92%。 • 「リーディングセッション vol.22」で97%となっており、創造系事業ではすべての公演の入場率が80%を超えている。		
		③創造系事業の公演に対する観客の満足度	• 鑑賞系事業③を参照		
		④創造系事業による芸術団体やアーティストへの効果	• 北九州・福岡の若手劇団・カンパニーから「劇団相互、あるいは北九州・福岡の連携が強まった」、「役者や劇団のレベルアップになった」と評価。［劇場使用者を対象としたグルイン/06年度］ • ［九州圏域の劇場・演劇関係者へのグルイン/09年度］でも、利用の自由度の高さやスタッフの専門性の高さが評価されている。 • ［専門家との座談会/10年度］では、舞台芸術以外の分野との協働の可能性について意見が寄せられた。それと同時に、そうした協働を可能とするための土壌として、地域の文化資源のデータベースが必要だとの意見も出された。 • ［全国の劇場関係者へのグルイン/09年度］では、「北九州から演劇界に一石を投じるオリジナリティのある作品が出てきてほしい」という期待も寄せられていた。また、次なる目標としてアジアとの国際交流や創造・発信への取り組みが期待されている。		
A-3	「育つ」 アーティストを小・中学校等に派遣するアウトリーチ活動や劇場サポーター組織を通じてのヒューマンネットワーク作り等により、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域を育てながら地域とともに育っていく劇場を目指します ［普及系事業①］ 主に劇場内で実施するワークショップや講座など	①ミッションに基づいた普及系事業の実施	• 普及系事業を継続的に実施。13年度も、 ○劇場10周年を記念して、過去のシアターラボの卒業生による記念公演「シアターラボ・リターンズ」 ○「アーティスト往来プログラム」として、多彩な講師を招いた「ワークショップ」、「インリーチ」、「アウトリーチ」 などの多様なプログラムを実施。 • 11年度からの「アーティスト往来プログラム」は、劇場と学校や地域との間に、より多様な関係を生み出そうとする意図がうかがえる。	• 「育つ」に対する観客および市民の支持率は高く、今後もこの基本方針の継続が望まれる。 • ワークショップや講座参加者の事業に対する満足度は極めて高く、参加したことで鑑賞活動や日常生活の中に多様な効果が生まれている。 • 学校との連携事業については、演劇を活用した事業が子どもたちの表現力やコミュニケーション力への効果に期待が高い。長期的な視点で、まず事業の効果を立証するデータや情報を整理することが重要。 • 地域と連携した事業については、演劇を活用した事業が地域コミュニティに及ぼす効果など、長期的な視点で、事業の効果を立証するデータや情報を整理することが重要。	• 事業参加者、関係する地域・施設等を対象とした意識・満足度・ニーズ把握のための調査の実施。 • 有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。 • 長期継続の学芸事業による定量的・定性的な成果を把握するための調査の検討。
		②年間の事業数、アクティビティの回数、参加人数	• 13年度は、主に劇場内で実施するワークショップや講座などの回数は153回、参加人数は2,050人。 • 劇場およびリバーウォーク北九州の開館10周年を意識しており、例年以上に積極的に地域と劇場との関係を開拓するような企画内容が多く見られる。		
		③講座・ワークショップ参加者の満足度	• 講座・ワークショップ参加者の事業に関する評価はたいへん高い。［学芸調査・アンケート/04年度］ ○参加者の講座やワークショップに対する総合的な満足度　満足層：98%、うち「たいへん満足」：56% ○「たいへん満足」の割合が高い項目　講座・ワークショップの内容（63%）、講師（72%）、劇場係員の応対（63%）		
		④参加者が事業から得たもの（事業の効果） －講座・ワークショップ	• 講座やワークショップに参加したことで、参加者は次のような効果があったと感じている。［学芸調査・アンケート/04年度］ 「人間関係に広がりが生まれた」（67%）、「演劇やダンスに新たな興味がわいた」（65%）、 「劇場が身近になり、足を運ぶ回数が増えた」（57%）、「より多くの公演を鑑賞したいと思った」（50%）、 「仕事や活動の幅、可能性が広がった」（43%）など。 • グループインタビューでも、鑑賞事業だけでは得られない深い効果を指摘する声が多い。［学芸調査・グルイン/04年度］		
A-4	［普及系事業②］ アウトリーチ（学校、福祉施設等との連携など	①他分野への貢献や地域活性化を視野に入れた戦略目標の有無と内容	• 09年度から小学生から一般市民を対象としたアウトリーチ事業として、「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」事業を立ち上げ、地域との連携を強化した。11年度は3ヶ年計画の3年目で、20回のワークショップで参加延人数が440人、公演「冬の盆」は2回行い、242人の入場者であった。 • 13年度は、北九州市立美術館のコラボレーション企画として、劇場と美術館との合作ならではの特別企画「切り裂かれたキャンバス～『マネとマネ婦人像』をめぐって」を行った。 • 13年度に実施した「アーティスト往来プログラム」は、北九州市障害者芸術祭、特別養護老人ホーム、社会福祉法人との共同によるアウトリーチなど、福祉関係での活動に取り組んだ。		
		②学校等と連携したプログラム数と参加者数	• 学校との連携事業への評価　［小学校を対象としたアンケート調査/07年度］ ○事業経験者の約8割は、演劇を活用した事業が子どもたちに与える効果を実感。 ○具体的には、「自分の考えや気持ちを表現する力」（80%）、「豊かな感受性や想像力」（61%）、「人とコミュニケーションする力」（52%）については、効果を実感している先生が多い。 ○先生自身も「子どもたちそれぞれの個性や能力をより理解できるようになった」（72%）等の効果を実感。 ○事業に参加した先生では、今後の劇場との連携の意向も高い（連携したいと思う割合：83%）。 • 13年度に実施した学校、福祉施設等との連携したアウトリーチなどの回数は47回、参加人数は1,865人となっている。		

評価大項目		評価指標・基準	調査結果・評価データ　※[　]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
A-5	[市民文化活動支援] 市民参加型事業、貸館事業におけるアマチュア支援など	①ミッションに基づいた市民活動支援の実施	• 市民の文化活動支援については、創造事業や学芸事業と連携しながら、創造参加として市民が舞台に立つ公演事業やアウトリーチを実施。 • 13年度は、合唱物語「わたしの青い鳥2013」、「ダンスダイブウィーク」、「ハイバイ10周年記念ツアー『て』」、「月猫えほん音楽会2013《ワークショップ》」などの7事業で55回のワークショップやアウトリーチなどが実施された。受講延人数・入場者数の合計は2,009人。 • 合唱物語「わたしの青い鳥」は、04年度からの継続事業。 • [専門家との座談会/10年度]では、「わたしの青い鳥」について「参加した人たちが楽しかったことを次々に伝えていくことで、喜びを共有する市民が増えている」と高く評価。	• 市民参加型事業には継続事業が多く、市民からの支持がうかがえる。 • 貸館事業における専門的、技術的支援については、ほぼ100%の高い評価。	• 貸館調査の継続。 • 市民参加型事業、アマチュア支援に関する調査手法の検討。 • 開館以降継続してきた事業の参加者に対するインパクト(直接的・間接的な波及効果)を把握するための調査の検討。
		②貸館事業に関するサービス内容、質への評価 (専門的・技術的なアドバイスやサービスなど)	• 貸館利用者への専門的・技術的アドバイスについては、「技術スタッフの応対がよかった」は99%の大変高い満足度。 • 関連する項目として、「設備・機器などを安全に使用できた」、「舞台設備・機器は充実している」はともに100%の高い満足度。[貸館調査/13年度]		
A-6	[地域への貢献①] 地域経済などへの波及効果	①地域外からの来場者割合	• 06年度以降、北九州市および近隣地域以外の地域(福岡市をはじめとする九州各地、山口県など)からの来場者の割合が増加を続け、13年度は44%と過去最高の割合となっている。 ○地域外からの来場者割合　06年度:21%⇒07:31%⇒08:31%⇒09:33%⇒10:37%⇒11:34%⇒12:38%⇒13:44% [観客調査/13年度]	• 北九州市域外からの来場者が増加していることは、舞台芸術の鑑賞拠点としての北九州芸術劇場の認知度、評価が向上しているものと考えられる。 • 観劇に伴う観客の消費活動も活発。劇場の事業規模に応じた経済効果が発生している。 • 今後、集客のためにも、より劇場と地域(北九州の街、近隣商店街、大学等)との連携を深めるための、積極的な方策の検討が望まれる。	• 地域(地域経済)への波及効果の測定手法、評価項目の検討。 • 継続調査の実施、精度アップ(劇場管理運営費、事業費の振り分け、観客消費支出の精度アップ)。 • 所得増、雇用増、税収増の試算。 • 貸館事業に伴う経済波及効果の精度アップ(貸館事業者、貸館事業観客へのアンケート調査)。 • 開館以降の地域(地域経済)へのインパクト(直接的・間接的な波及効果)を把握するための調査の検討。
		②公演鑑賞に伴う消費行動	• 鑑賞前後のショッピングの消費行動をみると、13年度の飲食・ショッピングをしている人の割合は51%。 • 飲食をしている場合の平均金額は1,481円、ショッピングの場合は5,431円。[観客調査/13年度]		
		③経済波及効果	• 13年度の経済波及効果を算出すると、 ○最終需要 劇場の管理運営:約6.6億円、主催事業:約2.2億円、主催事業の観客の消費支出:約2.4億円 (参考値)貸館事業に基づいた最終需要:約4.8～5.2億円　※試算 ○経済波及効果　約16.6億円 (参考値)貸館事業に基づいた経済波及効果:約6.7～7.2億円　※試算 • 経済波及効果の誘発係数は、 ○管理運営・主催事業・主催事業観客消費支出:1.48 ○貸館を含めた消費支出:1.46 • 04年度以降、運営管理・主催事業の誘発係数は、事業規模により1.45～1.48で推移。 • 雇用効果は、就業者ベースで149～154人、雇用者ベースで130～136人。		
A-7	[地域への貢献②] 地域アピール、ブランド力のアップ	①シビックプライドの醸成	• 北九州芸術劇場は、北九州市のシンボルとして市民の支持が広がっており、舞台芸術の愛好家でなくとも市民の誇り(シビックプライド)の一部となっていることは、10年度の座談会出席者の共通認識であった。 • その上で、劇場には北九州市全体の「文化の結節点」としての役割に期待が寄せられている。[専門家との座談会/10年度]	• 毎月コンスタントに掲載されていること、全国紙・地方紙でも事業が紹介されていることなど、劇場事業の定着と広がりを評価。 • 新聞掲載記事の広告宣伝費への換算金額は、市の事業に対する補助金(約8,600万円)を上回る規模であり、北九州芸術劇場の事業や運営が高いパブリシティ効果を生み出している。 • 北九州芸術劇場に関して、肯定的な意見が多いことは高く評価。一方、広い北九州市域の中で、劇場や劇場事業に関する情報をいかに市民に届けるかが検討課題。 • 北九州のシンボル、シビックプライドとしての評価の高まり。	• より精緻なパブリシティ効果の測定手法、および劇場の情報発信力を把握する評価手法の検討。 • 長期的な視点(5年ごと、10年ごとなど)での市民調査の検討、実施。 • 市民の劇場への意識・ニーズをより詳細に把握するための評価手法の検討。
		②パブリシティ効果	• 北九州芸術劇場や劇場事業に関する13年度の記事掲載件数は180件。 • 180件の新聞掲載記事を広告宣伝費に金額換算すると、13年度は約1億6,629万円(12年度:約1億800万円)。 • 13年度では、「切り裂かれたキャンバス」、「Re: 北九州の記憶」などの学芸事業や貸館事業に関する記事が多い。また、津村館長の退任と劇場法の施行に関する記事が数多く紹介されており、13年度のパブリシティ効果全体に影響を与えている。		
		③劇場・ホールの存在を肯定的に考えている市民の割合	• 市民調査では、「これからの時代に必要な施設である」(46%)、「市の文化行政のシンボル」(35%)といった肯定的な意見への回答割合が高い。 • 劇場開設の効果として、鑑賞機会や日常生活の中で芸術文化に触れる機会が増えたとする市民が多い。 • 一方で、「情報が限られており、どんなことをやっているのかわかりにくい」という意見も多い(44%)。[市民調査/05年度] • 劇場スタッフのインタビューでは、広い北九州市の中でどのように地域に劇場や舞台芸術を浸透させていくのか、劇場を応援してくれる市民をどのように増やしていくのかが、今後の検討課題としてあがっている。[劇場スタッフへのグルイン/08年度]		

評価大項目		評価指標・基準	調査結果・評価データ　※[　]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
A-8	［広域施設としての役割発揮］ 圏域内の他施設の活動や文化振興に対する支援者の役割を果たします ＊「広域施設」とは主に都道府県立の公立ホール・公立劇場を想定	①圏域内の市町村の劇場・ホールとの積極的な連携	• 舞台の専門家が少ない地域の公立ホールや公立劇場で、困ったときには北九州芸術劇場に相談したり、北九州芸術劇場を手本とする取り組みが生まれている。 • 「シアターコラボ」「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」といった「創る」「育つ」事業で九州圏域における演劇人の人材育成に貢献しており、北九州芸術劇場のプロデュース作品の九州圏域での巡回公演の可能性について期待する意見も多い。［九州圏域の劇場・演劇関係者へのグルイン/09年度］	• 今後、北九州芸術劇場が九州圏域に果たす役割には、より一層の期待が高まっている。 • 「北九州モデル」としての成功を、他の地方自治体に発信・波及させながら、次なる目標を確立し、それに向かって挑んでいくことが必要。 • 国や他の地方自治体（とくに九州圏域の県や市）との緩やかな連携も視野に入れて、地域版アーツカウンシルとしてのあるべき姿や北九州芸術劇場の位置づけを検討していくことが重要。	• 広域施設の役割を担うための「次なる目標」としての事業方針と、その評価手法の検討。
		②当該文化施設の運営だけにとらわれない圏域全体の文化振興	• 北九州芸術劇場の事業が、福岡市にも波及している。福岡のみならず九州圏域で、今後、どのように棲み分けや連携ができるのか、検討が必要である。［九州圏域の劇場・演劇関係者へのグルイン/09年度］ • 国のアーツカウンシルとは別に、地域版アーツカウンシルのようなものが北九州の文化振興ヴィジョンの中に入っているが、どのようにリアリティを感じさせるようにするかが大きな課題。［全国の劇場関係者へのグルイン/09年度］ • 2003年に開館して以来、「創る」、「観る」、「育つ」という事業の考え方と、事業評価を行うことの二点において、北九州芸術劇場が公共劇場のスタンダードを形成してきたと言える。［北九州芸術劇場のこれまでの10年と、これからの10年/13年度］		

B：管理運営

※この評価結果一覧は、（一財）地域創造「公立ホール・公立劇場の評価指針」（平成19年3月）の評価フレームに基づき、北九州芸術劇場で03年度～13年度に実施した事業評価調査の結果を整理したものである。

評価大項目		評価指標・基準	調査結果・評価データ　※［　］内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
B-1	［場の提供・支援（貸館事業）］	①ミッションに基づいた貸館事業の実施	• 貸館事業については、「創る」「育つ」「観る」の劇場の運営方針と並んで、地域の創造力を高めるための「創造支援」として位置づける方向性。	• 総合的な満足度、今後の利用意向ともに100％近い割合であることは、利用者からの大きな評価。 • 貸館事業のソフトに関する評価は大変高く、今後もこのサービス内容・質の維持が望まれる。	• 貸館調査の継続。 • 利用者の満足度に関する定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
		②貸館における入場者数	• 13年度の貸館公演・講演は224事業。計307回の公演・講演が行われ、入場者数は152,576人。		
		③利用者の満足度	• 劇場利用に関する総合的な満足度は99%。今後の利用意向も99%と満足度はたいへん高い。 • ソフト面に関する12項目のうち、「開館時間が適当である」以外は、満足層の割合が97%以上。貸館事業におけるスタッフの応対への評価は高い。［貸館調査/13年度］ • 13年度では、12年度に比べて、「施設利用や予約情報が入手しやすい」、「当日の対応が適切」、「事務スタッフの応対がよい」、「フロントスタッフの応対がよい」、「技術スタッフの応対がよい」の項目で「はい」への回答割合が高くなっている。		
B-2	［施設のホスピタリティ・サービス］	①公演や催し物情報に関する満足度	• 開館年度（03年度）に満足度が低かった「公演情報の入手のしやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、13年度の満足層は88%となっている。［観客調査/13年度］ ○公演情報の入手のしやすさ　03年度：65%⇒04：73%⇒05：78%⇒06：79%⇒07：81%⇒08：86%⇒09：87%⇒10：85%⇒11：90%⇒12：89%⇒13：88%	• 高い満足度は堅持し、低い満足度は大きく改善している。開館から10年が経過し、観客が劇場や鑑賞活動に慣れてきたこともあろうが、劇場側の工夫と努力が大きいと考えられる。 • 劇場のホスピタリティ・サービスに関する評価は大変高く、今後もこのサービス内容・質の維持が望まれる。	• 観客調査の継続。 • 観客の意識・満足度・ニーズ把握に関する定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
		②ホスピタリティに関する満足度	• 開館年度に満足度が69%であった「劇場の入口・案内表示のわかりやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、13年度は89%であった。 • 「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」は03年度から88%の高い満足度が少しずつ上昇し、11年度は97%まで上昇し、13年度は96%となっている。［観客調査/12年度］ ○案内表示　03年度：69%⇒04：74%⇒05：77%⇒06：79%⇒07：82%⇒08：87%⇒09：88%⇒10：89%⇒11：90%⇒12：89%⇒13：89% ○ﾃﾞｻﾞｲﾝ・雰囲気　03年度：88%⇒04：91%⇒05：93%⇒06：93%⇒07：94%⇒08：95%⇒09：96%⇒10：96%⇒11：97%⇒12：97%⇒13：96%		
		③スタッフの応対や電話応対等に関する満足度	• 「電話予約・チケットカウンターの応対」「劇場係員の応対」への満足度は大変高い。「劇場係員の応対」については、開館年度から90%以上の満足度を維持、13年度は98%であった。 • 開館年度（03年度）に満足度が低かった「チケットの予約・購入のしやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、13年度には89%の満足度となっている。［観客調査/13年度］ ○劇場係員の応対　03年度：92%⇒04：97%⇒05：98%⇒06：97%⇒07：97%⇒08：97%⇒09：98%⇒10：98%⇒11：99%⇒12:98%⇒13:98% ○電話・ﾁｹｯﾄｶｳﾝﾀｰ　03年度：80%⇒04：91%⇒05：93%⇒06：92%⇒07：93%⇒08：95%⇒09：96%⇒10：96%⇒11：97%⇒12:97%⇒13:95% ○ﾁｹｯﾄの予約購入　03年度：53%⇒04：73%⇒05：79%⇒06：80%⇒07：83%⇒08：90%⇒09：86%⇒10：84%⇒11：90%⇒12:89%⇒12:89%		
		④飲食に関する満足度	• 劇場ロビーの飲食サービスの満足度は70%台後半で推移してきたが、07年度に80%に達し、13年度は85%となっている。［観客調査/13年度］ ○飲食サービス　03年度：73%⇒04：78%⇒05：79%⇒06：77%⇒07：80%⇒08：83%⇒09：86%⇒10：86%⇒11：88%⇒12:86%⇒13:85%		
B-3	［施設の維持管理］	①施設の維持管理	• 貸館調査でも、劇場の施設や設備などハード面で利用者からの満足度は大変高いが、搬入・搬出のしやすさについては複合施設でエレベーターを使用することから、他の項目に較べて満足度は低い。満足層の割合は次のとおり。［貸館調査/13年度］ ○館内は清潔に保たれていた：100% ○ホワイエや客席など劇場の雰囲気がよい：99% ○劇場の広さ（客席数）がちょうどよい：96% ○搬入・搬出がやりやすい：97% ○舞台設備・機器は充実している：100% ○楽屋など舞台裏の施設が使いやすい：99% ○設備・機器などを安全に使用できた：100%	• 劇場利用者からの施設・設備の維持管理に関する評価は大変高く、今後も安心・安全な施設利用への取り組みが望まれる。 • スタッフからは、中長期の修繕計画が課題としてあげられている。	• 貸館調査の継続。 • 利用者の評価に関する定量的評価指標、定性的評価指標の検討。 • 施設の維持管理に関する詳細調査の検討。
		②稼働率	• 施設稼働率は、大ホールが90%、中劇場が84%、小劇場が82%である。 • 開館年の03年度を除き、3つのホールの稼働率は約70～80%で推移。全国平均（専用ホールのうち政令市施設の平均稼働率は72%）と比較しても高い水準。ただし、稼働率が過度に高い状況では、設備・機器の安全な使用にも影響を及ぼしかねないことに留意する必要がある。		

C：経営

※この評価結果一覧は、（一財）地域創造「公立ホール・公立劇場の評価指針」（平成19年3月）の評価フレームに基づき、北九州芸術劇場で03年度～13年度に実施した事業評価調査の結果を整理したものである。

評価大項目		評価指標・基準	調査結果・評価データ　※[　]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
C-3	［経営努力］	①外部資金、チケット収入の割合	• 13年度事業費は約2億2,000万円。財源内訳は、チケット収入：約1億1,000万円（52%）、外部資金：約4,100万円（19%）、市の補助金：約6,400万円（30%）。 • チケット収入と外部資金の03年度からの比率をみると次のとおり。 ○チケット収入　03年度：54%⇒04：43%⇒05：37%⇒06：61%⇒07：52%⇒08：42%⇒09：65%⇒10：68%⇒11：53%⇒12:47%⇒13:52% ○外部資金　03年度：18%⇒04：20%⇒05：22%⇒06：14%⇒07：14%⇒08：15%⇒09：8%⇒10：15%⇒11：12%⇒12:13%⇒13:19% • 全国平均の試算値と比較すると、チケット収入割合（全国平均：37%）が平均を大幅に上回る。外部資金の割合についても、北九州芸術劇場の実績が全国平均（11%）を上回っている。	• チケット収入の割合の高さなど、劇場の営業努力、運営努力の成果として評価。	• 継続したデータ収集・分析の実施。 • 詳細調査の必要性の検討、実施。
		②事業収支からみた経営努力	• 13年度の事業費の収入の部の決算報告では、予算額と決算額の差が事業収入で約2,800万円の増収、補助金等収入は約4,100万円の減収となっており補助金等の減収分を、事業収入によってカバーした形になった。		

※C-1 経営体制、C-2 リサーチ＆マーケティングについては、調査や評価の方法を含め、今後の検討課題である。

第6章 北九州芸術劇場のこれまでの10年と、これからの10年

今年度のテーマ調査では、「北九州芸術劇場のこれまでの10年と、これからの10年」と題し、津村館長とニッセイ基礎研究所の吉本の講演及び対談を実施した。なお、この講演・対談は劇場の職員研修として、スタッフ全員の出席のもとで行われた。講演・対談の概要は、以下のとおり。

日時	平成27年1月9日（金） 14:00 開始 16:30 終了
会場	北九州芸術劇場 6階 創造工房（稽古場）
対談者	津村 卓（北九州芸術劇場 館長） 吉本光宏（株式会社ニッセイ基礎研究所 研究理事）
調査報告	大澤寅雄（株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 准主任研究員）
進行	垂水健治（北九州芸術劇場 シアターコーディネーター／舞台技術課長）
内容	第1部｜北九州芸術劇場の構想と10年間の劇場運営について（津村） - 北九州市との出会いと劇場の構想 - 1990年代の公共ホールの状況 - 市長の本気の姿勢、3つのコンセプト - 幅広いお客様に鑑賞機会提供するための「観る」 - 劇場のアイデンティティとしての「創る」、おもしろい街に「育つ」 - 「ハレの場」「知的な遊び場」「社交の場」としての劇場文化の創造 - 舞台芸術が持っている潜在的な力を劇場の外に届けるアウトリーチ など 第2部｜北九州芸術劇場の10年間と、社会情勢や文化芸術環境の変化（吉本・大澤） - 社会情勢や文化芸術環境の変化 - ロジックモデルを通して10年間を振り返る - 10年間のアウトプット、アウトカム、インパクト - 北九州芸術劇場が地域にもたらした貢献 - 北九州芸術劇場がつくってきた公共劇場のスタンダード - 1990年代以降の文化政策の流れ - ５年タームでの目標と事業の展開 など 第3部｜北九州芸術劇場の「次の10年」の課題や展望を考える（津村・吉本） - 公共劇場を取り巻くこれからの環境変化 - 広い領域で文化をとらえればチャンスがある時代 - 地方の劇場は、地域とどのように向き合うのか - 地域固有の伝承芸能の再発見 - 地域から「消えゆくもの」をプロデュースする - 老後を地方で過ごす東京からの高齢移住者 - 劇場が高齢社会の中で果たせる役割 など

以下、当日の進行に沿って、第1部から第3部までの論点を整理し、主な発言内容を紹介する。また、解説や補足が必要な文言等については、本章の最後にまとめて詳述する。

1．北九州芸術劇場の構想と10年間の劇場運営について

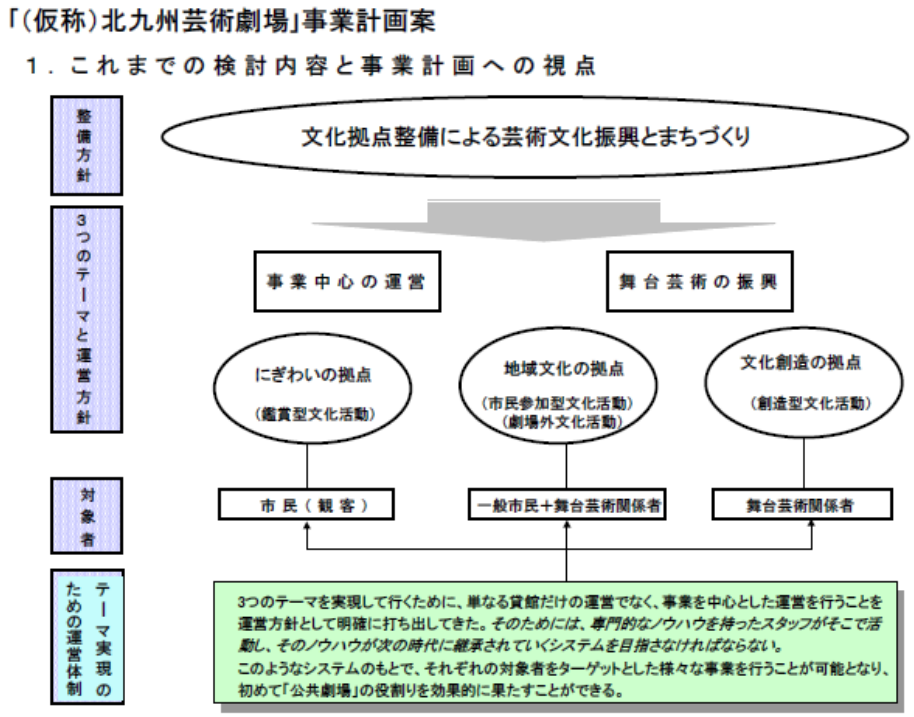
(1) 北九州芸術劇場が誕生した背景

1990年代の日本における公共ホールの建設ラッシュを背景にして、北九州芸術劇場が構想・計画された。当時の市長が劇場に求めたことは、「にぎわいの拠点」、「地域文化の拠点」、「文化創造の拠点」であり、その3つの運営方針に加えて、「観る」、「創る」、「育つ」という事業のコンセプトを掲げて北九州芸術劇場事業計画が作成された。

【主なポイント】

- 北九州芸術劇場はオープンが2003年ですが、1990年代、この国では公共ホールを1,000館以上つくっています。（中略）そこから1,000館、1,200館を超えるくらいの公共ホールがどんどん建っていきます。たしか一番多い年には160館ぐらい建設されたと思います。
- 最初に市長が言われたことは「育成をしたい」。劇場をつくることで、市民の方々、演劇をやっている表現者、スタッフ、そういう方々の育成をしたいということがまず第一番目の話として出てきました。次に言われたのが、やはり「集客装置として何とかできないだろうか」と。もう一つは第二次産業で日本一栄えたこの都市だが、正直を言うと衰退が少し始まってきている。その中で、「北九州の新しいアイデンティティをつくっていきたい」という、この3つのことを明確に市長から提案されました。
- それを簡単に言いますと「にぎわいの拠点」、「地域文化の拠点」、「文化創造の拠点」ということになっていきます。それを踏まえた上で「観る」、「創る」、「育つ」という3つのコンセプトをつくりました。そしてこの3つのコンセプトは、時代によって順番は変えていけばいい。「観る」が1番にあるときもあれば、「育つ」が1番に来ても構わない。社会との関係性であったり、劇場の成熟度であったり、市民の方々が何を求めているかで、この順番を変えていけばいいのではないかということで、3つのコンセプトを立ち上げました。

図表5-1「（仮称）北九州芸術劇場」事業計画書（➔解説①）概要（2000年1月、北九州市）より



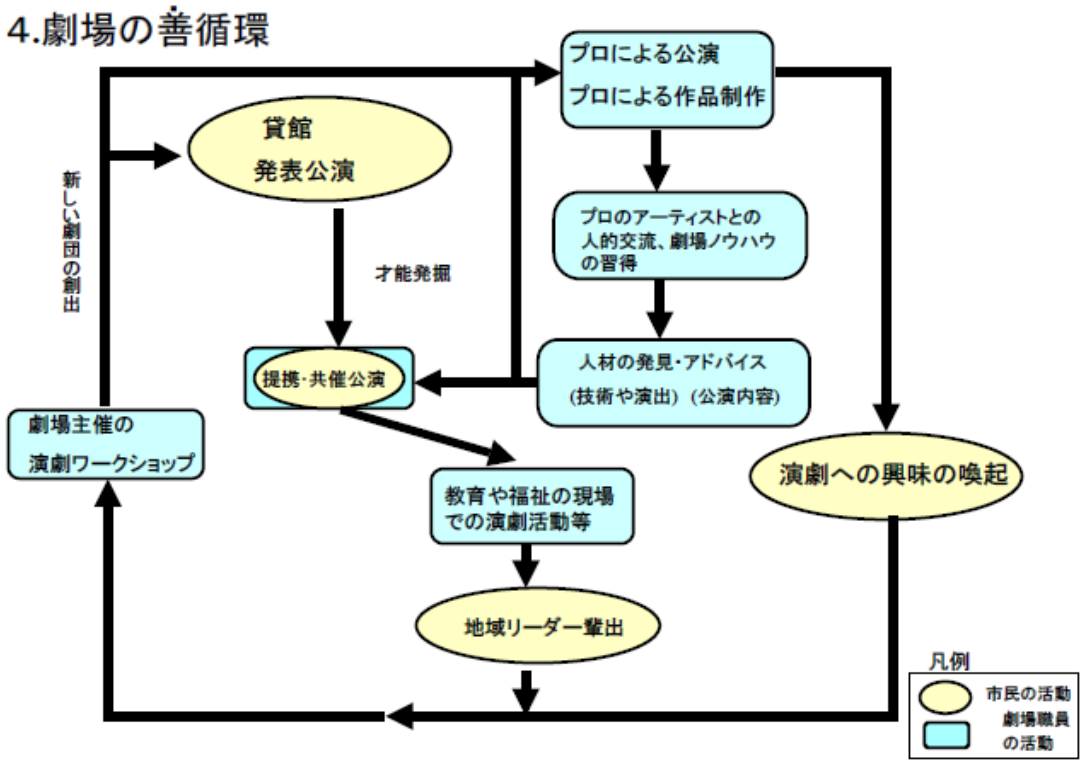
(2) 3つのコンセプトによる相乗効果や地域と劇場の循環

開館から10年間の事業の中で、「観る」、「創る」、「育つ」の3つのコンセプトは、それぞれで事業やプログラムに具現化しただけはなく、「観る」事業が「創る」と「育つ」事業を支え、「育つ」事業が「観る」と「創る」事業を支え、「創る」事業が「育つ」と「観る」事業を支えている。そうした事業間の相乗効果とともに、地域と劇場との間に人材や資金が循環する流れを生み出した。

【主なポイント】

- 北九州芸術劇場は補助金で事業を回していますが、大きなバジェット(予算、費用)の公演はできるだけ、お客様に買っていただくチケットの収入でその事業を回せないか。そこに補助金を使わずに、(中略)作品をつくることや、アウトリーチを含めた育成事業にどれだけお金を回せるか。そういったことを招聘事業のまず第一番のこととして考えながら進めていきました。
- 学芸事業に関しても、当初、学校アウトリーチという形でやってきました。その後、事業の幅を広くしていくこと、街とどう向き合っていくかということを試行錯誤しました。(中略)単に街というハードではなく、そこにいる人々、そこで商売をしている方、企業を含めて、全て市民として捉えて、劇場とどう組んでいくのかを今やっています。
- 将来的には、(劇場と企業の)お互いがお金を出し合って、お互いが持っている役割と特技を提出して、この街を面白くしていければと思っております。そういうことの中で、鑑賞事業、創造事業、学芸事業をうまく回して、バランスを取ってやっていくことによって、劇場で働いてくれているスタッフたちが、多様なスキルを盗んでいくことを期待しています。

図表5-2 「(仮称)北九州芸術劇場」事業計画書概要(2000年1月、北九州市)より



(3) 劇場のスタッフに求められるスキル

日本の公共劇場において、芸術監督やプロデューサーといった専門職の配置と創造劇場としての取組が1990年代から始まった。専門職として求められるスキルが高度化、細分化する中で、地方においては、劇場のコンセプトや地域の環境に応じながら、バランスを保ちながら劇場運営のスキルを身に着けることが求められている。

【主なポイント】

- 1990年代から、芸術監督やプロデューサーといった専門職が配置されるようになり、作品づくりを行ったり、いわば創造劇場（➔解説②）という時代が始まっていくわけです。専門職ということの認知がこの国全体に広がってきたと思います。
- （劇場のスタッフに求められるスキルとは何か。）これはあくまでも僕の考えですが、全部を持てるか、どれかをチョイスするかは別として、作品をつくるというプロデューサーとしてのスキル、また制作としてのスキルです。特に事業を担当する人たちに間違ってほしくないのは、「制作係」と「制作者」は違います。「制作係」とは作業をする人です。「制作者」とは作品を創っていく人です。
- 他のスキルで言いますと、地方の場合ですが、今、世の中にある既存の作品の中から、劇場のコンセプト、予算と経済情勢、地域の物理的または文化的インフラに沿って、何をチョイスして、どういう形態で公演をするかが、招聘公演を行うためのスキルです。
- そして、劇場運営としての経営スキル、あとは市や県などの設置団体ときちんと向き合っていくためのスキルです。まだたくさんありますが、以上のようなことがホール運営に必要なスキルではないかと思っております。

(4) 劇場に“なる”ために、スタッフ一人ひとりが劇場文化を創造していくこと

開館から現在に至る成果の実感として、北九州芸術劇場に対する信頼や期待の大きさを実感するとともに、大阪の維新派という劇団の演出家、松本雄吉氏が「劇場というものは“ある”ものではなく、“なる”ものだ」と語ったように、今後、スタッフの一人ひとりが考えて行動することで、ノウハウを蓄積し、北九州ならではの劇場文化を創造することが期待される。

【主なポイント】

- いま11年が経過している北九州芸術劇場は、それ（ホール運営のスキル）を徐々につくれているのではないかと思います。いろいろなカンパニーや制作会社、演出家、スタッフ、キャストが、九州で公演をやるなら、北九州芸術劇場でやりたいと言ってくれています。
- きっと劇場スタッフの皆さんは、僕が少し話させていただいたことを分かって、この劇場をどうしていけばいいかを一人ひとりが理解し、進めてくれていることではないかと思います。今後もそれを積み重ねていってほしいです。そのためには失敗しても構わないので、どんどん自分が思ったことを口にし、自分が思ったことをやっていただければいい。それが、劇場文化を創造していくことだと思います。
- 三十何年、劇場・ホールで仕事をしてきましたが、自分の中のテーマ、基本にしている言葉があります。大阪に維新派という劇団の演出をしている松本雄吉さんが僕に言ってくれたことがあるのです。「劇場というものは“ある”ものではなく、“なる”ものなんだよ」と。

2. 北九州芸術劇場の10年間と、社会情勢や文化芸術環境の変化

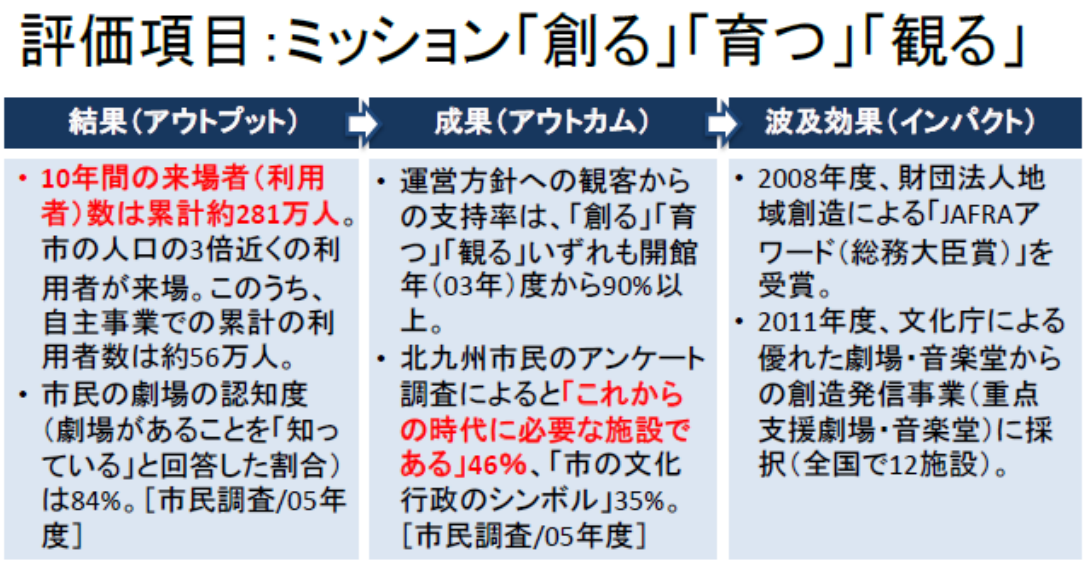
(1) 3つのコンセプトの10年間のアウトプット、アウトカム

2003年度の開館から2012年度までの10年間で、北九州芸術劇場の来場者・利用者が累計281万人となっている。「観る」、「創る」、「育つ」の3つのコンセプトに基づいた事業でのアウトプット、アウトカムは、それぞれに大きな結果や成果を残しており、評価の高さを維持している。

【主なポイント】

- 北九州芸術劇場が掲げている、「観る」「創る」「育つ」という大きなミッションに対するアウトプットとしては、この10年間の来場者・利用者が、累計281万人です。こうして改めて数字で見ると、今、北九州市の人口は90万人台ですが、ほぼ3倍近くの利用者が10年間で来場しています。
- 「観る」という方針ですと、アウトプットに関しては、入場者数が10年間で累計41万人です。アウトカムに関してはいつも思うのですが、公演内容への満足度の高さ(➔解説③)は、毎年よくこの高さをキープしている、しかも徐々に上がっているところがいつも感心するところです。
- 「創る」という観点で言いますと、これは私も驚いたのですが、創造事業での累計入場者数は、北九州芸術劇場以外の会場での入場者数が6割くらいいることです。要は、ここでつくったものを観た観客の数は、実は北九州以外のところで観た割合の方が多い(➔解説④)のです。
- 普及系事業、「育つ」ですが、主に劇場内で実施するものに関して言いますと、10年間の学芸事業全体の参加者数は5万8,000人、6万人弱が学芸事業に参加していたというアウトプットがあります。重要なのはアウトカムのほうで、アンケートを取ったときに、3人に2人が、「人間関係に広がりが生まれた」と答えています。

図表5-3 「北九州芸術劇場の10年間を振り返って」(2015年1月、ニッセイ基礎研究所)より



(2) 全国や福岡県に先駆けて始まっている人口減少と高齢化

10年間の社会情勢の変化では、北九州市の高齢化と人口減少が、全国や福岡県に比べても早い段階から始まっていることが最も大きな点となっている。地域への愛着心が高い北九州市で、若者が住み続けたい、暮らし続けたいと思えるまちづくりと、子どもや高齢者を対象とした活動の充実が北九州芸術劇場に求められている。

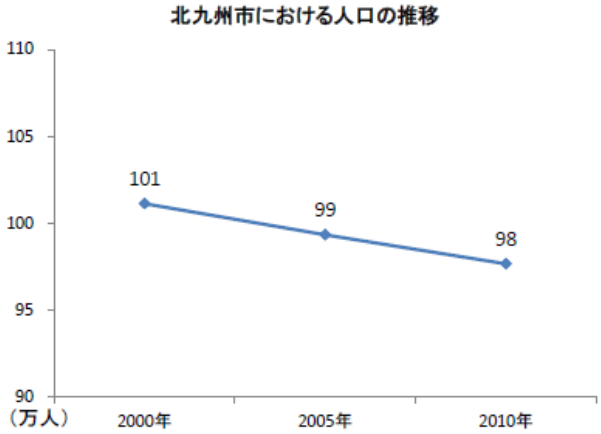
【主なポイント】

- よく知られているように、北九州市は政令指定都市の中で最も高齢人口の多い都市（➔解説⑤）とも言われていますし、減少の傾向が、全国や福岡県に比べても、実は早い段階から始まっているということがあります。
- 2012年に北九州市が、北九州市への愛着や親しみについて、若者3,000人に聞いたアンケート調査があります。そこで、「あなたは北九州市に愛着、親しみを感じていますか」という質問がありました。「とても感じている」「ある程度感じている」を合わせると、78.1％ぐらいは北九州に愛着があると回答しています。印象としては、これだけ愛着心を持っていながら人口は減少している。（中略）いかに愛着や親しみを維持させて、住み続けたい、暮らし続けたいと思ってもらえるかというまちづくりが大事になっているのではないかという気がしています。
- 2005年の市民へのアンケート調査、「北九州芸術劇場に今後実施してほしい活動」で、「子どもや高齢者などを対象とした活動を充実してほしい」が45.4％。特に高齢者の部分は、先ほどの数字を見ていても、意識しなくてはいけなくなってきているのではないかと思います。

図表5-4「北九州芸術劇場の10年間を振り返って」（2015年1月、ニッセイ基礎研究所）より

人口の推移

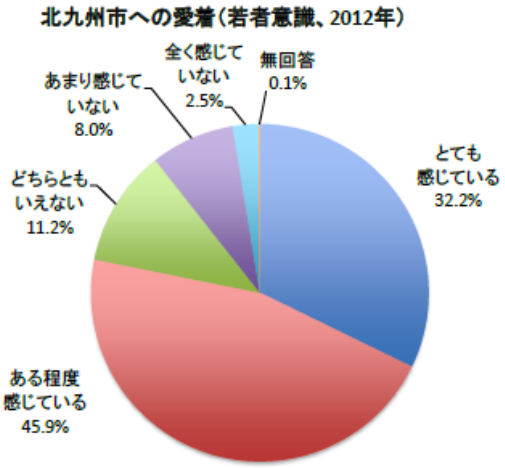
北九州市では、全国や福岡県の状況と比べて、先行して人口減少が始まっている。全国、福岡県と比べると老年人口の割合が高く、生産年齢人口と年少人口の割合が低い。［国勢調査］



若者の北九州市への愛着・親しみ

「あなたは、北九州市に愛着・親しみを感じていますか」という質問に対して、愛着・親しみを感じている若者は78.1％（「ある程度感じている」45.9％、「とても感じている」32.2％）を占めている。［『若者意識調査』アンケート報告書/12年］

調査対象は市内に在住する17歳から40歳までの市民3,000名（無作為抽出）



(3) 1990年代以降の文化政策の流れ

過去20年の文化政策を概観すると、1990年代には公的な助成制度や民間企業からの支援の多くが始まり、その後、NPO 法が成立、2001年代には文化芸術振興基本法が施行される一方で、指定管理者制度の導入により、評価への関心が高まった。2010年代には、劇場・音楽堂等の活性化に関する法律が成立し、国や地方でアーツカウンシルの動きが始まった。

【主なポイント】

- 1990年に芸術文化振興基金ができ、企業メセナ協議会ができているわけですが、今は当たり前の公的な助成制度、それから民間企業からの支援というのは、実はこの当時はほとんどありませんでした。それが90年代にできているというのがあります。そして94年に地域創造が設立されたわけですが、公共ホールの分野では、地域創造前、地域創造後と言われるくらいに大きなインパクトをもたらした財団でした。
- 90年代後半の中で一番注目するのは、NPO 法ができていることです。今は全国に5万件近い NPO がありますが、実はその第1号の認証は、北海道の「ふらの演劇工房」というところが取っています。（中略）今は、北九州にも多分、文化系の NPO はあると思いますが、NPO が公共的な文化事業のパートナーになるというのは、実はこのときに始まっているのです。
- 2000年に入ってから、皆さんご存知の文化芸術振興基本法がようやくでき、文化庁の予算が1,000億円を超えるということがありました。（中略）その後、地方自治法の改正によって2003年に指定管理者制度が導入されました。評価がこれだけ注目されるのは、指定管理者制度も大きな要因ですが、市場化テスト法など、昔の行政では考えられなかったような、とにかく効率がよければいいという考え方が重視されるようになりました。
- 2010年以降の文化政策のポイントとしては、第3次の基本的な方針が民主政権のときに決定され、劇場・音楽堂等の活性化に関する法律（劇場法）が成立し、それからアーツカウンシル（➔解説⑥）の強化が始まっていることです。

(4) 北九州芸術劇場がつくってきた公共劇場のスタンダード

2003年に開館して以降、北九州芸術劇場が公共劇場のスタンダードを形成してきたことが二つある。一つは「創る」、「観る」、「育つ」という事業の考え方で、今では同様の運営方針を掲げている公共劇場が多い。もう一つは、事業評価を行うことで、その評価の枠組みや指針が全国に流通している。それらの二点において地方都市の公共劇場のモデルの一つになっている。

【主なポイント】

- 北九州芸術劇場がある意味、公共劇場のスタンダードをつくったと思っていることが二つあります。そのうちの一つが、「創る」、「観る」、「育つ」という事業の考え方です。（中略）これをみんな少しずつ言い換えていますが、結局は同じ運営方針を掲げている劇場が非常に多い（➔解説⑦）。その概念は、でき上がってしまうと、何だか当たり前に思えても、それを最初に出すのはとても大変で、そこには非常に知恵が必要だったはずです。
- もう一つは、私の研究所がお手伝いしているので、なかなか言い出しにくいのですが、評価をするということのスタンダードも、北九州芸術劇場があったからできたものだと思います。（中略）でき上がってしまうと当たり前に見えるのですが、実は北九州芸術劇場が開館から評価に取り組んだから、今の評価の枠組みが生まれているのです。翌年、（一財）地域創造が評価指針をつくっていく（➔解説⑧）わけですが、結局、北九州芸術劇場で作成したものがスタンダードに

なり、地域創造から全国に流通し、それに基づいて評価が行われています。

- そして10年を振り返ったときに、北九州芸術劇場というものは、全国のいろいろな公共劇場の中で、ある種のリーダーといいますか、モデルになっている部分が非常にあるのではないかと思います。（中略）全国にいろいろある中でも北九州芸術劇場のやっていることは、大都市にある劇場でないと成立しないことだと思いますが、明らかに地方にある公共劇場の一つのモデルになっている気がします。

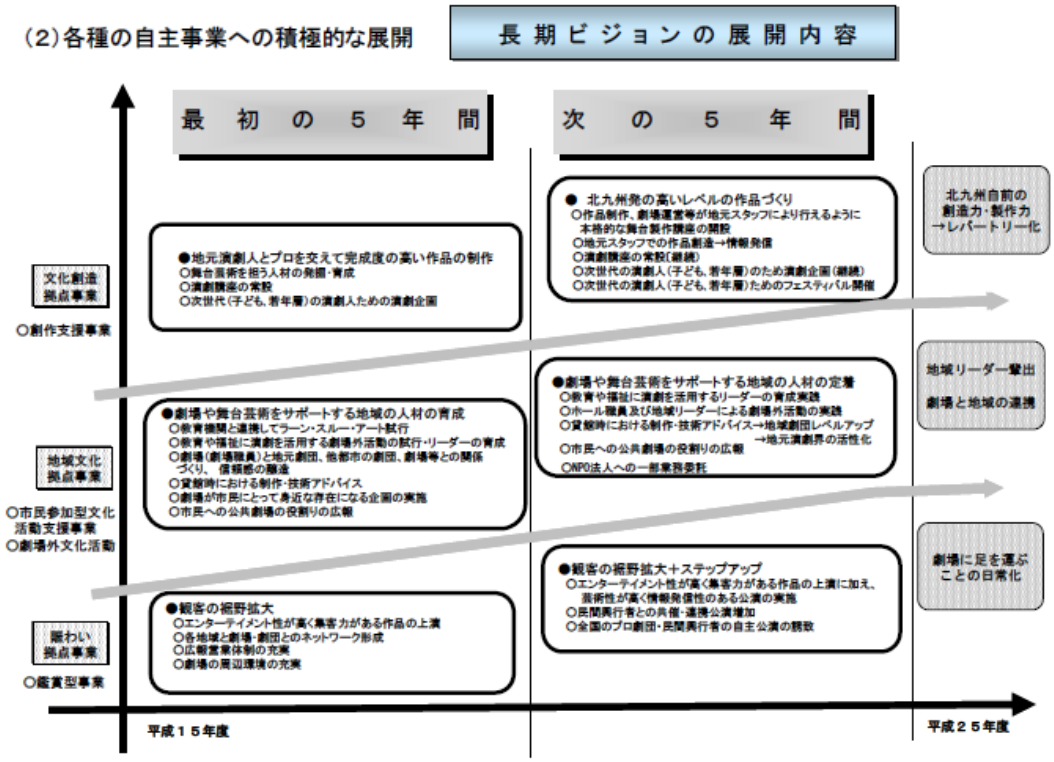
(5) 5年タームでの目標と事業の戦略

北九州芸術劇場では、開館前の事業計画書の段階で、最初の5年と次の5年の戦略を描いていた。10年を経過した時点で振り返ると、こうした5年タームでの目標と事業について、大きなビジョンに基づきながら実施してきたことの成果が現れていることが分かる。

【主なポイント】

- 例えば「（仮称）北九州芸術劇場」事業計画書の中で、私が改めて注目したのは、最初の5年と次の5年の戦略です。最初の5年間に、観客の裾野の拡大があり、エンターテインメント性が高く、集客力のある作品の上演というのがあります。
- 次の5年を見ますと、エンターテインメント性が高く、集客力のある作品に加え、芸術性が高く、情報発信性のある公演を実施するというのが出ています。これは全くそのとおりに行われていると思います。
- きちんと大きなビジョンに基づいて事業を展開し、5年タームでこうした目標を掲げ、それをきちんと10年間、そのレールといいますか、ビジョンに沿って運営されてきた。その成果が先ほど10年間を総括してご説明しましたが、そういうものにつながっているというようなことではないかと思います。

図表5-5「（仮称）北九州芸術劇場」事業計画書概要（2000年1月、北九州市）より



3．北九州芸術劇場の「次の10年」の課題や展望を考える

(1) 公共劇場を取り巻くこれからの環境変化

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、アジアの中での日本の立ち位置や、公共劇場の地域に対する役割において、日本の文化環境は大きな変化を迎える。そうした変化の中にあって、狭い領域で文化を捉えるのではなく、広い領域で捉えることで、チャンスが到来する。劇場としても、どのような分野とネットワークを組むのか、幅広い考えを持つことが必要である。

【主な発言】

- 次の10年というのは、非常に社会が変化してくると思います。2020年には東京オリンピックがあるわけです。ご存知のとおり、オリンピックはスポーツの祭典ではあるのですが、もう片方のベクトルとして文化の祭典（➔解説⑨）という形で進んでいます。（津村）
- 次は、アジアの中での日本の立ち位置がどう変化しているかも、すごく大きなポイントだと思います。国が何を目指しているのかということの中に、文化は大きな要素として外すわけにはいかないことだと思います。（津村）
- もう一つは、東日本大震災がまだまだ皆さんの記憶の中に残っていますし、まだ復興自体もそんなに進んでいるわけではないのですが、そのときに改めて感じた「地域性」ということだと思うのですが、その中で文化・芸術が何をしないといけないのか、今なお、まだ我々の中で議論されていることもあると思います。（津村）
- 文化とか公共劇場の役割を考えますと、これから10年も、厳しい時代になっていくことは間違いないと思います。社会保障費がどんどん増加する時代にあって、文化予算をどれだけ積めるのかというと、結構厳しいものがあると思います。（吉本）
- 文化をとても狭い領域でとらえてしまうと、今と同じか、場合によってはさらに厳しくなるかもしれませんが、もっと広い領域でとらえたときに、実はとてもチャンスがある時代になる可能性がある。やり方によっては、劇場というものが地域になくてはならない存在だとか、芸術というものが市民にとって重要なもの、なくてはならないものだということが、徐々にいろいろな方面から認識されるようになってくるのではないかという気がしています。（吉本）
- どういう分野とネットワークを組んでやっていくのか、どういうコンセプトで作品をつくっていくのかというところが、劇場が少し幅広い物の考え方で進めていかないといけない時代に入ってくるかもしれないと、僕もそう思います。（津村）

(2) 地方の公共劇場と、地域の伝承芸能との向き合い方

東日本大震災を契機として、地方の公共劇場が地域の伝承芸能等にどのように向き合うのかということが、重要なテーマになりつつある。継承者がいないために消えゆく地域の文化や芸能にスポットライトを当てて、若者が参加できる仕掛けをプロデュースすることで、結果として文化や芸能の原形が見直され、残していくことが、劇場にできることの一つではないか。

【主な発言】

- この10年、公共劇場が創造劇場になって、どんどん作品をつくってきています。地方でも、私たちの劇場ではつくっているわけですが、その考え方の違いには随分ギャップが生まれてきています。ですから首都圏のミッションと、地方の劇場のミッションというのが、少し考え方を変えていかないと、この先は難しくなっていくのではないかと思っています。（津村）

- 私もまだ答えがあるわけではないのですが、ただ1つ、新しい要素として、地域の伝承芸能等々とどう向き合っていくのかというプロデューサーづくりのようなものは必要になってくるかとは思います。（津村）
- 津村さんがおっしゃった地元の伝統的な芸能に向き合うことが非常に重要になるというのは、僕も本当にそう思います。そのことの大きなきっかけになったのは、東日本大震災ではないかという気がします。（吉本）
- 2020年のオリンピックに向けて、世界に誇れるようなものを新しくつくるということはもちろんあるのですけれども、もう一度日本の芸能の素晴らしさ、伝統の素晴らしさというものを振り返って、そこにもう一回、スポットライトを当てることが非常に重要だと思います。（吉本）
- 地域の中では、そうやって（継承者がいないために）消えていっているもの（文化や芸能）がたくさんありますので、例えばですが、そういう方法論のプロデュースというのもあるのかもしれません。（中略）それがとても面白いと分かったら、継承されてきている本当の原形のようなものが見直されるという可能性が十分あって、そうなると大災害があって、存続できなくなったときに、劇場の中にそのノウハウが原形も含めて残っているわけです。（津村）

(3) 北九州芸術劇場が高齢社会の新しいモデルを生み出す可能性

かつて就学・就労のために地方から東京に移住した人々が、退職後に安心して老後を過ごせる環境を地方に求めつつある。そのための環境整備で、文化は非常に重要な要素となっている。国内でもいち早く高齢化が進む北九州では、そうした環境整備の新しいモデルとなり得る。そのモデルづくりにおいて、文化・芸術や公共劇場が社会に果たす役割は、非常に大きい。

【主な発言】

- 地方から東京に出てきて、大学を出たり、働いたりして、そのままいる方もたくさんいらっしゃると思いますが、その方々が安心して地方に行って老後を過ごせるような環境を地方がどうつくれるか、実はそちらのほうが早い政策だということを言われています。そのための環境の中に、今、高齢者の方にアンケートを取りますと、一番必要なのはもちろん介護のことですが、その次に必要なのは文化らしいということ（➔解説⑩）をお聞きしました。（津村）
- 北九州市が日本の中でも高齢化が進んでいるとしますと、そのことに対して劇場や文化が何かプラスのインパクトを与える事業が実現できれば、北九州が日本のモデルになると思います。今、津村さんがおっしゃった、地方に人口が増えないということがあるとすると、お年寄りが安心して住める、しかも楽しみながら住める場所が北九州にあるらしいということになって、それで北九州の人口が増えるようなことが起こったら、それは新しいモデルになる。そういうことができる可能性が、北九州市にはあるような気が僕は非常にします。（吉本）
- 次の10年、そしてまたその次の10年というふうに、劇場をどう運営していくか、経営していくか。もちろんお年寄りの企画をいっぱいつくってくださいとか、そういうことではありません。そういう人たちが安心して来て、北九州市を終の棲家にしたいと思えるような、逆にそこにクリエイティブな仕事が生まれて、若い才能たちが、この街に集まって来るような、そういう環境をどのようにつくっていくのか。これから先は、経済も重要ですが、実は芸術がそこに果たす役割はとても大きいと思います。（津村）

(4) 北九州芸術劇場の次の10年に向けたメッセージ

北九州芸術劇場の次の10年に向けて、津村氏からは、地域の演劇人たちと劇場の関わりと、「観る」、「創る」、「育つ」の相乗効果とバランスを考えていくことを望む意見が寄せられた。また吉本氏からは、これまでの10年の成果に自信を持ち、努力を積み重ねながらも、変化を恐れずにチャレンジしながら、次の新しい公共劇場のスタンダードづくりに期待が寄せられた。

【主な発言】

- 特にうちの劇場の場合は北九州にいる演劇人たちですが、その人たちをどう引き上げていくのか。その人達の作品も上演してもらいながら、劇場の自主事業に関わってもらい、いい事業にしていけるようにすることも重要なことかと、ひょっとしたらこれから10年の仕事かもしれないという気がしております。（津村）
- そのためには、いい作品を持ってきて、いいアーティストと出会わせていくこともとても重要です。どれだけいい作品を吟味して招聘公演をやっていくか、そこをどう学芸事業に結びつけていくのか、どう創造事業に結びつけていくかというそのバランスを、今までの10年よりももっと考えていかないといけない時代が来るのかもしれません。（津村）
- 北九州芸術劇場の10年間は、ある意味で、質的にも量的にも非常にクオリティの高い運営を続けてきていて、それは並大抵のことではできないということです。全国の劇場を見ても、華々しくオープンしても、10年間、あるクオリティを維持しているというのは非常に大変なことです。ですから次の10年も、今と同じである必要は全くないですが、とにかく続けてほしいです。（吉本）
- 皆さんが働いていらっしゃる劇場は素晴らしい劇場だということをきちんと認識していただいたほうがいいなと思います。全国的なスタンダードが北九州から生まれていると申し上げました。劇場に順位をつけることはとてもできませんが、でもそれぐらい、すごい劇場で皆さんは働いていらっしゃる。これは間違いないと思います。（吉本）
- そういう劇場を実現するための先人の努力を認識して欲しい、ということです。（中略）そしてこの劇場で働いて、既にやめられている方もいると思いますが、そういう方々の積み重ねの上にこの劇場があります。だからこれは当たり前ではないということです。（吉本）
- 10年間の実績は素晴らしい。でもこのまま同じことをやっていたのでは、新たな展開はないので、変わることを恐れずに、どんどんチャレンジして、次の新しいスタンダードをつくってほしいと思います。（吉本）

4．文言等の解説・補足

解説①「（仮称）北九州芸術劇場」事業計画書

- 北九州市が2000（平成12）年11月に発表した事業計画書。「Ⅰ．事業計画方針」と「Ⅱ．具体的な事業展開」の2部構成となっている。Ⅰで「1. これまでの検討と事業計画への視点」と「2. 事業計画の考え方」が、Ⅱで「1. 地域の創造力を高めるための支援体制」と「2. 各種の自主事業への積極的な展開」が述べられている。
- この計画書で、北九州芸術劇場の整備方針は【文化拠点整備による芸術文化振興とまちづくり】、事業計画の目標は【劇場文化の創造】と明確に謳われている。
- http://www.kitakyushu-performingartscenter.or.jp/aboutus/documents/keikaku_new.pdf
（事業計画書）
- http://www.kitakyushu-performingartscenter.or.jp/aboutus/documents/keikaku_pp.pdf
（概要版）

解説② 創造劇場

- 1990年代に建設が相次いだ公立文化施設の中でも、パッケージ型の企画の「買い取り公演」による自主事業と貸館事業を中心とした従来型の事業ではなく、自主事業に予算と専門的人材を投入してプロデュース公演等を積極的に行う劇場、音楽堂が現れた。
- 主要な創造劇場を挙げると、水戸芸術館（90年）、彩の国さいたま芸術劇場（94年）、世田谷パブリックシアター（97年）、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール（98年）、新潟市民芸術文化会館りゅーとぴあ（98年）、可児市文化創造センターala（02年）、北九州芸術劇場（03年）、兵庫県立芸術文化センター（05年）、いわき芸術文化交流館アリオス（08年）など。

解説③ 公演内容への満足度の高さ

- 北九州芸術劇場の公演事業における観客アンケートによると、2003年の開館年から「公演内容」への満足度の高さが顕著で、満足層は03年度の95.6%から12年度の98.2%まで向上している。
- 2010年度に実施した専門家との座談会では「絶対にいい公演が来てくれる」という信頼感が生まれているとの評価があった。また、北九州以外の他の都市からの観客を北九州市に吸引しているとの意見があった。
- 2005年度に実施した市民アンケート調査では、北九州芸術劇場が鑑賞のきっかけになった人も約20%となっている。

解説④ 創造事業での累計入場者数

- 10年間の創造事業の事業数は累計54事業、公演回数は累計341公演、入場者数は累計約10万人となっている。
- そのうち、東京など北九州芸術劇場以外の会場での入場者数が、累計入場者数全体の59%（東京都内の公演の入場者は47%）となっており、北九州芸術劇場での入場者数を上回っている。

解説⑤ 北九州市の高齢人口の割合

- 国立社会保障・人口問題研究所の「日本の地域別将来推計人口」によると、2040年に北九州市では「65歳以上」の割合が高く37.7%となっている。
- 北九州市各区の年齢別人口割合を見ると、「65歳以上」の割合の高さがとくに顕著なのが「門司区」と「八幡東区」で、2040年には「65歳以上」が4割を超え、「15～64歳」が5割を下回り、「0～14歳」が1割を下回る推計となっている。

解説⑥ アーツカウンシル

- アーツカウンシルは日本語では「芸術評議会」等と訳され、欧米諸国、シンガポール、韓国など、世界各国で設置されている。それぞれ国の特性や文化政策の方針に沿った事業、運営が行われており、一概に定義するのは困難だが、芸術文化に対する助成を基軸に、政府と一定の距離を保ちながら、文化政策の執行を担う専門機関と言える。
- 日本芸術文化振興会の2011年2月に閣議決定された「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第3次方針）」の重点施策において、「諸外国のアーツカウンシルに相当する新たな仕組みを導入する」ことが明記され、独立行政法人日本芸術文化振興会の実施する文化芸術への支援について、その機能や体制が強化されてきた。
- 地方公共団体においても、アーツコミッション・ヨコハマ（横浜市、2007年）、沖縄版アーツカウンシル（沖縄県、2012年）、アーツカウンシル東京（東京都、2012年）、大阪アーツカウンシル（大阪府・市、2013年）など、設置が続いている。

解説⑦ 公共劇場の運営方針

- 北九州芸術劇場の「観る」、「創る」、「育つ」という3つのコンセプトは、多くの公共劇場の運営方針の中では「鑑賞事業」、「創造事業」、「育成事業（あるいは交流事業）」といった名称で方針を立てているところが多い。
- 2012年に成立した「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」では、第三条（劇場、音楽堂等の事業）の中で「実演芸術の公演を企画し、又は行うこと」、「実演芸術に関する普及啓発を行うこと」、「前各号に掲げる事業の実施に必要な人材の養成を行うこと」といった事業を総則に記載している。
- また、同法律の第四条（劇場、音楽堂等を設置し、又は運営する者の役割）には「劇場、音楽堂等を設置し、又は運営する者は、劇場、音楽堂等の事業を、それぞれその実情を踏まえつつ、自主的かつ主体的に行うことを通じて、実演芸術の水準の向上等に積極的な役割を果たすよう努めるものとする」と記載している。

解説⑧ （一財）地域創造による評価指針

- 財団法人（現・一般財団法人）地域創造が2007（平成19）年3月に発表した「公立文化施設における政策評価等のあり方に関する調査研究　―公立ホール・公立劇場の評価指針」のこと。
- 2003（平成15）年には、地方自治法の改正により、公の施設の管理に指定管理者制度が導入された。その後、公立文化施設の使命、地域の芸術文化の振興拠点としての位置づけに沿う方向での運営が必ずしも担保されないことが危惧されており、指定管理者制度の望ましい活用を促進することが肝要となっている。そのため、地方公共団体等が、地域における創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりを進める上で参考となる評価指針、資料を提供すことを調査の目的とした。
- http://www.jafra.or.jp/j/library/investigation/022-1/data/22_2.pdf（簡略版）

解説⑨ オリンピック文化プログラム

- オリンピックはスポーツだけではなく文化の祭典でもある。オリンピック憲章（2011年版）によると、第5章オリンピック競技大会の39条には「OCOG（オリンピック競技大会組織委員会）は、短くともオリンピック村の開村期間、複数の文化イベントのプログラムを計画しなければならない。このプログラムは、IOC理事会に提出して事前の承認を得るものとする」とある。
- ロンドン2012では、北京オリンピック終了時から4年間のカルチュラル・オリンピアードを開始。

2012年にはそのフィナーレとして、オリンピック開会1か月前からパラリンピック閉会までの2か月半「ロンドン2012フェスティバル」という大規模な芸術祭が開催された。いずれも英国全土で展開され、述べ4,340万人が参加した。

- http://www.nettam.jp/course/tokyo2020/1/（ネットTAM「2020年オリンピック・パラリンピックに文化の祭典を」吉本光宏）

解説⑩ 人口、経済社会等の日本の将来像に関する世論調査「地方へ移住する条件」

- 内閣府は、2014（平成26）年度に「人口、経済社会等の日本の将来像に関する世論調査」と題して、全国20歳以上の日本国籍を有する者3,000人に対する調査を発表した。
- 全回答者のうち、「都市」、「どちらかといえば都市」に住む回答者で、地方に移住してもよいと「思う」、「どちらかといえば思う」と回答した人に対して、「あなたは、どのような条件があれば地方に移住してもよいと思いますか」という質問をしている（複数回答）。
- 与えた8項目の選択肢から、最も多い回答は「教育、医療・福祉などの利便性が高いこと」（51.1%）、次いで「居住に必要な家屋や土地が安く得られること」（48.9%）、3番目に「買い物などの生活の場や文化イベント、趣味の場などが充実していること」（42.6%）となっている。
- 回答を年齢別に見た場合、70歳以上の回答者では、「買い物などの生活の場や文化イベント、趣味の場などが充実していること」（44.4%）で、「教育、医療・福祉などの利便性が高いこと」（50.0%）に次いで2番目となっている。
- http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-shourai/index.html
（世論調査報告書「人口、経済社会等の日本の将来像に関する世論調査」）